

霧陰伊香保湯煙

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

儲さて、お話も次第に申し尽し、種切れに相成りましたから、何か好い種を買出したいと存
 じまして、或お方のお供を幸い磯部いそべへ参り、それから伊香保いかほの方へまわり、遊歩かた／＼
 実地を調べて参りました伊香保土産のお話で、霧隠伊香保湯煙きりがくれいかほのゆけづりと云う標題に致して
 お聴きに入れます。これは實際有りましたお話でございます。彼の辺あは追々と養蚕さかんが盛に
 成りましたが、是は日本にっぽん第一の鴻益こうえきで、茶と生糸まいねんの毎年の産額は実に夥おびたしい事でご
 ざいます。外国人も大して之を買入れまする事で、現に昨年などは、外国へ二千万円から
 輸出したと云いますが、追々御勉強ごじゆんでございます、あの辺は山を開墾してだん／＼に
 桑畑にいたします。それにまた蚕卵紙たねがみを蚕かいこに仕立てます故、丹精はなかく、容易なもので
 は有りませんが、此の程は大分養蚕だいぶが盛で、田舎は賑やかでございます。養蚕を余り致し
 ません処ところは足利あしかの方でございます。此処こゝはまた機場はたばでございます、重おもに織物ばかり致
 します。高機たかはたを並べまして、機織女の五十人も百人も居りまして、並んで機を織つて居
 ります。機織女は何程位どのくらいな賃銀を取るものだと聞いて見ると、実に僅かな賃でございます

す。機織女を抱えますのに二種有ります。一を反織たんおりと云い、一を年季と申します。反織の方は織賃銀何円に付いて何反織なんだんと云う約定で、凡て其の織る人の熟不熟、又勤惰きんたによつて定め置くものでござります。勉強次第で主人の方でも給金を増すと云う、兎に角宅へ置いて其の者の腕前を見定めてから給料の約束を致します。又一つの年季と申しますと、一年も三年も或は七年も八年もござりますが、何十円と定めまして、其の内前金を遣やります。皆手金の前借が有ります。それで夏冬の仕着しきせを雇やといぬし主より与える物でござります。これは機織女を雇入れます時に、主人方へ雇人やといにんうけしやう請状を出しますので、若い方が機に光沢つやが有つてよいと云うので、十四五か十七八あたりの処が中々上手に織りますもので、六百三十五匆もんめ、ちつと木綿にきぬ糸が這入りまして七十寸位だと申します。其の中で二崩しなどと云う細かい縞しまは、余程手間が掛ります。一機ひとはた四反半掛に致しましても、これを織り上げて一円の賃を取りまするのは、中々容易な事ではございませぬ。機織場の後に明り通りの窓が開いて居ります。足利辺あたりでは大概これを東に開けますから、何故かと聞きましたら、夏は東から這入りまするは冷風だと云います。依つて東へ窓を開け、之をざまと云います。夏季蚊燻なつかいぶしを致します。此の蚊燻の事を、彼地あちらではくすべと申します。雨が降つたり暗かつたりすると、誠に織り辛いと申しますが、何か唄をうたわなければ退

屈致します処から、機織唄がございます。大きな声を出して見えもなく皆唄つて居ります
 様子は見て居りますと中々面白いもので、「機が織りたや織神さまと、何卒日機の織れ
 るよに」と云う唄が有ります。また小倉織おくらおりと云う織おり方かたの唄は少し違つて居ります。
 「可愛い男に新田山にたやまがよ通い小倉峠が淋しかろ」、これは新田山と桐生きりゆうの間に小倉峠と云う
 処がございます。是は桐生の人に聞きましたが、囃はやしがございますが、少し字詰りに云わな
 ければ云えません、「桐生で名高き入山書いりやまかきあげ上の番頭さんの女房に成つて見たいと丑うし
 時参りをして見たけれども未だに添われぬ」トン／＼パタ／＼と遣るのですが、まことに
 妙な唄で。儲さて、足利の町から三十一町、行道山ぎやうどうざんの方かたへ参ります道に江川村と云う所が
 有ります。此処こゝに奥木佐十郎おくのぎさじゆうろうと云つて年齢六十に成る極く堅人かたじんがございます。旧は
 戸田とだ様の御家来で三十石も頂戴したもので、明治の時勢に相成りましたから、何か商売を
 為しなければならんと云うと、機場のこと故、少しは慣れて居りますから、悴せがれの茂之助ものすけを相
 手に織娘おりこを抱えて機屋をいたしますと、明治の始めあたりは、追々機が盛つて参り大分繁
 昌ちやうで親父おとつさんも何どうか早く茂之助に善い女房よを持たせたいと思つうち、織娘の中で心掛け
 の善いおくと云うが有りまして、親父おやじの鑑識めがねでこれを茂之助に添わせると、宜よいことに
 は忽ち子供こが産うましました。総領を布卷吉つまきちと申して今年七歳になり、次は二月生れで女の児

をお定と申します。

二

扱、奥木茂之助は、只機が織り上るとちゃんど之を畳みまして綴糸を附ける。彼れもまた一役で、悉皆出来た処で此品を持ち、高崎や前橋の六齋市の立ちまする処へ往つて売るのでございますが、前橋は県庁がたちまして、大分繁昌でございまして、今は猶盛んで有りますが、料理茶屋の宜いのも有る。其の中で藤本と云う鰻屋で料理を致す家が有ります。六齋が引けますると、茂之助は何日も其家へ往つて泊りますが、一体贅沢者で、田舎の肴は喰えないなど云う事を平生申して居ります。処が此の藤本は料理が一番宜いと云うので、六齋市の前の晩から、翌日の市の時も泊り、漸々馴染となり、友達が来て共に泊ると云うような事に成りました。すると此の藤本の抱えで、小瀧と云う芸者は、もと東京浅草猿若町に居りまして、大層お客を取りました芸者で、まだ年は二十一でございしますが、悪智のあるもので、情夫ゆえに借金が出来て、仕方なしに前橋へ住替えて来ましたが、当人は何時までも田舎に居るのは厭で、早く東京へ帰りたいと思

うとお金が欲しくなつて来ます。すると、誰でも遊びに来る時などには、宅に金瓶が八つに、ダイヤモンドが八十六も有るように大法螺を吹きます。

茂「今度は何千反持つて来て、何処へ何百反置いて、此処へ何百反渡して金を何百円持つて帰る」

と云うように、大業な事を云うから、小瀧も此の茂之助を金の有る人と思ひますと、容貌も余り悪くはなし、年齢は三十三で温和やかな人ゆえ、此の人に頼り付けば私の身の上も何うか成るだろうと云うと、此方は素より東京の芸妓と云うのを当込んで掛りましたのだから、ついした事から深く成り、現を抜かして寝泊りを致しました事も度々なれども、茂之助の女房おくのは、苟且にもいやな顔を為しません。幾ら夫につらくされても更に気にも止めず、却つて夫の不始末をお父さんに取成し、

くの「私はもとは此の家へ機織に雇われた奉公人を、斯うやって若旦那に添わして下さるとは冥加至極のこと、お父さんのお鑑識に出来ない此の家の女房に成り子供まで出来ましたから、若旦那さまに幾ら辛くされようとも、旧の身分を考えれば何も云う処はございません、それは男の楽しみゆえ一人や二人情婦の有るは当「前」

と諦めて居るを宜い事にして、茂之助は些とも家へ帰つて来ません。終には増長して家

の金を持出して遊びに出て、小瀧に入いれあげ上あて仕舞いますので、追々借財が出来ましたが、親父は八ケましいから女房のおくのが内々で亭主の借金の尻つぐのを償つぐつて置きます。此のおくのは、年とし齡れい二十七だが感心なもので、亭主の借金をぼつ／＼内証で返す積りで働きまするのだが、夜よなべ業べいを掛かけても、一反半織るのは、余程上手なものでなければ出来ませんのを、おくのは一生懸命に夜業を掛かけて、毎日二反ずつ織上げませんと、亭主の拵もちえた借金が払えないと精出して遣やつて居ります。然そういう結構な女房を持つて居ながら、茂之助は心得違いにも、とうとう多分の金を以もつて彼かの小瀧を身請もつといたしました、尤もつとも其の頃の事ゆえ、身請と云つても旅の芸げいしや妓やは廉やすかつたもので、こま／＼した借金を残らず払つても、百二十円も有れば治まりがつくと云うくらいのもので、藤本の方を綺麗に極りを附けて小瀧を連れて来ましたが、宅うちへ入れる事が出来ませんから、足利の栄さかえちよう町六十三番地に、ちよつとした空家あきやが有りましたから、これを借受け、飯事まゝごとしよたい世帯いのように小瀧と二人で暮して居りましたが、小瀧は何か旨い物が喰たべたいとか、あゝいう物を織おらして来てお呉んなさいと云う我まゝ氣随であります、茂之助は宅いへ往いく了簡もなく、差向いで酒を呑み、小瀧の爪つめ弾びきを聞いて楽しんで居ります中に、商売なまを懶なまけて居るから借金に責められるが、持立ての女だから、見え張つた事ばかり為して居ります。

塩町しおちようと云う処に、相模屋さがみやと云う料理茶屋ちやが有ります。此家これは彼地あちらでは一等の家でござ

います。或日あるひのこと、桑原治平くわばらじへいと云う他所よそへ反物を卸す渋川しぶかわの商人あきんどと、茂之助は

差向いで一猪口いちつちよこ飲りながら、

治「こう茂之助さん、君イね、何も彼も心得かの有る人なり、それに前々は先まず戸田さまの御藩中であつて大小を差した人に向つて、僕が失敬な事を云うようで済みませんが、何うせ君の氣に入るまいけれども、君の妻君のような者を持つは、実に此の上ない幸福だと思

うが、おくのさんの心掛けてえものは別だね、其の代り田舎育ちだから愚図だと云うは、何うもまア何かその云うことが、私わしも田舎者だから田舎の鼻ひいき痕きをするてえ訳じやア無いが、言葉が違あなうので貴方あなたの氣に入らんか知りません、言葉は国の手形さ、亭主の留守を守るのが細君の第一の勤め、家事を治めるのが当あたり然まの処だが、如何にもその、おくのさんの家事の守りようが真実で、無駄のないようにして、織娘おりこの手当から、織上げさせてからに自分ですつかり綴糸つづりいとを附けて、直ぐに六斎むつしへ持出せるように拵おえて置くのに、貴方あなたは少し

も宅へ帰らねえのは心得違いで有りましょう、尤も今じやア別に成つておいでなさるから宅へ往く事も有りますまいが、お父さんは義理が有るから、おくのさんに彼は宅へ寄せ附けないと云う、又おくのさんは、舅の機嫌を取つて、貴方の借金の方を附けるてえ事を、僕は此間聞いて、落涙をしましたが、本当に感心な心掛だと思えました、貴方も子は可愛いだらうね」

茂「へ、子の可愛く無いものは有りません」

治「それはね君も惚れて、大金を出してからに身請までした女を、よせと云うのは僕が強気に失敬な事を云うと君思ふかは知れんが、彼のお瀧を、君に持たして置くのをよさせ度いね、廃し給え、君の為に成らんから」

茂「誰も然う云うが、何うも自分の好いた女と、一ト処で取膳で飯でも喰わなけりやア詰らんからね、何も熱く成つてると云う訳じやア無いが、僕の方からおくのを好いて持った訳でも無い、親の意を背かず厭な女だけれども仕方なしに持ったが、自分の好いた女を愛して居るのがマア男の楽しみだからね」

治「それは楽しみさ、何も僕が君の楽しみを止めてえ訳では無いが、如何にも君の細君の心に成つて見ると、僕は君の楽しみを止めたいね、彼のお瀧なるものは……君の前でお

瀧と云つては済みませんが、僕も彼あれが芸者で居る時分二三度買った事も有るが、おくのさ
 んのように、あゝ遣つて留守を守つて固くして、亭主の借金な済しまでして、留守を守つて
 居るようなら宜しいが、中々彼は守らんぜ、密夫みつぶの有る事を君知りませんかえ」

茂「え……誰か〜」

治「誰かと云うて顔色を変えて……迂濶うつかりした事は云えない、確しかと是はと云う証しょうもなし、
 何も僕がその密夫と同ひとつね衾しを為していた処を見定めた訳では無いけれども、何うも怪しいと
 云うのは、疾とうから馴染おとしの情夫に相違ちがひないようだ、君の前で云うのは何なんだが、本ほん当たに彼あれ
 が君を思つて貞女を立て通す気かも知れないが、君の処へ松五郎まつごろうと云うものが遊びに來ま
 しょう」

茂「なに彼は東京の駿河台するがだいあたりの士族で、まだ若わかえ男だが、お瀧が東京の猿若町で芸
 者を為して居た時分に鼻屑はなぢに成つた人で、今零落おちぶれて此地こちちへ來て居ると云うので、福井町ふくいまち
 に居ると云つて時々遊びに來るから僕も酒を飲合つて居るのさ」

四

治「君は氣い附かずに居るんだかね、君の留守へ彼の松五郎が来て、お瀧と差向いで飲んで、僕の這入ろうと為たのを、氣い附かないようだったから、スーツと外して出たが、其の後ご両度ほど松五郎と差向いで酒を飲んで居た処を見たが、何も差向いで酒を飲んで居たから密通をして居ると云う訳でも無いが、実は色を売って居た芸者の事だから、何んとも云えないのさ、それに君も細君に苦勞を掛けて、子まで有る身の上で、負債も嵩かさんで居られる事だから、日頃御懇意に致すに依つて申すのだが、入らざる事を云うと君に愛想をつか尽されて立腹を受け、再び取引せんと云われ、ば止むを得んが、全く君のお為を心得るから云いますので」

茂「有難う……然そう云えば彼の松五郎は度々たびく来ます」

治「度々来ましよう」

茂「私あいつ彼奴たゞア置きませんへエ……」

治「それは悪い……顔の色を変えて、たゞア置きませんなんて、刃物三昧をするのは時節が違いますよ、成程あんたは素もと戸田さまの御藩中だが、今は機屋だから機屋らしい事を為なければなりませんよ、御近所に原與左衛門はらよざえもんも居りますから、誰たれか解るものを頼んで、ていよ体あ能く彼を東京へ帰すとか、又は他たへ縁付けるとかして、話合いで別れなえといけません

ぜ、先方むこうで君に惚どれて何処どこまで居る了簡か、又は出てえ了簡なのかそれは分りませんが、君も然さうう思おもつては最もう添つちやア居ゐられますまい、岡目八目だが」

茂「いえ何なんうも御ご真ま実じつ辱かたじけない、成程な浮う氣き稼か業ぎやうの芸げい妓いしやだからちつとは為しましようけれども、私わしが大金おんぎを出だして、多分たぶんの金も有る身の上では無いが、彼あの借財あを返かへして遣やり、請出おんぎした恩誼おんぎも有るからよもやと思おもいます、彼あの時ときなど手てを合あせて、私わたしは生涯せいざい此地こゝに芸妓げいを為なして居る事かと思おもいましたが、貴方あなたのお蔭かげで足を洗あらつて素人すゐんに成なれまして、斯こんな嬉こしい事は無い、時節ときせつが違ちがうからべん／＼と何時いつまでも芸妓げいをして居る心は有ありませんと云いつて拝をんだ事も有ありますから、此この恩誼おんぎは忘わすれまいかと思おもいますが、何なんう為なたら宜よろかろう……二人ふたりの悪事あくじを見定みめ、何なんうかして松五郎まつごろうと密通ひそかして居る処ところへ踏ふみ込んで遣やりたいね」

治「じやア斯あう為なたら何なんうだらう、君きみは時々ときとき松五郎まつごろうを家うちへ呼よんで酒さけを飲のみ合あうだらう、じやア何なんうだえ、今夜こんやは淋しみしくつて夫婦ふうふ差向さむかいで酒さけを飲のんでも面白おもしろくないが、東京とうきやうの人の云いう事は面白おもしろいから松まつさんごろうを呼よんで来きなと云いつて、遅おそくまで飲のんで、夜短よみじかの時分ときぶんだから泊とどつてお出いな、是こゝから帰かへるつたつて一人身ひとりみの事ことだから、女郎買ぢやうらうかひでも始はめると宜よろくないと云いつて無理むりに止とどめてサ、貴方あなたが端はの方かたへ寝ねて、中まん央なかへお瀧たきを寝ねかして、向むかうの端はへ松五郎まつごろうを寝ねかして、貴方あなたが寝ねた振ふをして軒いびきを搔かいて居ゐる、其そのの中うちにお瀧たきが中央ちゆうじやうに居ゐるから、若もし情わ

実が有ればソレ夜中に向うの床の中へ這入るとか、男の方からお瀧の方へ足でも突込めば、貴方が跳起きて兩人をおさえ付け、実は斯ういう訳の有る事を知って居るから汝を呼んだのだと云つて、長熨斗を付けて呉れて遣る、己も男だ、素より芸妓の浮気は知つて居るから汝に呉れて遣ると云えば、錢入らずに事が済むから、然うしてあんなものは早く追出して仕舞つて、何うかおくのさんを可愛がつて上げなんし、宜くねえよ」

茂「誠に有難う」

治「然し僕が云つたと云つてはなりません」

茂「いや御親切誠に有難う」

と真実な治平の言葉に感じて宅へ帰りました。

五

其の翌日は丁度所の休み日で、

茂「今日は松五郎を呼んで一盃飲みたい」

と手紙を以て松五郎を呼びに遣ると、早速まいりました。

茂「何ぞ旨い肴は無いか」

と云うので是から三人で酒を飲み合つて居る中に、茂之助が氣を付けて見ると、何うも二人の様子が訝しい、氣が付かずに居れば然うでもないが、疑心を起して見ると、するごと成すこと訝しく見えます。ちよいと見る眼遣いの時に、眼の球が同じ横に往きながらも、松五郎の方を見る時は上の方へ往くが、僕の方を見る時は、下眼で、何んだか輕蔑して見るような眼つきだ、鱮の骨抜を皿へとりわけけるにも、僕の方には玉子の掛らない処を探して、松五郎の方へばかり沢山玉子の掛った処が往くと、一々氣になつて来ます。斯う遣つて僕にばかり盃を差すのは、僕に酒を勧め酔わして置いて寝かしてから彼奴の方へ往く了簡だろう、と思ひましたから、成たけ酒を飲まぬようにして、お膳の隅へあけて、お瀧に盃を差し、女を酔わして墮落させようと思ひ、頻りに酒を勧める。其の心の中の戦は実に修羅道地獄の境界で、三人で酒を飲んで居りましたが、松五郎は調子の好い男で、松「何うも大きに酩酊しました、もうお暇をしましょう、お暇をしましょう」

茂「まあ宜いじやア無いか、今夜は泊つて往き給え、是から福井町へ帰れば、貸座敷と云つても余り好いのは無いが色を売る処、殊に君は独身者だから遊女にでも引ツかゝると詰らんよ、一つ蚊帳の中へ這入つて三人混雑にお泊りよ」

瀧「お泊んなさいよ、お前さんは独ひとり身みだから余程遊よほどぶてえ事を聞いたが、詰あらないお銭あしを費つかつて損ばかが立つ計はかりではなく、第一身体でも悪くするといけなしい、それに余程よっぽどもう遅おそいよ、慥たしか一時でしよう」

茂「だからさ、泊いつて往いきたまえ」

と無理に引止め、片端へ茂之助が寝て、中まん央なかへお瀧、向うの端へ松五郎が寝まして、互に枕を附けると、茂之助は胸いちもつに一物有りますからわざとグウ／＼と躰ねむを搔かいて居りますが、少しも寝ない。何うして居やアがるか見て遣りたいと、眼なむを瞑むつて居ながらも時々細目に開いて、態わざとムニヤ／＼と云いながら、足をバタアリと遣る次手ついでにグルリと寝ね転がえりを打ち、仰あおもむけ向むけに成つて、横目でジイとお瀧の方へ見当を附けると、お瀧はスヤリ／＼と寝て居る様子、松五郎もグウ／＼と躰ねむを搔かいて居ますから、いまにお瀧が彼方あつちへ往いくいに相違ちがないと思つて居る中うちに、次第／＼に夜が更けて来る、渡良瀬川わたらせがわの水音高く聞えるように成ると、我慢して起きて居たいが飲める口へ少し過したので、ツイとろ／＼と茂之助が寝まして、不ふ図と眼めを覚さして見ると、お瀧が竈へっついの下を焚たき附けて居て、もう夜が白んで、松五郎は居りませんから、ア、失策しまつたと思ひ、

茂「お瀧／＼」

瀧「あい」

茂「松さんは何うしたえ」

瀧「あの誠になにだがお暇いとまごい乞いをしなければ成りませんけれども、少し用が有ると云つて早アく帰りました、又四五日内に来ると云いましたよ」

茂「はアー然うか、少し頼みたい事が有つたのに……ア、ー眠いく、何故此の頃は斯んなに眠いんだろう」

と瞞ごまかして居りましたが、何んでも己ごがトロリと寝た間に逢引まをしたに違いねえ、と疑心が晴れませんか、又一日隔おいて松五郎を呼び、酒を飲まして例いつもの通り蚊帳を釣つて三人の床を展のべ、茂之助は仰あおむけ臥おになつて横目で二人の様子を見ながら、空そらいびき軒をを搔うちく中に、余あとの二人もグウーと寝て居ます。時々細目に開いては見ますけれども、二人とも側へ寄る様子も有りません。お瀧は茂之助の方を向いて寝て居ります。

六

茂之助は、二人の様子に目を付けて居るが、何うしても知れない。何んでも是は明方人

の起る時分に何うかするに違い無い、今夜こそは、と心を締めて居る中に、漸々眠く
なつて来たから、腿を摘ツたり鼻を捻ツたりして忍耐しても次第に眠くなる、酒を飲んで
居るからいけません。明方になると、トロくと寝ました。……ア、失策つたと眼を開い
て見ると、お瀧は竈の下を焚付けて居ますが松五郎は居りません。

茂「お瀧く〜」

たき「あい」

茂「松公は何うした」

たき「早く帰りました」

茂「少し用が有るんだツけ……ア、ーまた明日呼ぼう」

と云つて同じく遣つて見たがいけません。口惜い〜と思つて不図考え付いてお瀧を呼
び、

茂「お瀧、己は東京へ金策に往つて事に寄ると横浜へ廻つて来る」

と宅を出まして、直近村の太田の知己の家に居て、日の暮れるを待つて、ソツと土手伝
いに我家へ忍んで来ました。畠には桐を作り、大樹が何十本となく植込んで有り、下は一
杯の畠に成つて居ります。裏手の灰小屋へ身を潜め、耳を引立て宅の様子を聞いて居りま

すると、お瀧が爪弾つめびきで何か弾いて居ります。此の爪弾が合図に相違ないと思つて居る中に、夜よは次第に更けわたり、しんと致すと、何処どこの寺の鐘か幽かすかにボーンと聞え、もう十二時少し廻つたかと思う時刻に、這入つて来たのは村上松五郎と云うお瀧の情夫いろおとこで、其の時は未だ鬻うが有りました。細かい縞の足利織では有りますが、一寸ちよつと気の利いた糸入の単物ひとえものに、紺献上の帯を締め、表おもて附つきのノメリの駒下駄こまげを穿はき、手拭を一寸頭のうぬ上へ載せ、垣根くねの処から這入つて往いく後姿うしろすがたを見て、茂「むう松五郎か、来たな汝」

と息を屏こらして中へ這入る様子を見て居りますと、ガラ／＼と上総戸かざきどを開けると、土間口へお瀧たけが出迎でむかひ、

たき「お這入りなさいよ」

と坐敷へ上げました。お瀧は情夫に逢うのだから嬉しい、夜よに入れば少し寒うございませぬけれども五月上旬はじめと云うので、南部なんぶの藍あゐの子持縞こもちまの袷あわせを着て、頭だるまは達磨返まがえしと云う結び髪かみに、*平ひらとの金簪きんかんを差し、斑紋ばらんの斑ふの切れた鬢びんぐし櫛くしを横の方へ差し、年齢としは廿一にじゅういちでクツキリと灰汁あくぬけ拔ひのし為よた美しい女で、

たき「何うしたえ、私の手紙てがみが往違いきちがいにでもなりやアしないかと思つて何んなにか心配

ながら様子を立聞をして居ました。

* そろばんがたの、すかしのあるかんぎし、この頃流行せしもの。

七

たき「何んにも無いが、魚屋に頼んで置いたら些つとばかり赤貝を持って来たからお食いな」
 な

松「何んだか何うも心配だなア」

たき「大丈夫だよ、お前が前橋へ来た時には私は貧乏して居たが、縁と云うものは妙だね、私が芝居町で芸妓げいしやをして居た時分に、まだ私が十五六で雛妓したじつこで居た時分からお前さんに岡惚おんぼつをして居て、皆みんなに黽なぶられて居る中に、一度が二度逢引うちをすると、其の時分には幾ら私が惚れたツてお前さんは未だ殿様株で、立派な氣の詰るような人でありましたが、思う念も遂げられたけれども、それがため借金が出来て、此こ様な田舎へ出稼でかせぎするようになつて、前橋に居た時にもお前さんに逢いたいばかりで、厭いとだけれども茂之助を金持だと思つて来て見れば、矢張り金やっばは有りやアしないんだな、彼の時は有る振りをしていた

から、此の人に取つ掴つかまつて居たら、またお前さんに逢える時節も有ろうかと来て見ると、立派な女房も有るんだよ、是まで余り道楽をしたとか云うので、実家うちへも帰られないので此様な汚ない空家を借りて世帯しやたいを持たして、爺むさいたッてお前さん茅葺屋根かやぶきから虫が落ちるだろうじやアないか、本当に私を退ひかしたッて亭主振ていしゆつて、小憎らしいのだよ、此こ間ないだの晩も種々いろく話したいことが有るんだけれども出来ないと言うのはね、茂之助が、寝て居て軒は搔くが時々動いたりバタ／＼したりして気味が悪いから、じつと我慢をして居たが、本当に松さん居難いにくいと思つておくれ、お前に逢つて斯う云う訳に成つたら、茂之助が厭に成つて何か彼奴あいつに云われると、本当に身の毛立つほど厭なんだよ、併しかし大金を出して、私の身を請出してくれた恩が有るから、黙つて居るけれども、実は厭なんだよ、私は半年でもお前さんと夫婦に成らなけりやア置かないよ、若しも夫婦に成れなければ寧いっそ死んで仕舞う積りだよ」

と話して居るを聞き、茂之助は一層怒りを増し、

茂「畜生め／＼芝居町にもと居た時分からくツついて居やアがったんだ、己と口をきくのも厭だてえやアがる、うーむ彼奴に逢いてえばツかりに己をお客にして騙だましやアがッて、畜生めむうー」

提^さげて這入ると、未だ寝は致しません、お膳の前でピツタリ寄添つて酒を飲んで居る処へ飛込んだから、少し間合が早かつたけれども、我慢が出来ませんから松五郎を目懸けて斬り込むと云う、此の事が騒動の始まりでございます。

八

東京でも他県でも色恋の道では随分自分の身を果します、間男をされて腹を立てぬものは、一人もございません、男同士でも交情^{なか}が善^よくつて手を曳^ひ合^あつて歩いてても、他^わの人とこそく耳こすりでもされますと男同士でも嫉^{ちん}妬^くを起して、彼^{あれ}は茂^{しげ}山^{やま}氏の傍^{そば}へばかり往つて居る、一体彼奴^{あいつ}は心掛けが宜くない、輕薄を以て彼^あの方^{ほう}へ取附こうと云う考えだろう、などと詰らない事を云つて怒^{おこ}ります。同じようなお膳が出来して鯛の浜焼が名^め々^い々^く皿に附いて出ましても、隣^{となり}席の人の鯛は少し大きいと腹を立て、此家^{こゝ}の亭主は甚だ不注意^{きま}極まる、鯛などは同じように揃つたのを出せば宜^いいんだ、と云つても然^そう揃つたのは有りません。また隣で蔵でも立派に建てますと、何うだえ此の頃は忌^{いや}にぎすついて来たが、成上りてえものは宜^いけねえ者だ、旦那然とした面^{つら}を為^しやアがつて、朝湯で逢つても厭に肩で風を切つ

て、彼奴が蔵を建つたので丁度南から風の這入る処を、蔵の為に坐敷が暗くなつていけません、何彼だつて好い蔵じやア有りません、毀しか何か買つて来たんでしよう、火事でも有りやア直に火が這入ります、など、自分で建てる事が出来んとグツと込上げて参りますが、誰も此の嫉妬心は離れる事は出来ませんものと見えます。況てや大金を出しまして連れて来たお瀧が、松五郎の膝へしなだれ寄つて亭主の事を悪口を云うのだから腹の立つのも道理、茂之助は無茶苦茶に斬込んで来ましたから二人は驚き、お瀧は慌て、逃げ出す。松五郎は旧は土族だけに腕に覚えの有る奴、素より剛胆の奴ゆえ左のみに驚きませんで、一歩退つて後に有りました烟草盆を取つてポカリと投げ附けると、茂之助の肩をかすつてパチリと柱へ当たると、灰は八方へ散乱致す、其の中にお瀧は一生懸命だから四巾布団を取つて後から茂之助を抱き締めましたが、女の事で身丈が低いから羽がい締めと云う訳には参りません、脇の下をお瀧に押えられたが、茂之助は無茶苦茶に刀を振り舞しながら、茂「間男見附けた、さア二人重ねて置いて四つにしようとおつと己の了簡次第だ、間男見附けた」

と死物狂いの声で唼鳴り立て、ピン／＼と鼻へ抜けて出る調子で、精神はもう頭へ上つて居ます。松五郎は何か無いかと四辺をキョロ／＼探すと、巻手と申しまする何か機

織道具で、長二尺ばかり厚み一寸も有ります卷手と云うものを取って打って掛る。

とき「誰か来ておくんないよ、家の良人が大變でございませよ、人殺イ」

と云つても田舎の事ゆえ誰有つて来るものは有りません。すると一軒隔いて隣に川村三八郎と云う者が居ますが、妙な堅いような耄けたような変な人でございまして、早く開化の道理を少し覚え、開化は宜いもんだと考えを起して居りますが、未だちよん鬻が有りまして、一体何うも此の人は聞覚えの分らぬ漢語を交せて妙な言を云います、漢語と昔のお家流の御座り奉るを一つに混ぜて人を論したり口を利くのが嗜きな人でございませ。処が今茂之助の家で女の声で、キイキイ人殺しと云うを聞き付け、捨置き難いと存じましたから飛び込んで見ると、茂之助が抜刀を振廻して居ます。松五郎を目懸けて打って掛るを抱き留め、

三「先ず待ち給え」

と云いながら茂之助の手を押え、

三「聊か待ち給え、急いては事を為損ずるから、宜しく精神を臍下丹田に納めて以て、即ち貴方ようく脳髓を鎮めずんばあるべからず、怒然として心を静め給え」

茂「へえ有難う……ございませが、どうか放して下さい」

と云う。

九

茂「三八さん、誠にお恥かしい事でございますが、此のお瀧の畜生奴、間男を引摺込んで貴方私の事を悪口して居るのを私が聞くとお知らせ、大それた枕を並べて寝に掛つたら助けちやア置かれませんか、私だつて素は御領主さまの家来で、聊か御扶持も戴いた者ゆえ親父に聞えても私が顔が立ちません、名義が廃ります、へエ」

三「いや、御尤もの事だが、能く爰の道理を君肯かんと宜しく無いで、何のような事が有ろうとも僕が斯う遣つて此処へ仲来して、今君たちの困難を発明することは公然たる処を得たりと雖も、お瀧どのが一体逃去つたる義で御座り奉つり候、茂之助さんが大金を出して身請に及び、斯る処の一軒の家まで求め、即ち何不足なく驚愕安然として居られるのを有難く存じ奉る義と心得あるべからんに、密夫を引入れてからに、何うも酒肴をとり引証をするのみならず、安眠たる事は有るまからんと存奉候、其処の道理を推測つて見ますと、尊公の腹立致さるゝ処は至極何うも是は沈黙千万たる

の理合りあいにあらずんば有るべからず」

と何んだか云う事は些ちつとも分りません、可笑おかしいのも上のほせて居りますから気が付かず茂之助は夢中で居ります。

茂「お前さんの云う事は何んだか薩張さつぱり分りませんが、男女なんによとも此の儘何うも捨置く事は出来ません、御意見に背くようです。親父の前へ対しても打棄うちちやつちやア置かれませんか、私は彼奴あいつを斬らずにやア置きません、何うぞお手をお引き下さいまし」

松「さア斬れ、二人並べて置いて斬れ……何なにイ当然あたりめえよ、密通すれば何れどだけと処分は極つて居るんだ、仮令たとえ間男まおとこをしても亭主が無闇に斬るような世の中じやア無えねや、さア何処へでも勝手に持出せ、一年の間赤い筒袖つ、つぼを着て苦役くえきをする事は素もとより承知の上だが、何も二人で枕を並べて寝てえた訳じやアなし、交際つきええぎ酒を一盃飲んで居ただけで、何も証拠しやうこの無え事を間男まおとこ呼よわりを為しやアがツて、何処どこが間男まおとこだえ」

たき「静かにしておくんなさい、三さん八はつさんにまで御苦勞を掛けて済みませんが、申し茂之助さん、何う為ためにたんだよ、お前さん能よく氣を落着けておくれよ、大金を出して私を身請えしたと云う処ところを恩に掛けて居なさるけれども、丸で私をおさんどん同様にこき遣つかつて居るじやアないか、請出こされて来て見ればお前には立派なお内儀かみさんも有つて子供まで出来

て居るじやアないか、だから実家へ這入る事も出来ないで斯んな裏家住居の所へ人を入れて、妾と云つても公然届けた訳でもなし、碌なものも着せず、いまに時節が来ると本妻にするを私を騙かして置くじやアないか、間男を為たと云われた義理かえ、何うにもお前さんから然んな事を云われる訳は有りませんよ、若しおくのさんが松さんと一緒に寝ても居たら、それは斬るとも叩るとも勝手にするが宜いけれども、私は斬られちやア詰らないから立派に出しておくんなさいよ」

茂「え、―出すも退くも有るものか」
と打ちに掛るをやつと押え留め、

三「まあ、それでは即ち人民たるもの、権利を蔑ろにすると云うものだから、先ず心を静め給え、一体当県は申すに及ばず全国一般の幸福たるをおしはかつて見れば、そのエー男女同権たる処の道を心得ずんば有るべからず、姑く男女同権はなしと雖も、此事は五把百把の論で、先ず之を薪と見做さんければならんよ、貴方の方に薪が五十把あると松五郎殿の方には薪が一把も無えから、君が方に薪が有らば己の方へ二十把許り分けて貰いてえ、いや分ける事はなんねえと云う場合に於てからに、松五郎殿が其の薪を竊んで焚くような次第と云わざるべからざる義だから、恐入り奉る訳ではない、なれど白刃を揮つ

て政府お役人の御集会を蒙むるような事に於ては慙然たる処の訳じやア無いか、先ず即ち僕も斯う遣つて爰へ這入つた事だから、兎に角僕に預け給わんければ相成らんと心得有らずんば有るべからず」

と何んだか訳の分らん事を云いながら無理遣りに押別けて、お瀧、松五郎の二人を自分の宅へ連れて参りました。

十

三八郎は再び茂之助の処へ来て、段々茂之助の胸を聞いて見ると、彼奴には愛想が尽きたから何処までも離縁をする気だが、身請の金を取返さんければならんと云い、おたきの方では手切を遣せというので掛合が面倒に成り、終にはお瀧の方へ遣るような都合になりましたが、其の金が有りませんから、三八郎が茂之助の親奥木佐十郎の処へ参り、

三「え、御免を蒙ります」

くの「おや、おいでなさいまし……お父さま、栄町の三八さまがおいでなさいましたよ」

佐「まあ、此方へ、これは好うこそ、さア何うぞ此方へ」

三「御免なさいまし……え、追々氣候も相当致しまして自然暑氣が増します事で、かるが故に御壯健の処は確と承知致し罷りあれども、存外寸間を得ず自然御無沙汰に相成りました」

佐「拙者方よりも誠に御無沙汰……好うこそ、さアくもつと此方へ……貴方はお若いに能く人の世話をなさると聞いて居りますが、誠に感心な事です」

三「いえ何う致しまして、併し貴方は何時も御壯健で」

佐「いえ最ういけません、年を老つたので何も手伝いが出来ん事に成りました」

三「恐入ります、尊君さまの御令貌の処は中々御壯健な事で……え、おくのさん、誠に御無沙汰を致しました、此の間はまた何よりの物を戴き誠に有難う……つい離れて居りますから存じながら御無沙汰に相成ります……え、今日日は少々御内談を願う義が有つて態々推参致したる理合と云うは内々の事で、何うも御尊父さまの御腹立の処は予て承知致し罷り有るが、実は茂之助殿の儀に就いて奈何とも詮術有る可からざる処の次第柄に至りまして、何とも申し様も有りません」

佐「え、彼は魔がさして居りますから頓と宅へは寄せ附けません、子は無い昔と諦めて居りますなれども、嫁に至つては如何にも孝心な者でござつて、少しも悪い顔を致さず、誠

に私を真実の親のように大切にしてくれませうから、彼んな白痴者は要りません、最うおくの一人で沢山でござる、孫も追々成人しますから、田地其の他所持の財産は皆孫等に譲り与えて奥木の相続を致させますから、貴方決して彼には構わんで下さい、金円の儀は聊かたりとも御用立下さらんが宜しい、お心得のため申上げ置きます」

三「へえ……さて何うも此処に於て謝せずんば有るべからざる事件が発して、如何とも恐入り奉ります儀で」

佐「ムー何んで、何事でござるか」

三「誠に何うも申し悪いが、何時までぐず／＼匿しても居られませんから一伍一什申上げる儀でござるが、実は彼の婦人の手を切るに三十円と云う訳で、段々先方へ掛合った処が、間男を為した覚えはないから出る処へ出ると云うのだが、出る処へ出れば第一尊君のお名前に障り、当人の耻にも成る訳で悪い、女の方から先方へついて三十円遣せと云う次第で、誠に恐入りますが三十円此の川村三八郎へ下さると思召て、御腹立では御座いませうけれども願いたい」

と云われて見れば捨て、置けず。然うもして遣つたら茂之助も家へ帰ろうかと思ひまして、右の金子を川村に渡しました。是れでお瀧は茂之助へ面当ケ間しく、わざとつい一

里と隔たぬ猿田村の取附きに山王さまの森が有ります、其の鎮守の正面に空家が有り
 ましたからこれを借り、葎簀張の掛茶店を出し、片傍へ草履草鞋を吊して商い、村
 上松五郎は八木八名田辺へ参つては天下御禁制の賭博を致してぶら／＼暮して居りま
 す。茂之助は三八郎の計いで、手切金を出しお瀧を離縁しましたが、面当に近所へ世帯
 を持ったので口惜くつて、寝ても覚めても忘れず、残念に心得て居りました。

十一

丁度盆の事でございます。茂之助は少し用が有つて町へ買物に出ますと、足利地方で
 は立派な家のお内儀さんが風呂敷包を脊負つて買物に往きます。日傘を指し包を十文字に
 脊負い、ガラ／＼下駄を穿いて豪家のお内儀さんでも買物に出ますくらいだから、お
 瀧も小包を提げて買物を致し、自分の家へ這入りに掛る処を茂之助が見付け、

茂「おい、お瀧／＼」

たき「あい……恠りしたよ、何んですえ」

茂「何んですとは何んだ、何んですもねえもんだ」

たき「何を云うんだよ、何うしたんだねえ」

茂「何うもしねえのよ、お前に少し云う事が有つて己は来たんだ、お前と云うものは何うも実に不実な女だぜ、己に済むけえ、前橋に居た時に何卒して東京へ帰りた、何時までも此処に芸者をして居ても堅くして居ちやア衆人の用いが悪うございます、此の節は厭な官員さんが這入つて来て御冗談を仰しやる事が有るから困ります、私も旧は武士の娘ですから然んな真似も為たくないと云うから、己が可愛相だと思えばこそ無理才覚をして、藤本へ掛合つて、手前の身請をして遣つた時にやア手を合せて拜んだじやアねえか、その恩を忘却して何んだ、松公に逢いたいから請出されて来たとは何んの云い草だ、何うも然ういう了簡とも知らず騙されたのは僕が愚だから仕方無えが、剩さえ三十金手切を取つて、これ見よがしに此の猿田村へ世帯を持ち、二人仲好く暮して居られた義理かえ」

たき「然んな事を今云つたつて仕方が無いじやアないか、然んなら何故彼の時出さないようにおしなさらない、一旦得心づくで離縁に成つて仕舞えば仕方が無いじやア有りませんか、もう書付まで取交して悉皆極りが付いて仕舞つて、今の私の亭主は松五郎ですよ、成程それは旧お前さんのお世話に成つた事も有りますけれども、今に成つて然んなぐず／＼した事を云うと、今度はしつぺえ返しに松五郎さんの方から理不尽に喧嘩でも仕掛ける

といけないから、後生ですから早く帰って下さい、お前さんより松さんの方が余程よっぽどやきもちやきで困るんだよ、ちよいと他の男と差向いで話でもして居ると、直ぐ嫉妬やきもちを焦やいて、訝おかしい処置振りをするつて怒るんだよ」

茂「誰だつてそれは怒るのが夫婦の情だ、お互に情有れば夫婦の情だが、お前の方では夫婦の情を尽す事が無ねえんだ、何う考えてもお前に出られちやア己の顔が立たねえんだ、聞けば松公は賭あそんでばかり居いる……賭あそんで居おる……そうだそうだが、行ゆき先の認めの無ねい松公を慕つて居ても未始終お前の身の上おぼつかねが覚束無えよ、縁有つて一度でも二度でも苦勞をした間柄だから、少しの金で松公の手が切れる事なら、何うか金の才覚はするから旧もとど通おりに話が附くめえものでも無えから、帰る腹なら帰つてくれねえか」

たき「厭だよ、シト何うしたんだね、私は素もとよりお前さんに惚れて来たんじやア無いよ、前橋のような知りもしない処へ芸者に往つて、逢う人もく馴染めないやぼな人ばかりで、厭でく堪らない処で松さんに逢つたんだが、彼あの人は私が東京に居た時分からの馴染だが、お金が無くつて氣儘に成れないから困つて居ると、お前さんが舌の長い事を云つてポンく法螺をお吹きだから、宜いい金持の旦那様と思ひ違えて、請出されて来て見ると、宅うちではお内儀さんが機を織つて働いて居るような人だから、然んな人の傍に何時までくつ附

いて居ても仕方が無いから、私も斯う云う訳に成つたんだから、何もお前さんに未練を残して帰りたいなんてえ了簡は無いよ、然んな未練な事を云うと気障きざが見えて耐たまらないよ」

茂「耐らないとは何んだ…」

たき「私はもう縁が切れて見れば赤の他人だよ、その他人へ失敬な事を云うと肯きかないよ」

茂「失敬も何も有るものか」

と腹立紛れに突いきなり然お瀧たぶさの髻を取って引倒す。

たき「何をするんだえ、お前」

茂「何もねえもんだ、殺して仕舞うのだ」

と互いに揉み合つて居たが、やがて茂之助はお瀧を組み伏せ、乗し掛つて拳を振り揚げ、五つ六つ打ぶつて居る処へ村上松五郎が帰つて参りました。

十二

村上松五郎は此の体ていを見るより飛掛り、茂之助の髻たぶさを取って仰向けに引倒し、表附の駒下駄で額の辺を蹴つたからダラ／＼と血が流れるを、

松「やい手前も愛想の尽きた女だから金まで付けて手を切つたんだろう、何をするんでえ、僕の妻に対して失敬な事をすると思はんと、僕を捕まえて無闇に打擲する事が有るかえ」

茂「僕の妻も無えもんだ……やア己の頭を割りやアがつたなア」

と口惜しいから松五郎に喰り付きに掛ると、松五郎は少しく柔術の手を心得て居りますから、茂之助の胸倉を捕えて押し付けて往きますと、彼の辺には所々に沼のような溜り水が有ります。これは水溜で、早魃の時の用意でございます。茂之助は其の水溜の沼のような処へポンと仰向けに突き落され、もんどりを打って転がり落ち、ガブ／＼やつて居るを見て、二人とも嘲笑いながら歸つて参り、

とき「私を厭という程五つ打ちやアがつたよ」

松「打たれながら勘定をする奴もねえもんだ、今度来やアがると只ア置かねえ、本当に彼奴は狂人だ、ピッタリ表を締めて置け」

と云う。此方は茂之助が泥ぼつけになつて沼から這上りましたが、松五郎に踏んだり蹴たりされたので、身体も思うように利かず、

茂「あゝ残念だが何うする事も出来ねえか」

と善い人だけに逆せ上り、ずぶ濡れたるまゝ、栄町の宅へ帰り、何うやら斯うやら身体を洗い、着物を着替えたが、袂から鱒が飛出したり、鬚の間から田螺が落ちたり致しました。茂「もう只ア置かねえ、彼奴等を殺して己も其の場で腹を切つて死ぬより他に為ようは無

いと無分別にも善い人だけに左様な心得違いを思い起しましたが、差料の脇差を親父が渡しませんから、何うかして取りたい、是は女房を頼んで取るより外に仕方が無いと、往き難いけれども勘忍して、丁度午後三時少し廻つた時分でございましょう、恐々ながら江川村へ這入りました、此処から我家に近いから、寺の門の下に立つて居たら子供でも出て来やアしないかと思つて居ります処へ、布卷吉と云う七歳になる、色の白い、下膨れな可愛らしい子供が学校から帰りでチヨコくと向うから出て来たのを見付け、

茂「おい布卷吉」

布「いやアお父さん能く来たねえ、お母さんがね案じて居るよ」

茂「あい……誠にお父さんは面目ないから、お前からお母さんに託言を云つてくれ、お祖父さんは何うした」

布「アノ祖父ちゃんはね、恐ろしく怒つてるよ、お祖父ちゃんはね、アノ彼んなやくぎな

者は無い、駄目だつて、アノ芸妓げいしやや何かなにかに、アノ迷つて、アノ此だいじんな大切だいじなお金かねを費つかう
 ようなものものは愚おろを極きわめたんだつて、それだから逆とても此この身代みしろは譲あれないから、汝てまえの親父おやは
 寄せ附よけないつて、アノ坊ぼくがお大きおくなると此この身代みしろは悉みん皆な坊ぼくにやるから、彼奴あいつを親おやと思おもう
 じゃア無い、お母つかあばかり親おやと思おもつて勉強べんきやうしろつてね、それから学校がくへ往いくの」

茂わし「私わしはお前まへのお祖父おぢいさんにもお母つかあにも面目めんぼく無い、私はもう縁ゆかりが切きれて居ゐるから他人たにんのよ
 うなものものだが、只ただ一目ひとお前まへのお母お母に逢あつて詫言わびごとを為したくつて、お父おやさんは態わざ々々忍しのんで
 来きたんだが、ちよいと内証ないしよでお母お母を呼よび出だしてくんな」

布ふ「呼よび出だせつてお母お母は来きやアしないよ、お父おやさんに内証ないしよで逢あうと、然そうするとアノ誰たれも
 彼も家うちに置おかないとお祖父おぢいちゃんちゃんが然そう云いつてるのだから、お母お母さんに来きいたつて、お父おや
 さんには逢あえないよ」

茂わし「それは然そうでも有あろうけれども、お祖父おぢいさんに内証ないしよでお母お母に逢あい、一言ひとこと詫わがしたいん
 だ、お父おやさんは最す悉す皆かり眼めが覚さめて、本ほん当とうに幸抱しあ人に成なつたと然そう云いつて、ちよいとお
 母お母さんさんを呼よんで来きてくれ」

布ふ「だつてお祖父おぢいちゃんちゃんに叱なられるもの、愚おろを極きわめた者ものに逢あうと此方こつちも愚おろになるから逢あう
 など然そう云いつたもの」

十三

茂「お前は俄かに伶俐りこうに成つたの、年が往いかなくなつて頑是がんぜが無くつても、己が馬鹿ばか氣て見えるよ、ハア―衆人みんなに笑われるも無理は無ない」

と差俯さしうつむ向むき暫さしらく涙なみだに沈しづみ居いたるが、漸しだく氣を取直として面おもてを擡あげ、袂たもとから錢入ぜにいれを取とり出だし、

茂「こゝにお錢ぜいが有あるからお前に遣やる、もう私は要いらないから是こゝだけ悉すつかり皆みなお前に遣やるから、これをお父ちちさんの形見かたみだと思おもつて、これでお母ははさんに何か買かつて貰もらいな」

布ふ「イヤ―大變だいへんにくれたね、今いままでは何処どこへ往いつてもお土産みやを買かつて来てくれた事は無ないが、そのお錢ぜいは皆みなな芸妓げいしやに入り揚あげちまつて、女郎買ぢやうがひの糠味ぬかみそ噲そが何なにうとか為なつて然そう云いつたよ、今度坊いまだにお錢ぜいをくれるようではお父ちちさんも辛抱しんぱう人に成なつたんだらう」

茂「お祖父おぢいさんに然しかう云いつてはいけないよ、お父ちちさんの來きた事ことが知しれると、あの通とほりりやかましいから、お祖父おぢいさんに内証ないしよでお母ははを呼よんでくれ、私わしに逢あつたと云いうではないよ、あのぎまの処ところから、内証ないしよで呼よんでくれ」

布「じゃア内証で往つて来るよ」

何心なく頑是なしに走つて参り、織場へ往つて見ますると、おくの夜は灯火を点けて夜業を為ようと思ひ、襷掛けに成つて居る後へ参り、

布「お母さんく」

くの「何んだよ、昨日も学校から帰ると日暮方まで遊んでいたが、余り表へ出ねえようにしな、何んだよ」

布「あのね、お父さんが来たよ」

くの「え……何処へ」

布「あのね内証でお母さんに逢つて詫言をしたい、辛抱人に成つたてえが、本当に成つたかも知れないよ、内証でお母さんに逢いたいって坊に斯様にお銭をくれたよ、お銭をくれるくらいだから辛抱人に成つたかも知れないから、お前逢つてお遣りな」

くの「逢いたいってお祖父さんが知れると、でけえ小言が出るが……決して云うじゃアねえよ、黙つて居なよ、然うして少し此の機を氣イ附けて居ろ、蚊遣火が仕掛けて有るか」

と夫婦の情で逢いたいから、直に飛出して往こうかとは思つたが、一歳になるお定の顔

を見せたいと思ひまして、これを抱起して飛んで参り、
くの「おやまア貴方は何うしておいでなせえました」

茂「あい誠に面目次第も有りません」

くの「お父さまが物堅くつて家へ寄せ附けないと云つても、おくのが附いて居ながら、事の濟んだ暁には何とか詫言をして家へ出這入りの出来るように為そうものだ、それとも私がお父さんに悪く取做しでもして居や為ないかと、貴方が腹でもたてゝいやアしないかと、そればかり心配して居やしたよ」

と云われて、流石の茂之助もおくのの貞実に感動され、暫く泣き沈みました。

茂「アノー誠は何うも面目次第もない、もう此処が辛抱の仕処だから、私は一生懸命に稼いで親父に確とした辛抱の証を見せて家へ帰る積りだが、もうあの女には懲々したから真面目になつて夫婦仲善く可愛いゝ子の顔を見て暮そうと云う心になつたよ、併し只辛抱するつたつて親父が中々得心しまいから、横浜へ往つて、少し商売の取引の事が有るか往く積りだ、これまで私は馬鹿を為て拵えた借財をお前が内証で払つてくれた借金の極りも附けなければならぬから、是非横浜へ往きたいのだが、何うも身装が悪いと衆人の用いが悪いから、羽織だけは他で才覚したが、短かい脇差を一本お父さんに内証で持つて

来てくれねえか」

十四

くの「脇差なんぞを差さねえでも宜いじやア有りませんか」

茂「脇差を差さねえと人の用いが悪いのだから持つて来てくんな」

くの「お定がこんなに大く成りやしたよ、ちよつくら抱て遣つておくんなせえ」

茂「じやア己が抱いて居るから持つて来ておくれ」

くの「あんた、大分顔の色が悪いが、詰らねえ心に成つてはいけませんよ、一人のお父さまを見送らねえ中は貴方の身体では無えから、譬え何んなに厳まじいたつて、お父さまが塩梅が悪くなつて、眼を引附ける時に来て死水を取れば、誰が何と云つても貴方の家に極つて居るから、腹の立つ事も有りますが、子供や私に免じて何うぞ軽躁な事を為ねえようにしてお呉んなせいよ」

茂「はいく……決して軽躁は為ない、是までは殺して仕舞おうかと思つた事も度々有つたが、お瀧の畜生に騙されて、子供の傍へ来る事も出来ねえ身の上になつたが、彼ん畜

生余りと云えば悪い奴だけれども、さつぱり縁を切つて仕舞つたから、彼奴は松五郎と夫婦になつたし、もう何も彼奴に念は無いから其処に心配は有りません」

くの「それでも能く思い切つたね、勘弁する時にしねえばなんねえが、それも是も子供や私に免じて勘忍したで有りましょうが……おや貴方の頭に疵が出来てるのは何う為やした」
茂「此の間中独身者で居るから、柵から物を卸そうとすると、砂鉢が落つて此様に疵が付いたのさ」

くの「あらまア然うかね、危ねえ、定めて不自由だろうと思つても、近い処だが往く事も出来ないんだ、……然んなら私が脇差を持つて来るからお定を抱いて居ておくんなさいよ」
茂「泣くといけねえから成たけ早く」
くの「はい、直に往つて参りますよ」

と是から家へ帰り、親父に知れぬように脇差をこっそり持つて来て茂之助に渡しました。
茂「有難う……さア、お定は少し泣いたよ」

くの「誠に御方便なもので……布巻吉は何うやら一人学校へ参りますし、私はお定を寝かし付けて、出来ない手で機を織つて些つとずつ借金を埋めて置くように為ます、悪い跡は善いだアから貴方も気を落さずに身体を大切にしておせえまし、何事も子供と年寄に免じ

て勘忍しておくんなさいよ」

茂「あい……あいお前のような貞実な女房を余所よそにして悪党女に騙されて迷ったのは、己の身に罰ばちが当たつたのだが、何うぞ私の留守中親父を頼みます、宜いいかえ、私は是から一旦栄町へ歸つて直すぐに立つ積りだ」

くの「お茶でも上げたいが往来なか中で」

茂「なに、お茶も何も飲みたくはない、留守中おくの身体を大切だいじにしなよ」

くの「はい、貴方あんたが横浜から歸つて来たらば、ちよつくら栄町の家を訪ねますから」

茂「あいよ、子供を頼むよ」

と何も彼も人情が分つて居ながら、諦めの附かんと云うものは因縁しんげんの然らしむる処でもございましょうが、茂之助は松五郎お瀧の二人を殺し、自分も腹を切つて死ぬ決心故、是がもうおくの、顔の見納めかと、後あとを振返りく脇差を腰に差して歸つて往く後姿を見送つて、

くの「はてな、彼の顔色は……うつかり脇差を渡したのは悪かったが、事に寄つたらお瀧さんを殺す心でも有りやア為しないか、私わしが猿田へ先へ往つて此の由をお瀧に知らせようか」
と心配して居ります。斯かくとも知らず茂之助は猿田村の取付なる彼の松五郎の掛茶屋へ

斬り込むと云う、大間違になりまする処のお話でございます。

十五

え、久しく上方へ参りまして大分御無沙汰を致しました。新聞にも僅か出しまして絶対いたしました霧隠伊香保湯煙のお話で、央なかばからお聴きに入れまする事でございますが、細かい処ところを申上げると、前々よりお読み遊ばしたお方は御退屈になりますから、直すぐに続きを申上げます、足利の江川村で茂之助が女房に別れるとき、横浜へ行くからお父さんに内ないし証ようで脇差を持って来てくれと頼みました。これは恨み累かさなるお瀧と松五郎を殺して、自分分は腹でも切つて死のうと云う無分別、七歳ななつになります男の子と生れて間もない乳呑児ちのみごを残し、年取つた親父や亭主思いの女房をも棄すてて死のうと云う心になりましたが、これは全く思案の外ほか、色情から起りました事で、此の色情では随分伶俐りこうなお方も斯様になりますことが間々あります。女房おくのは夫茂之助に別れる時に、何うも様子が変で、気になつてなりませんから、万ひよつと一ひとつして軽躁かるはずみな事をしてはならぬと、貞女なおくのでございますから、一歳ひとつになりますおさだと申す赤児あかんぼを十文字に負おぶい、鼠と紺の子持縞の足利織の単ひ

物とえものに幅の狭い帯をひっかけに結び、番下駄を穿はいて暮方から江川村を出まして、猿田

の松五郎の宅へ参りました。見世は片付けて仕舞い、縁台も内へ入れて一かた方くへ腰障子が建つて居ります、なれども暑い時分でございますから、表は片かた々くを明け放し、此処に竹すだれを掛け、お瀧が一人留守をして居りますと、門口から、

おくの「はい、御免なさいまし」

お瀧「何方どなたでございますか」

くの「松五郎さんのお宅は此方こち様らでございますか」

瀧「はい手前てまいでございますが、何方いずれからお出でゞす」

くの「はい貴方あなたがお瀧さんでございますか」

瀧「はい私が瀧でございますが何方どちららおいでゞすか」

くの「はいお初にお目にかゝりまして、お噂には毎度承知いたして居りやんしたけれども、是迄はおかしな訳で、染しみ々々お目にかゝる事も出来ませんで、私やア茂之助の女房のおくのと申す不束者でございます、何うかお見知り置かれましてお心安う願います」

瀧「おや然そうですか、私もおかしなわけで、かけ違つてお目にかゝりませんでした、能くまア斯んな処へお出で下すつて、まア此方こちらへお上んなさい、何だか暗くつていけません

から、今灯を点けます、這入口は蚊が刺していけませんから、まア此方へ」

くの「はい有難うございます、まア是ア詰らん物でございませうけれども、私が夜業に燃揚げて置いたので、使うには丈夫一式に丹誠した糸でございませう、染めた方は沢山無えで、白と二色燃つて来ました、誠に少しばいで、ほんのお前様のお使い料になさるだけの事でございます」

瀧「はいそれはまア何よりの品を有難うございます、さアずっと此方へお出でなさいませう、おや子供衆を負ぶで、其処は蚊が刺しますから団扇をお遣いなすつて」

くの「はい、団扇は持つて居ります、私ア貴方に少しお目にかゝつてお願い申したいと存じまして」

と是からおくのが話し出します事は明日

十六

くの「家へはちよつくら買物に往くつて嘘を吐いて参りましたが、私が良人の茂之助もまア御縁があつて、あんたを前橋から呼ばつて栄町に世帯を持たせて置いた事は聞いて居

ましたけれども、男の働きで 当 前あたりまえのこと、思えましても、年寄てえ者は取越苦勞して、私にあんた義理もあるだから、やかましく云いますし、やかましく云えば意故地いこじになつて家へも帰んねえようにする彼れが氣象でござりまして、あんな我儘な氣象、あんたも知つての通り誠に心配しんべえして、まア縁が切れても男の未練で、ひよつとして貴方あんたのとけえでも来て、詰らねえ事でもハア言い出せば、貴方だつても、まア松五郎さんでも黙つては居なさらねえ、縁の切れた所とけ来て、たわいもねえ事をいえば合点しねえぞと云えば、売言葉に買言葉、何どんなえらい事になるかも知れねえとまア、女の狭せめえ心で誠に案じることござります、年寄子供を叩ひかえて 軽 躁かるはずみな事がなければ宜よいがと思つて居ます処ところの、昨日私きのうが処とけえねえ……少し家へ来られねえだけでも、逢いてえツて来た様子が誠に案じられますから、それからまア何うかしてと思つて居ましたけれども、太田へ参めえつたことを聞きましたから、また此方こちらへでも来きめえか、ひよつとして軽躁な事がありはすめえかと心配しんべえして、栄町へ参めえりましたら栄町の世帯は仕舞つて、太田の方へ行つたてえから、氣になつてなんねえで、此方へ参りましたが、若もし茂之助が此処こけへ参りまして、どんなハア詰らねえことを言いかけても、あんた取合わずにまア柳に受けて居て下さると、荒あれえことも為しめえから、打遣うつちやらかして居て下さつて、其の時云つた事が貴方のお氣に障れば、其の時ほど

んなに胆きもが入れれる事があつても、後あとでまた気の静まるときに意見をすれば聴入れてくれる人でござりますから、何うか若し参りましたらば、何卒どうぞあんた逆らわずに柳に受けてお置き下さるようにお願ねげえ申してえもので」

瀧「はい、それで御座いますか、困りますねえどうも、まア貴方あんたには初めてお目にかゝりましたが、茂之助さんは前橋の六斎の市のたんびにお出でなすつたが、お前さんという立派なお内儀かみさんや子供のある事は存じません、当人も隠して女房はないから斯うもしてやると仰しやつて下さるから、頼り少い身体で、そんならばと云つて来て見ると、子供衆しゆもあり、お内儀さんも在あつて、手前てまえは家に置かれなからと栄町へ裏うら店同様な所ところへ世帯しよたいを持たして、何だか雇ばい婆ばあとも妾めかけともつかぬ様な仕合しあわせで、私も詰らねえから、何しろ身を固めるには夫を持たなければ心細いからと思ひまして、それで浮気をしたてえ訳じやありませんが、今の松さんが前橋へ来なすつたが、私も東京とうけいに居た時分からねえ馴染のお方で、恩になつた事もあり、それに少しハイ約束をした事もありました、それが縁でちよくく遊びに来たのを茂之助さんが嫉妬やきもちをやいて、むずかしい事を言つたから話も破ぼれて仕舞つて、まア示談はなしあいで離縁になつたのですよ、それから斯うやつて夫婦になつて居ると、未練らしく此の間も来て酷ひどい事を言つて、私の髻たぶさを把とつて引摺り倒し、散々に殴ぶちましたか

ら、私も口惜くやしいから了簡りょうかんしませんでしたが、それは兎も角もまた茂之助さんが来て種々いろんな事をいうのをハイ／＼と柳やなぎに受けて居おれば、また増長ぞうちやうして手出しをする、そうなれば良うちの人ひとも腹を立て、茂之助さんを手込てこみに打擲うちなしまいものでもない……まアあるかないか知れませんが、他人ひとの家うちへ来て、縁ゆかりの切れた人が刃物三昧やぶらでもすれば聴ききません、松さんも元は武さむらい士しだから黙もくつては居ゐりません、お互たがひいに男同士おとこどうしで切り合あつて、松さんがまた茂之助さんに傷きずでも付けまいものでも有りませんから、それだけはお断ことわり申まして置おきます」

十七

くの「はい、それが心配しんぱいでござります、そんだから苦勞くろうでござりますから、斯あうやつて此こ処けえ参まつたのです、どうか軽かる躁はすみな事ことをして参まるゆえような事がござりましたら、松五郎さんも腹はらも立ちましようけれども私わしや年寄としよ子供こどもに免まじて下くだすつて、私わらを可愛あい相あと思おもつて、そこだけ御勘ご弁べんなすつて……時経ときつてまた意見を致いたす事こともござりますから、何なにうぞお願ねがい、お瀧たきさん」

と田舎氣質かたぎの正直ちかじきに手を突き、涙ぐんで頼たのむので、流石りうせきの悪婦あくふも氣きの毒どくに思い、

瀧 「まあ私の一了簡にも行きませんから、福井町の店受の処へ往つて松さんが遊んで居ますから、私は是から行つて呼んで来ましようから、松さんにお前さんが逢つて頼んで下さい、ね、そうして相談づくに致しましょう、私も気味が悪い、松さんは留守勝だから無闇な事をして刃物三昧でもされると困りますから」

くの 「私もお目にかゝつて是非お頼み申しやすが、貴方からも能くお話なすつて……年寄も居りますが、私も機織奉公に参りまして、それが縁になつて嫁きましたのだから、誠に私が中へ這入つて困りやすから、どうかお願いで」

瀧 「宜うございます、私が往つて来ます……アノ明けッ放して置きますから、貴方さん少し留守居をして下さい」

くの 「はい、宜しゆうござります、お留守いたします、帰つてお茶でも上る様にお湯をかけて置きます」

瀧 「じゃア私は一寸往つて来るから、アノ子供衆に乳でも吞まして緩くりしておいでなさい」

と台所へ立つて、ぶら提灯を提げて、福井町までは近い処でございますから出て往きました。すると秋の空の変わり易く、ドードーツと一迅吹いて来ます風が冷たい風、「夕立や

風から先に濡れて来る」と云う雨気で、頓てポツリ／＼とやッて来ました、日覆になつた葦簀よしずに雨が当るかと思つううちに、バラ／＼と大粒が降つて来ました。あゝ降出して来て困るだらうと思つて居ると、ドーと吹込む風に灯取虫あかりとりでも来たか行灯あんどうの火を消して真暗まっくらになりましたから、おくのは手探りで火打箱は何処にあるかと台所へ探しに参つた。其の頃はまだマツチは田舎では用いませぬ、火口箱ほくちばこを探しに参りますると、雨は益々烈しくドツ／＼と吹降ふきぶりに降出して来る。赤城の方から雷鳴かみなりがゴロ／＼雷光いなびかりがピカ／＼その降る中へ手拭でスットコ冠かむりをした奥木茂之助は、裏と表の目釘しめを湿して、逆せ上つて人を殺そうと思つるので眼も暗くらんで居る。裏手へそつと忍んで来て見ると、ピカ／＼とさし込む雷光に女の姿が見えたから、お瀧が彼処あそこに居ると心得、現在我が女房とも知らず、引抜いた一刀を持つて飛掛かつた。おくのは真暗闇に人が飛掛かつたから驚き、
 くの「何方どなたか」

と云う声も雷鳴らいめいの烈しいので聞えませぬ。素より逆せ上つた茂之助ゆえ無慚にも我が女房おおくのが負おぶつて居る乳呑児の上から突通したから堪りませぬ。おくのは

「アツ」

といつて倒れた。茂之助は乗つか／＼つて、

茂「此の悪党思い知つたか」

と力に任して二ツ三ツ抉こじりましたから、無慙にもおくのは、一歳ひとつになるお定を負つたなり殺されました。

茂「あゝ……畜生め……あゝ能くもく己に耻をかゝしたな、足利ばかりの耻ツかきじやアねえぞ前橋の友達までに耻をかいて居いるぞ、畜生め、此の位の事は当あたり然まえだ……松五郎は居るか」

と探したが他に人も居りません。

茂「松五郎は居ないか口惜くやしい」

とガタ／＼慄ふるえながら血だらけの脇差を提げて探りながら、柄杓ひしゃくで水を一杯飲みました。

十八

茂之助が柄杓で水を飲んで居るうち、夕立も霽はれて忽たちまちに雲が切れると、十七日の月影が在あり／＼と映さします。

茂「畜生め、能くも己に耻をかゝせやアがったな」

と髻たぶざとを把とつて引起し、窓から映します月影にて見ると、我が女房おくのでございますから茂之助は恟びつりして、これは己の家うちじゃアないか知らんと四辺あたりをキョトク見て死骸へ眼を着けると、おくのが子供を負おぶつたなりに死んで居ります。あゝ、おさだ迄かと思うとペタ々と臀しりもち餅もちを搗ついて、ただ夢のような心持で、呆然ぼんやりとして四辺を見まわし、頓やがて気が付いたと見えて、

茂「おくの……堪忍してくんねえよ……ア、何うしてお前は此処へ来た……間違いだよ、お前を殺すのじゃアない、お瀧松五郎の畜生を二人諸共殺そうと思つて来たに、何うしてお前此処に居たのか、お前を殺そうと思つたのじゃアない……あゝ済まねえ、腹一杯苦勞をさせて、お前を殺して済まねえ、己は罰ばちがあたつて此様こんな事になったのだ……あゝお前ばかり殺しやアしねえ……おくの確しつかりして呉れ、おくのく」

と呼ぶ声が耳へ這入つたか、我に回かえつて片手を漸々出して茂之助の手へ緋すがつて、
くの「茂之助さん間違いだらうね」

茂「ウーム間違えだ、お瀧を殺そうと思つてお前を殺したのだ、堪忍してくれよ」
くの「はい然そうだろうと思つて……知つて居りやす、私わしはもう逆とても助からぬ、こんな事も

あろうかと思つたから、私は此家え間違の出来さねえように頼みに来ただけでも、最早仕様がねえが、おさだが可愛相だよ……お父さんの身を貴方、心にかけて大切にしなさんしよ」

茂「あゝ己も生きては居ない……堪忍してくれ、あゝ済まねえ事をした」

と云つている内におくのは絶命れましたから、茂之助は只呆然して暫く考えて居ましたが、ふら／＼ツと起上つて、自分の帯を解いて竈の角から釜の蓋へ足を掛けて、梁へ二つ三つ巻きつけ、頸へかけて向うへポンと飛んで遂に縊れて死にました。誠に情ないこととで。処へ提灯を点けて松五郎とお灌は雨も止みましたから帰つて来て見ると此の始末。さア何うしたのだろう鮮血淋漓、一人は吊下つて居るから驚きまして、隣と云つても遠うございますから駈出して人を聚めて来ましたが、此の儘に棄て置く訳にも往きません、此の段を直ぐ訴えて宜かろうと云うので、それから警察署へ訴える事に相成りまして、検死の査官が来られてお調べになりました、直ぐ奥木佐十郎の処へお呼出しでございます。佐十郎も一通りならん驚きで、布卷吉を連れて飛んで参りまして、段々お調べになつて、尚お松五郎夫婦の者を調べると、茂之助が軽躁な事を為はしないかと案じて来たから、どうか其様な事のないようにと存じて頼まれても、一存で挨拶も出来ませんから、夫を福

井町へ呼びに往きますると、大雨に雷鳴、是々の間手間を取って帰って見ますると、留守中に斯様な次第と云う。段々調べると、成程店受の処に居りました時間もありませんし、江川村から出た時間もありませんから全く間違えて女房を殺し、転倒して縊れて死んだ事であると分つたので事果てましたから、死骸はまず佐十郎方へ引取らせて、野辺送りをいたしました。初めは少しむずかしかつたが、松五郎お瀧も別に処分もありませんで、それなりに事済みになりましたが、松五郎お瀧は此の辺の村の者に憎まれて居られませんから、早々世帯を仕舞つて、信州へと云うので旅立ちました。

十九

お話二つに分れまして、これは明治七年六月の末のお話でござります。夏になると湯治場が流行りますが、明治七年あたりは湯治場がまだそろ／＼是から流行つて来ようと云う端緒でございました。熱海、修善寺、箱根などは古い温泉場でござりますが、近年は流行いたして、また塩原の温泉が出来、或は湯河原でござりますの、又は上州に名高い草津の温泉などがございます。先達て私は或るお方のお供をいたして、堀越團十郎

と二人で草津へ参つて、彼の温泉に居りましたが、彼処は山へ登るので車が利きません。矢張り昔のように開けません、近郷の人が入浴に参りますが、当今は外国人が大分参りまして入浴いたしません。温泉場でもやり尽しまして、斯うしたらお客様の御意に入るか、斯う云う風に家を建てようかなどと心配いたして、追々開けて参る様子でございませぬ、其の中にも丁度近くつて伊香保と云う処は宜い処で、海面から二千五百尺高いと云う、空気は誠によく流通いたして、それから湯が諸病に利くと云う宜しい処で、脚気に宜しく、産後血の道に宜しく、子宮病に宜しく、肺病に宜しく、癩麻質斯は素よりの事、これが私が申す訳ではございませぬ、独逸のお医者様が仰しやつたので、日本温泉論にあります。それで、随分大臣方がお出向になります。何う云うものか、俚諺に、旅籠屋のことを大屋くくと申します。此の大屋の勢いは大したもので、伊香保には結構なのが沢山ございませぬ、中にも名高いのは、木暮金太夫、木暮武太夫、永井喜八郎、木暮八郎と云うのが一等宜いと彼地で申します。木暮八郎の三階へ参つて居ます客は、靈岸島川口町で橋本幸三郎と申して、お邸へお出入を致して、昔からお大名の旗下の御用を達したもので、只今でも御用を達す処もございませぬ、まア下質を取つて金貸と云うのだから金満家でございませぬ。お父さんは亡つて、当人は相続人になりました。只た一人のお母さんが

ありまして、幸三郎に嫁を貰った処が、三年目に肺病に罹りまして、佐藤先生と橋本先生にも診て貰ったが、思うようでなく、到頭死去りました。今は独身で嫁を探して居る身体、まだ年が三十七と云うので盛んでございます。箱根へ湯治に行つたが面白くない、今度は伊香保へ行つて見よう、一人では淋しい、連れをと云うので、是れは木挽町三丁目の岡村由兵衛と云う袋物商と云うと体が宜しいが、仲買をしてお出入先から何品をと云うと、直に宮川へ駈付けるといふ間半分で面白い人で、また一人は伴廻り、これは渋川の車夫で、車に乗つて来た処が、正直で能く働き、気の利いた男で、しまいは馴染になつて、正直者だから次の間に居れ、帰途は又乗ると云う、此方も居得だから小用を達して茶をいれたり何かする。年はまだ二十八だが、車夫には似合わぬ好い男でございます。今日は昼飯を食つてから少し運動をしようと思つて出かけました。

二十

只今では彼処は變りまして湯本へ行きます道がつき、あれから二ツ嶽の方へ参る新道も出来ましたが、其の頃はそう云う処はありませんから、まず伊香保神社へ行くより外に道

はございませぬ。石坂を上つて行くと二軒茶屋があります、遠眼鏡が出て居りますが曇つてゝ些とも見えませぬ、却つて只見る方が見えるくらいで、ほんの景気に並んで居るのでございませぬ。お婆さんが茶を売つて居る処へ三人連で浴衣に兵子帯の形姿で這入ろうとすると、何を思つたか掛茶屋の方を見て、車夫の峯松が石坂をトン／＼駈下りました。

幸「おい……峯公何うしたのだ、駈下りたじやアねえか」

由「其処まで来て駈下りましたが、何か忘れ物でもしたのでしょうか、貴方がカバンを提げて居らつしやるとキョト／＼して居ます、初めて伊香保へ来たから華族さんや官員さんの奥様や、お嬢さん達の衣装が綺麗で、日に二三度も着替えて御運動だから、彼奴は安物買が勸業場へ来たようにキョト／＼して、危い石坂を駈下りたりなにかするので、今は何で行つたか分りませんが、時々能く物を買つて食う男で、随分意地の穢い男で」

幸「何しろ何処かへ休もうじやアねえか」

と傍の茶見世へ這入ると、其処に四十八九になる婦人が居ります。髪は小さい丸髷に結い、姿も堅い拵えで柔和しい内儀さんでございませぬ、尾張焼の湯呑の怪しいのへ桜を入れて汲んで出す。其のお盆は伊香保で出来ませぬ括盆で。

女「此方へお掛けなさいまし」

幸「好い景色だな、ちようど今頃は好い景色に向う時だ」

女「はい、御緩りとお休みなさいまし……おや、貴方は橋本の幸さんじゃアございませんか」

幸「おや、これは御新造さん……何うして貴方が此処に」

女「誠にどうもお珍らしいたつて久しくお目に懸りませんが、まア御承知の通りお上も亡なりまして、私も此様な処で、お茶を売るまでに零落れましたが貴方はまア大層お立派におなりなすつて、見違えますようで……おや由兵衛さん」

由「これは御新造さん……これはどうも村上の御新造さん、此処でお茶を売つて居らつしやるとは何様探報者でも気が付きません……どうしてまア」

女「どうもお恥かしくつて……実は貴方さんも御存じの通り、旦那様も彼ア云う訳になりましてねえ、仕方なく私ももう段々身体も悪し、微禄ましてしまつたから、何を内職にするにも身体が本だから、其様にくよくよせず湯治に行つたら宜かろうと勧めてくれる者もありまして、此方の方に縁の家来筋の者が居りましたから、これへ参つて湯治をすると、湯中がしてドツと悪くなり、五週間ばかり居るうちにお恥かしいお話でございしますが、金を使い果してしまい、何うする事も出来なくなつたのを、木暮武太夫と申す大家さまが

眞実な人で、種々云つてくれましたから、お前さん此処へ参ると、望月と云う書画なぞの世話をする人が在つて、其の人に道具を東京で買つてもらい、此処へ茶見世を出して居りますのも、大家さん方に願つてお話をして、とうとうまア此の五月の末からこんな事をして居りますが、ほんの湯治かた／＼やつて居りますので、初めは間が悪くつて知つた方に逢いますと顔から火が出るようで、茶を汲んで出す事も出来ませんでした。漸く此の頃は馴れて参りました……お懐しい東京の方を見ると、思い出して、東京のようすも大層違つたろうと思ひますが、浅草の観音様は相変らず彼処にありましようねえ」

由「え、ありますとも、外に地面がありませんから」

二十一

由「御新造様、私は余計な事を申すようでございますが、岡野三太夫様などは、以前は殿様くくと申上げたお方だが、拙宅へお手紙で無心をなさるとは、どのくらいの御苦労か知れませんが、私に手を突いて御無心をなさる有様にお成りなすつたかと、少し恵むと云う程な訳ではござりませんが、それから見ると御新造様なんぞは御気楽で、何んだって朝夕斯

様な好い景色を庭のように見て居る、此のくらしいな御養生はありません、お気楽でげしよ
う」

女「皆来る方は其様ことを云いますが、お前さん方は偶に来るからで、朝夕のべつゞけに
山を見ると山に倦々しますよ」

由「そうでしょう、こりやアそうでしょう、私の懇意な者が高輪に茶店を出して、旧幕
時分で、可笑しかつた、帆かけ船は見えるし、二十六夜の月を見て結構でしょうと云うと、
左様でない、通るものは牛馬ばかりで、鳥流しに遇つたようだと云つたが、これは左様
でげしよう、併し男子山と子持山の間から足尾庚申山が見える、男子子持の両山の
景色などは好いねえ……あゝ子持で思い出したが、お嬢さんはお身大きくおなりでしよ
う」

女「あれも十九になります、お耻かしい事ではありますが、詮方なしに身過世渡、下の福
くだやりゆうぞう
田屋龍藏 親分さんの処で抱えもすると云うので、行立たぬから、今では小峰と云つて芸
いしや
妓になつて居ります」

由「お嬢様が……だからねえ、もうお鼻などは垂れやアしますまい、お少さい時分にお馴
染の方が芸妓に出て、お座敷でお客様に世辞を云うようになるのだから、此方はベコと禿

げるのはあたりまえ当前で、左様そうでげすか……旦那だんなちようど好いのでげす」

幸「御新造様、旧来のお馴染である旦那様にも種々いろいろ御懇命ごこんめいを蒙まかむったこともありすから、またお力になるお話もありましよう、またお嬢様にも久し振でお目にかゝりたい、事に寄つたら明日あしたの晩むこうやま向山へお嬢様を連れておいでなさい、あなたは是非連れて来てください」

女「有難うございます、どんなに悦ぶか知れませんが、東京の知つた方がお出でになると帰りたいと涙ぐんで話すので、中には連れて行くゆこうと云う人もありますが、私があるから行くゆ訳にも行きませんが、私も行きたいと云うと、婆ばアが一緒じゃア困ると仰しやる、それゆえまア此処に居ります……お前さんは相変らずお元気で」

幸「何うも仕方がありません、親父が死んでからは何も為しません、只遊び一方で仕様がななまげものい、怠惰者なまげものになつて仕様がありません」

由「御苦労なすつた御様子ですが、まだ御新造さんなどは宜しいので、先刻木暮ききりへ漬物を売りに来た方は五百石取つたとか云う、ソレ彼のあ色の白い伊香保の木瓜きうり見たいな人で、彼の人ひとが元はお旗下だてえから、人間の行ゆくすえ末は分りません……じゃア御新造さん私も種々お話もありますから翌あすの晩」

女「屹度見世を仕舞うと参ります、もう仕舞いましょうと思います」

由「翌の晩ですよ、左様なら」

と其処そこを出て暗くなつて歸つて来ましたが、木暮八郎の三階の八畳と六畳の座敷を借りて居る二人連れ、婦人の若い方かたの女中が癩しやくが起つて、お附の女中が落着く様おちつに押しおして居るが、一人では間に合いません、次の間に居た車夫の峰松が手伝つてバタ／＼して居る処へ歸つて来ました。

二十二

峰「由さん、今手こずつたよ」

由「何うした」

峰「今お癩で困りますから、早々障子を開けて這入つておくんなせえ」

由「なにを」

峰「癩が起つたので」

由「男が癩を起すのは珍らしいじやアねえか」

峰「私じゃアねえ、隣座敷の御新造様が起したので」

由「なに御新造がお癩」

とガラリ障子を明けて見ると、御新造は齒を嚙メ《くいし》め反そつて居おるを女中が押し居おるが力の強いもので男の二三人ぐらい跳はねかえしますから、由兵衛が飛込んで押えます。

女「有難うございます、此方こなたさま様で助かります、女一人では仕様がございません」

由「宜しゅうございます、此方こなたへ首をおかけなさいまして、脊割せわりを脛すねで押せば宜しいので、何しろお薬を……旦那お薬を」

幸「ナニ薬……峰公、床の間に己のカバンがあるから、あれを持って来な」

峰「カバン」

幸「早く〜」

峰「カバンはございません……貴方が其処そこに持って居らっしゃる」

幸「お、そうか……神薬しんやくがある、早く水を」

というので薬を飲ませると好塩梅いよくに薬も通すつて下さる様子

「反らしちゃアいけない……」

由「あ痛いたえ石頭ぶつを打付けて……旦那ナニを……咒まじいでげすから貴方の下帯を外して貸して

下さい下帯で釣りを掛けると好いので、私のは越中でいけません、貴君あなたのは絹でげしよ
う」

幸「失礼な、僕の下帯で奥様方を……」

由「だつて御病気の時は、そんなことを云つたつて仕方ありません、咒いでげすから、失礼だつて構いません」

幸「じゃアまだ締めないのがあるからあれを」

由「締めないのはいけません、締めたのが宜しいので」

幸「だつて此処で脱とれるものか」

とやがて新しい絹の下帯を持つて来て釣りをかけ漸くに治まりも着きました。

女「なに好よいよ、もう宜しい、岩いわや治まったから心配せんで宜しいよ」

岩「貴方どんなに心配したか知れませんが、お隣のお客様お三方がお出で下すつて、結構なお薬を戴き治まりが着いたのでございます、確しつかり遊ばせ」

女「宜よいよ、あゝ……有難うございます、皆さんもう宜しゅうござります」

由「恐れ入りました、お癩は治まると後あとはケロく致します……中々お強いお癩で」

峰「私の拇おやゆび指はこんなになりました……随分強いお癩で」

幸「お薬はまだ私の方にありますから、これは此処へ置いて参ります、お構いなくおあがりなすつて」

岩「誠に有難う存じます、お若衆様わかいしゅさまに一と通りならんお世話になりました恐れ入ります……貴方能くお礼を仰しやいな」

女「有難うございます」

幸「左様にお礼では痛み入ります」

と是から自分の座敷へ帰りまして、

幸「強ひどいお癩だねえ」

由「強いたつて癩の起るような身体つきであるよ、瘦せぎすで、齒を噛くいめて居る処は人情本にあるようです、好よい女でげすな、伊香保で運動して居る奥様方や御新造さん方を見るに一番別嬪はお隣の御新造で、彼あのくれえ品が宜くって、あのくれえ身体つきの好いのはありません、外のは随分お形装なりは結構で、出るたんびに変わり、でこゝの姿で居ても感心しない、起たつて歩く処を見ると、丈せがづんづら低かったり、お臀しりが大きかったりするが、お隣の御新造は別で」

幸「峰公ひどかツたろう」

由「だけれども奥様のお癪を押すのは嬉しかったろう」

峰「そうさ、初めは嬉しかったが、段々ひどくなつて来て、仕舞には一人で、押し切れず困りました」

由「そこへ私が後押あとおしで、旦那の下帯で綱びきツ引と来たたら水沢山もかるく引上げました」

幸「悪いよ、静かにしろ」

二十三

由「何でもあれは後家さん様だねえ……好よい女だ」

幸「止しねえ、何だか知れるものか」

由「いゝえ後家なりさんだ、姿の拵なりえが野暮でござえます、お屋敷さんで殿様が逝おかくれ去になつて仕舞つたので、何でも許いいなすけ嫁の殿様が戦いくさ争で討うちしに死をして、それから貞操みさおを立てるに

髪を切ろうと云うのを、年が若いからお止しなさいとお附の女中がとめて、再縁をさせよと云うが、御夫人は貞操を立て、生涯尼になつてと云うのでげしよう……形装なりも宜し、金側の時計に鎖は小さな珊瑚珠が間に這入つて、それからこう頸くびへかける、パチンなど

はこんな幅の広いので、竜が珠をこうやって居る処おが着いて居るのは妙で」

幸「止しねえ」

由「大変に旦那に惚れて居ますぜ、初め私が話をして、彼あれは東京の方だが、お家うちは川口町てえんで」

幸「下らねえことを云うな」

由「なにしたゞ川口町と云つたので番地は云いません」

幸「番地など云つてはいかん」

由「どうも本当に品と云い人柄と云い、あんな方はないとお附の女中に云いましたら、本当に左様そうですねと云つて、お附の女中が横眼で見たが、これはどうも只ならんと思います」

幸「止しねえ、詰らんことを云つて、聞えるぜ……峰公、止しな、覗いては悪い」

峰「覗きやアしません」

と次の間で火鉢 火を起して居た車夫の峰松は、火鉢へ火を取って湯を沸しながら耳を寄せると、此方こつちは癩も治まったと見えて。

岩「どんなにか恟びつくりいたしましたろう」

女「私は久しく起らなかつたが、今日は強く起つて……お湯に動ずると云うが動じたの

だろうか」

岩「貴方のようによく／＼して、斯う云う処へ入らっしゃっても頓とお宅のことをお忘れ遊ばさんからいけません、斯う云う処へ入らしたら悉皆お宅の事はお忘れ遊ばせ」

女「思うまいと思つてもそうは行くまいじゃないか」

岩「そうでございませうが、其の替りには貴方幾日何十日お宅を明けて居らっしゃつても宜しいので、貴方のは氣癩きじやくでございませうよ、それを癒なほさなければならぬと旦那様が仰しやつて、私を附けて此処に幾日何十日入らっしゃつても何とも御意遊ばさないじゃありませんか、それで貴方どんな我儘を仰しやつても、柳に受けて入らっしゃる、貴方はお仕しあわせ合あじやありませんか、他家には疳癩かんしやくを起して、随分御新造様方を手込てこみになさるお宅うちさえ有りますじやアございませんか」

女「それは、御自分様に悪い事があるから、私へも優しく遊ばさなければお義理が悪いだろう」

岩「だけれども男は仕方がありませんよ」

女「それは男の働きで、偶たまに芸妓げいしやをかうか、お楽しみに外かこいめ妻をなさるとも、何とも云やアしないけれども、旦那様ばかりは余りと思つのは、現在私の血を分けた妹いもじゃアないか」

岩「それだから斯うやつて長く居ても、何とも仰しやらない、今年一杯居てもお小言は出ませんよ」

女「それは早く帰ればお邪魔になるから、たと居ろと仰しやるので」

岩「貴方はそうお思召すからいけません」

二十四

岩「貴方木暮武太夫へ菊五郎きくごろうが湯治に来て居ります、家内を連れて来て居ります、松まつす助も連れて居るそうです」

女「私は併やくしや優は嫌い」

岩「落語家はなしかも来て居ります」

女「落語家は饒おしやべり舌で嫌い」

岩「それでは貴方琴をお調べなさいな、どうせ借物かりもので悪うございますが、何か一つお浚せらい遊ばせ」

女「私は厭だよ……芝居と云えば何じなんやアないか、前橋へ東京の芝居が来て居るって」

岩「左様で、慥か左團次が来たそうで」

女「左團次と云えば、お隣の旦那様は左團次に能く似て居らっしゃるねえ」

岩「左様でございますよ、好男子で人柄で、そうしてお隣のお方ぐらい本当に御親切なお方はございません……そしてアノ若い氣の利いた車を引く人、あんな身分に似合わぬ親切な人は有りません、まア一生懸命に汗を掻いて貴方のお癪を押してねえ、それにもう一人の方はとぼけて居て、あの方は本当に可笑しい方で、何か仰しゃって居るといつかお洒落になつて居て、私は分りませんから御挨拶をすると、洒落に挨拶は驚くと仰しゃつてねえ、皆な氣が揃つて面白いお方で、本当に親切な方ですねえ」

と噂をすればさす影の障子を明けて這入つて来たのは車夫の峰松。

峰「先刻は」

岩「おや今お噂をして居りました」

峰「旦那が大変案じておいでなすつて、それからお薬がお入用なら、もつと上げたい、

お丸薬の良いのがあるから上げたいと申すので、なんなら持つて参りましょうか」

岩「有難うございます、奥様ももう大丈夫で……まアお茶を一つ召上れ、まア此方へ」

峰「有難うございます……これは結構なお菓子で……大変ですなえ、お宅から参るので、

此方にはございませぬ、伊香保饅頭は温あつたかいうちは旨ひえいが冷ると往生で、今坂いまさかなんざア食える訳のものではありません……へえー藤村ので、東京とうけいから来るお菓子で、へえ」

岩「今日のは一つ目の越後屋のお菓子で、一つ召上れ」

峰「有難うございます……此方はお二人切りだからお淋しかろうって旦那が心配して居ります」

岩「誠に好よい旦那さまで、結構なお薬を頂き有難う存じました、只今お返し申しに上ろうと思つて居ました」

峰「なに返さなくつても宜しゆうございます、幾らも持つておいでになるので、カバンを開けると用意に腹はらいた痛の薬だの頭痛の薬だの、是れは何んだとかつて幾つもあるのだから、何処が悪いつても大丈夫で、緩ゆるくり御養生なさい」

岩「あなたの旦那さまは川口町とかで何御商売で」

峰「なに金貸かねかしで、下質したじちを取つてお屋敷へお出入りがあるので」

岩「彼あの方様今度は御新造様はお連れ遊ばさずに」

峰「なに御新造さまはないので、段々聞くとお死なくなり亡になつて仕舞つたので、是から探すので、伊香保へ探しに来たと云うわけではないので、これは湯治でげすが、へえ此方こちらの奥

様見たいなあ、云う御様子の好い方を女房に持ちたいなどと仰しやいました」

女「あれまア冥加至極な事を仰しやる」

峰「茗荷みようががどうしました」

女「いゝえ貴方そんな御冗談ばかり」

二十五

峰「本当でげす、貴方のお癪を押したのは誠に有難いと云っていました」

女「恐れ入った事で、まだ癪を押して下すった御親切のお礼にも上りませんで、本当に貴方方の御親切で助かったと思つて居ります」

峰「あの由兵衛という男は助平だからお前さんのことも種いろんなことを云つて居ましたよ」

岩「御冗談ばかり」

峰「貴方お癪にはなんでげすねえしま四万てえ処がありますが、是から九里ばかりありますが、これは子供の虫と癪には覲てきめん面効きくつてえので皆みんなな行きます、これは三日居ればどんな癪でも癒るてえますから入らつしやいましたな」

女「そう云うお話を聞きました、勧めた方もございますが、初めてゞ知らない処でねえ」
峰「なに車が利くし、道は出来て直きに往かれます、天狗坂てえのが少し淋しいが、それから先は訳はねえ、私の処の旦那も往くがの」

女「貴方の処の旦那さまが、そう何日」

峰「明日か明後日往くてえます、へえ」

岩「折角お馴染になつたに、残らずで往くのですか」

峰「へえ私も往くので」

岩「心細うございますねえ、本当にねえ、お隣へ厭な者でも来るといけないと思つて居たが、飛んだ好いお方が入らしたと喜んで居たのに、四万へ入らっしゃるつて、淋しいねえ」

峰「じゃアあなた方も入らっしゃいな、また四万へ往つて隣合つて居ますから入らっしゃいな」

女「でも貴方、男衆ばかりの処へ女二人一緒に参るのは、また知れでもしますと」

峰「知れたつて宜うがす、別れくゝに往つても一方道で、四万へ往つたら又お隣り座敷に居れば知れやアしません、そうして襖を明けければ一緒になります、へえ一緒にお出でなさ

い、旦那も是非お連れ申したいといつて居ましたからお出でなさい」

女「本当に御一緒に参りたいがねえ、宅うちから郵便でも来て此家こゝに居ないとまた……」

峰「それは此方こゝちへ頼めば宜うございます、四万の關せきざん善と云うこれは善よい宿屋で、郵便も直じきに来ます、一日遅れぐらいで届きます」

女「参りたい事は参りたいのでございますが」

峰「入らっしゃいませ、入らっしゃいよ、それに貴方あした明日ね向山へ往くので、私は留守居でげすが、向山へ往つて芸げい妓しやを聘よぶので、あなた方なら御一緒に入らして月見を成すつては如何いかゞです、向山の玉兔ぎよくとあん庵あんでえので、御迷惑でございますか」

女「何ういたしましたして、迷惑ではございませんが」

峰「由兵衛さんは大変喜んで居りますよ、坂をお手を曳いて歩くのは大変合せだつて云つて居ますが、手てが硬こわいと云つて氣を揉んで、種いろく々の物を付けて居りました」

女「御冗談ばかり、そんなら明晩月見にお供をいたしても宜しゆうございますか」

峰「宜しいのなんて、入らっしゃい、それから四万へ入らっしゃいませ、旦那はねえ駕籠と云うが、由兵衛さんはポコ／＼歩くかも知れねえ、此方こゝちは遅れて渋川まで私の車で往つて、渋川で車を一挺雇つて貴方が乗つて追つかけりやア直じきで、一日で往いかれます、届けも

のがあれば当家へ言付けて置けば堅え家で屹度届けます」

女「なんだかお別れ申すのが否ですか、じゃアそう云うことに願います」

峯「左様ならそうして入らっしゃいまし」

と妙な処に幫間を叩き、此方も心淋しいから往く了簡になりまして、是れから玉兔庵という料理屋へ参り、図らずも此の奥様の身の上が分ると云うお話でございませぬ。

二十六

橋本幸三郎と岡村由兵衛は、向山の玉兔庵と申します料理屋へ参りましたが、只今では岩崎さんがお買入れになりましたして彼処が御別荘になりましたが、以前には伊香保から榛名山へ参詣いたしまするに、二ツ嶽へ出ます新道が開けません時でございませぬから、一方道では是非彼処を参らなければなりません、彼処に福田屋龍藏親分が住居致して居りまして通ります人の休み処で飴菓子を売って居ましたのが初め、伊香保が盛つたに付いて料理屋を始めましたが、連藏と云う息子が居て、その息子が一寸料理心があつて胡麻豆腐と胡瓜揉という物が当所の名物でございませぬ。一寸鮒か或は鯉などを活洲にいたし

ましたから、活きたのが食べられます。現今たぎいまでは伊香保に西洋料理も出来ました。その玉兎庵へ参つて、広間の方で橋本幸三郎が一杯やつて居りますと、後あとから連れて来たのは隣り座敷に居ります処の御新造でございます。年が未だ二十四と云う実に品の好よい別嬪でござりまする。世間を余り見ない人と見えます。お附の女中はお岩と云つて四十二三でございます。是は品の好いい訳で、出が宜しい。旧幕の折には駿河台胸突坂むねつきざかに居まして、二千五百石頂戴致した小栗上野介おぐりこうずけのすけと云う人の妾の子でござりまする。この小栗と申す人は米あめりか国へ洋行した初めて外国奉行を兼ね御勘定奉行で飛鳥とぶとりを落す程の勢い、其の人の娘で、私わたくしどもは深い事は心得ませんが、三さん倉のくらで小栗様は討たれ、又また市いち様と云う若殿様は上州高崎へ引取られ、大音龍太郎おおおとりゅうたろうと云う人のため故なく越度おちどもなきに断罪で、あとで調べて見ると斬らぬでも宜かつたそうであります。飛んだ災難でございました。それから散々ちり／＼になつて奥方は会津に落ちて、会津から上方へ落ちて、只今駿府にお在いでと聞きました。何う成行きましたか。此のお藤ふじと申す婦人は小栗様の娘で、幼年の折くり久留島しま様と云うお旗下へ御養女においでなすつたお方で、維新になりましてからお旗下様は御商法を始めて結構なお暮しでございまして、何処か以前のお癖がありますから、どうも御身代のお為に悪いそうでございます。殿様育ちのお癖むだがお冗費むだが立ちだすような事が

ありますから、商法なすつても思うようには儲けもないが、段々開けて来まして、皆みな殿様方も商法は御上手ごにおなり遊ばしました。出が良いから品と云い応対と云い蓮葉はすつばな処ところは少しもありません、落着いて居て、盃を一つ受けるにも整然ちやんと正しいので、

幸「そう貴方お堅くなすつてはいけません、どうか私どもはぞんざい者で、お屋敷様へお出入りをいたした者でも、町人の癖でおんもりとした事は云えないので……こんな饒おしやべ舌りも付いて居りますが、此の通りずぼらなことは云うが堅いことは云えませんか、お打解けなすつて召上りまし」

由「今こんにち日は私は奥様の前は堅くやろうと思つたが、堅くやると云いそこない、漢語なぞを使おうとすると、時々変なことを云いますから、矢張やっはり天保時代昔者でげすから、昔の言葉でなければいけません、殿様方もお戦いくさに往つて入らつして命がけを度々たびくなさつたお方が、段々商あきんど人におなり遊ばして、世の中の人と同等の御交際をされますが、昔を知つて居りますから貴く思ひまして」

など、話のうちに追々肴が真まんなか中へおし並びますので、

幸「由兵衛一猪口……」

由「有難う……、胡麻豆腐は冷えませんうち召上ると云うことは出来ません、先から冷た

いからこれも温かゝつたら旨かろうと思ひます……瓜揉は感心で、少し甘つたるいのは酔が少し足りない……今日は小峰さんと云う芸妓が参りますが、是も昔は長刀の、ぞうりをはいてと伊左衛門ではありませんが大層なお身の上の人で」

と話のうち小峰が参りましたから、

由「ヤア来たゝ……あゝ来た、どうも綺麗だ」

二十七

幸「さアゝ此方へ、貴方大きくおなんなすつて」

由「御覧なさい、お小さいうちに逢つた限で、昔馴染と云うものはねえ旦那」

幸「お上りなすつて、さア……どうもお美しくお成りなすつた」

由「上等……さアゝ大変先刻からお待ち申して居りました」

やま「誠に遅うなりました……御免下さい、貴方ねえ昼間のうちから上りたいと申してはそわゝして居りまして、早く行つてお目に懸りたいと申して、直に木暮さんへ行こうと申して居りましたが、大屋さまへ行つても運動にでもお出で留守だといけまいから、それ

より暮れてからのお約束だからと申してね貴方」

由「へえ大変に待つて居たので……イヤこれはどうも誠に」

小峯「昨日きのうは母が誠に失礼を致しまして」

幸「どうも暫く、実にお見違い申して、往來で逢つては知れませんよ」

由「実にお見外みそれ申します……え、貴方のお少ちひさい時分に私はお屋敷へ上つたことがございます、あの時はそれ両方のお手に大きな金平糖と小さい金平糖、赤いのが這入つた袋を二つ持つて入らして、私が頂戴と云うと貴方一つ下すつた、お氣象がよくつて入らして、もう一つと云うと、また袋の中から、もう一つくと皆みんなな貰つて仕舞つて、終しまいにはもう一つもないから、袋を覗いてお泣きなすつたことがあります、彼の時分からお馴染でげすから」

小峯「有難うございます、お母つかさんが歸つて来てまア、由兵衛さんがお出いでなすつたから早くお目にかゝれと申して……また昨日は有難うございます」

幸「どう致して」

やま「あんなにお茶代を頂き濟まないと申して、お茶代なぞ頂く了簡ではないと申して」
由「貴方そう思召しますからいけないのです、茶見世を出したら茶代は沢山たんと取る方が宜し

ゆうございます、料理屋なら料理を無闇に売るのが徳で、由兵衛などはたばこいれ入なら少々ぐらい破れて居ても売って仕舞います、それが商売で……これはお隣りの座敷においでの方で」

やま「おや何どなたさま方様も……」

女「誠に……おや思いがけない、お前やまじやアないか」

やま「おやお嬢様……お岩さまがお供でございますか」

由「おや、これはく御存じで」

やま「御存じだつてお少ちいさい時分お乳を上げたのでございますもの」

幸「不思議でげすねえ、これはどうも、へえー」

やま「誠に御無沙汰申上げましたが、もう実にお見違い申すようにおなり遊ばして、只今ではお尋ね申すことも出来ませんで……左様で、小石川へ入らしたと承りました……お岩様誠に貴方いつもお変りもなく」

岩「誠に久しくお目にかゝりませんで、ついくねえ貴方種いろく々な事があつて、申すにも申されぬことがございまして、小石川へお引ひっこみ込になつて、何も彼かも御存じでありましようが、此の節のお身の上、実においとしい事でございますが、お少さい時分御案内の通り

彼の事が決りませんで、私が只一人わたくしでじやく張つてお側にお付き申して居りますから、お心丈夫に入らっしゃいと申して、種々深い理由わけがあつて今度は当地へ湯治が宜からうと仰しやるので、三週間の休暇を頂き、私もお蔭様で保養いたしますが、実にどうもねえ、貴方にお目に懸ろうとは思いませんでした」

やま「お嬉しゆうございますわ、私も此の橋本にお目に懸つたのですが、昔のことを仰しやると面目次第もない、どうもねえ……娘これが芸妓げいしやをして、娘は貴方それ七歳ななつの時に御覧なすつた峰と申す娘で、誠にこれが芸妓をして私は誠にもう面目ない葎よしずつぱり張の茶見世を出して、お茶を売るまでに零落おちぶれました、それから見ればお岩様なぞは此方こなたさま様のお側だから何も御不足はないので、まあく結構でございます」

岩「はい実に苦勞しても貴方お屋敷と違つてね、それに殿様があゝ云う訳にお成りなすつたから、何うすることも出来ませんで、思いがけないまた外に苦勞がございまして」

由「これは妙でげす貴方、此方こなたは」

やま「はい此方さまは駿河台のソレ胸突坂に入らっしゃつた殿様のお二方ふたかた目のお嬢さまでございませす」

二十八

幸「どうも思い掛けない、不思議な御縁付で」

やま「御縁付はまだお極りにはなりませんので」

岩「へ、まだ御婚礼は済まないのです、誠に生涯お一人で暮したいなぞと心細い事を仰しやるから、私がお付き申しては居りますが、そんならつて御姉妹でありますので、宅の方の極りが着けば何うでも斯うでも此方様はお姉さまの事ですから、極りが着こうと思つて、只今はお一方で入らつしやるので」

由「不思議でげすねえ……だから私が申したので、御様子が違うてえので……お屋敷はやはり駿河台の胸突坂で、旧幕時代二千五百石もお取り遊ばしたのでげす……違いますなア……え、お癩の起し振もどうも違います、二千五百石だけのお癩をお起しなさる……これはどうも」

やま「何しろお嬢様にお目に懸りますのは尽きせぬ御縁と申すもので」

由「ごまをするというので瓜揉を一つ頂戴」

と由兵衛が頻りに喋つて居ると、向うの四畳半の離れに二人連の客、一人は土岐様の藩

中でございまして、岡山五長太おかやまごちやうだと云う士族さん、酒の上の悪い人、此の人は三十七八になり未だ道楽も止まぬと見える。今一人は三十六七で小粋な人でございませぬれども、田舎の通り者、桑原治兵衛じへえと云う渋川の糸商人いとあきんどでございませぬが、折々此の地へ参つて遊んでばかり居ります。頻りにポン／＼手を敲きますが、余り返辞を致しません。人が出て来ませんのは、沢山奉公人も居りませんから出ないと、癩癩を起して国会の演説が始まつた様にピシヤ／＼手を敲きます。

岡山「誰も来ねえのか、これ／＼」

男「へえ／＼」

と黄色い声で、

男「此方様で」

とチヨコ／＼と来た者は妙な男で、もと東京の向両国の軍雞屋むこうりやうこく しやもやの重吉じゆうきちと云う、体軀なりの小さい人でございませぬ。身の丈は二尺五寸しかないが、首は大人程ありまして、小さいたつて彼の位あ小さい人はありますまい。形なりに應じて手足の節々も短かい。まるで子供のようにあります。反物を一反買いますと、自分の着物に、半纏はんてんに、女房の前掛に、子供のちゃん／＼が取れるというのでございませぬ、三布蒲団みのぶとんを横に着て足の方へあんかを入

れて、まだ二寸ばかりたれているといふから、余程小さい男であります。割合に肥ふとつて居て頭が大きいから、駈けると躓よろけてひつくりかえ 転覆ひつくりかえる事がありますが、一寸ちよつと見ると写し画えの口上云い見たいで、なんだか化物屋敷へ出る一ツ目小僧の茶給仕のようでありますが、妙に気が利いて居て、なか／＼発明な人であります。

重「へえ、お呼びなすつたのは此方こちらでげすか」

というを見ると二人は驚きました。

岡山「なんだ化物か、ア、何んだ」

重「お呼びなすつたから参めえりました」

岡山「何んだ、エ何んだ」

重「エへ、お手が鳴りましたから参めえりました」

岡山「お手が鳴ったつて、何んだ、ウン……亭主は居らんか、総体当家ではなんだ僕たちを愚弄して居おるな、なんだ胆きもを潰す薄暗い処へピヨコと出て驚く、真人間をよこせ、五体かたわ不具なみなる者を挨拶に出すべきものでない、退さがつて普通なみの人間を出せ、なんだ」

重「へえ五体不具ふぐ、かたわと仰しやるは甚だ失敬で、何処かたわが不具なみで、足も二本手も二本眼も二つあります」

岡山「それで一つ眼なら全まるで化物だ、こんな山の中で猫かりゆうど人が居るから追掛けるぞ、そんな姿なりでピヨコくやって来るな、亭主を呼べ」

重「亭主は前橋へ往つて居りませんから私わたくしが代りに出たので」

岡山「じゃア家内が居るだろう、家内を呼べ……これ先刻さつき小峯に口をかけた処が、小峯は病気で出られぬと其の方が申した、其の小峯がどう云う理由わけで向うの座敷へ参つて居るか、さアそれを聞こう」

重「えい、病気で居たのでございですが、旧なごらく来のお馴染で、お客様へ一寸ちよつと御挨拶と云うので参めえつたので」

岡山「なに馴染だと、これ僕等は馴染でないから大病であるか、立聞はせんが誠に静かであれば、馴染の客であれば忽たちまち大病が全快すると申すか、口をかけても偽にせやまい病いを起して参らぬのは何う云う理由わけか、さアそれを聞こうと云うのだ、来なければ来ないでよい、早く申せば旨くもねえものをこんなのみにくいに数々とりはせぬぞ、長居をして時間ときを費ついやし、食いたくもない物を取り、むだな飲のみ食くいをしたゆえ代は払わんぞ」

重「誠にどうも仕様がございません、向うは馴染で御挨拶だけで」

岡山「挨拶だけという事があるか……」

桑原「まあ、君、待ちたまえ、僕も度々来ては厄介になるけれども、能く考えて見ろ、此の旦那様を此処へ連れて来て、芸妓を呼ばつても来ず、その小峯が向うへ来て此処へ来ねえで見れば、己が呼ぶたんびに祝儀でも遣らぬようで、朋友に対しても外聞の至り赤面の至りじゃアねえか、来ねえば来ねえで宜いが、どうも此方へは病気で参られませんか云うて向うに居るのは奇怪じゃアねえか、どう云う次第であるか、胸を聞こう、向うへ挨拶なら此方へも挨拶だけ来て貰わねえばなんねえ」

重「あれはお母さんが堅いから出しません」

岡山「愚弄いたすな、来なければ来んで宜い、此の方の酒食いたした代価は払わぬから左様心得ろ」

重「それは困ります」

岡山「困るたって、何故べんくと待たした、来るかと思つて要らんものまで取った」
重「貴方が召上つたので」

岡山「それは出たから些ちつとは食う、食ったけれども代は払わぬ……」

桑原「いや、それは代は払つても宜よいが、能く積つても見なし、どう考えてもいやに釣られて、小峯が来るか〜と思つて、長い間時間を費し、それ／＼よう要用のある身の上、どう云う理由わけか我々どもを人力車夫同様に取扱われては迷惑だから、親方を此方こちらへ呼ばつて貰おう、どれほど此の家に借りでもあるか、芸妓げいしやに祝儀でも遣らぬ事があるか、どう云う次第か、さアそれを聞こう、呼ばつて来い」

重「前橋へ往つて居ないと申しますのに」

岡山「前橋へ往つた……帰るまで待とう」

重「何時いつ帰るかどうも知れませんか」

岡山「帰るまで泊つて居る」

と云いながら突いきなり然重吉の頭をポカン。

重「おや何で打つのです」

岡山「打ぶつたがどうした、大きな頭を敲き込んで遣ろうと思つて打つた」

重「無暗むやみに打つて失敬ではございせんか」

岡山「何がどうした、コレなんだ、化物見たいなものを遣しやアがって」

と云いながら其処にありました又タの皿を把つて投りましたから、皿小鉢は粉々になりましたが、他に若い衆が居ないから中へ這入る人もない。すると上り端に腰を掛けて居たのは、吾妻郡で市城村と云う処の、これは筏乗で市四郎と云う誠に田舎者で骨太な人でございますが、弱い者は何処までも助けようと云う天稟の氣象で、三の倉の産で、今は市城村に世帯を持つて筏乗をして母を養う実銘な人。此の人は力がある尤も筏乗は力がなければ材木を取扱いますから出来ません。市四郎は侠客の氣質でございませ故見兼ねて中へ飛込み、

市「貴方待つてくんなせえ、困つた人だ皿を投つちやア困りますよ、弱え者虐めて貴方困るじやアねえか、大概にしてくんなせえ、此家な連藏さんは居ねえが、内儀は料理して居る、奉公人は少ねえに皿小鉢を打投つて毀れます、三百や四百で買える物じやアねえ、大概にするが宜い」

岡山「手前何んだ」

市「己ア此処へ用が有つて来合せていたのだ」

岡山「手前仲へ這入るなら僕らの顔を立てるのが仲裁の当り前だ」

市「お前方の顔を立て、上げてえが立てようががしなえ、相手が悪いならば、あんた方の顔も立て、上げやしようが、弱え者いじめをするにも程がある、此様なかたはナニ子供のような重さんの頭をぶちなぐる事はハアねえだ」

岡山「そんな不具者の顔を立てんでも宜い、拙者どもは芸妓小峯を呼びに遣わしたる処、病氣と欺き参らんのみか、向うへ来て居るのは甚だ奇怪に心得るから申すのだ」

市「それが奇怪だつて、そりや無理だ、芸妓だつても厭な処へは来なえ、貴方の方は厭だから来なえのだろう」

岡山「コレ甚だ失敬な事申すな」

市「失敬たつて、芸妓だつて、酒飲で小理窟をいう客は誰でも嫌えだ、向うは柔い客で好い座敷だ、向うへ往くのは当り前の話で貴方御扶持を出して抱えて置くじやアなえし、仕様ねえから早く帰つておくんなさえ……なにする、己胸倉捉つてどうする」

と市四郎の胸倉を捉つた岡山の手を握ると市四郎は大力でありますから。

市「何をする」

と逆にと取つて岡山の胸をポーンと突くとコロコロと彼のどうも深い谷川へ逆蜻蛉をうって五長太が落ちますと、桑原治平はこれを見て驚き駈下りたが、嶮しい坂で

ありますから踏み外してこれも転り落ちました。

三十

岡山五長太と桑原治平の二人がゴロ／＼落る騒ぎに、一人奥に働いて居た人が何時のまにか伊香保の派出所へ訴えたから、巡查さんが官棒を携え靴を穿いて、彼の高い処をお役とは云いながら駈上つてお出でになり、

巡查「これ、どうか、え、お前じやアなえか、此の谷川へ二人とも打落したは何故か」

市「はい、私打落したつて、私を打殴るから私も先の相手を打落しやした」

巡「コラ、仮令其の方を撲打擲を致したにもせよ人を打擲するのみならず、此の谷川

へ投落すと云う理由はあるまい、乱暴な事をして、えゝこれ、派出へ来なさい」

市「私そんなとけえ往くのは厭だねえ」

巡「これ、厭と云うて済もうか、直にさア来なさい」

市「私は派出などへ何の科があつて私参るのだね」

巡「コラ分らぬ奴じや、これへ二人の者を打込んだではないか」

市「打込んだと云つて、先で己に打つて掛るから己だつて黙つては居られねえから、手工
ひん捻つて突いたら、向うの野郎逆蜻蛉を打つて落ちたので、私が打落したのではねえ」

巡「じゃアから分らぬ事を云わんで派出へ参れ」

市「派出てえ何処え」

巡「屯所へ参れ」

市「屯所たつてお屯様へ呼ばれる私罪はなえ」

巡「分らん奴であるぞ、罪と云うは今の事じゃ、二人を打落したのが罪じゃ」

市「己を先へ打つ奴の方が罪があると思いやんすが、どうだえ」

巡「分らん事を申すな、お前は布告を知らんなア」

市「へい知りません、私の方へ布告が廻つた事もありませんが、読めねえだ、手習した
事がねえから何だか分らねえから印形捺いて段々廻すだ、時々聞きに来いなんど云うが、
郡役所だつて一里半もあるので、其処まで参るには商業を休まなければなんねえだか
ら、聞きに往く訳にはめえりませんよ」

巡「どうもはや分らぬ奴……参れ」

市「参れませんよ」

巡「なぜ参らぬか」

市「なぜ参らぬだつて、貴方私が悪くアねえのだに、先に打ちやした奴を先へ連れて行くが、いゝのだ、私ばかり悪いからつて連れて行くてえなア無理な話で」

巡「どう云う理由で此の谷へ打込んだか、それを申せ」

市「はい打込んだつてえ、私を打つたゞからよ」

巡「じゃが理由なく貴様を打つという事もあるまい、貴様に悪い事があるから向うでも打擲したのだから隠さず云え」

市「隠すも何もねえ、此処な家へ来て芸妓が来ねえつて皿小鉢を投つて暴れるので、仕方がねえから、私用があつて此家へ来て居りやんしたが、見兼て仲へ這入つた処が、私胸倉ア捉るから、仲人だと云うのに聞入れず私を打ちに掛つたから、まごゝくすると打たれるから引外したら躓けたので」

巡「また左様云う悪い者があつたら手込に谷川へ打込む事はならぬ、すぐ派出所も在るものじゃから訴えなければならんに、手込にする事はない、なぜ届け出んのじゃ」

市「だつて此の谷を下りて、貴方の方へ訴えて此処へ来る時分には逃げてしまうから、打たれ損にならねえ先に、貴方だつて間に合いませんから、私は貴方の代りに打殴つて、

谷へ投り込んだので、早く云えば貴方の代りにしたので、大きに御苦勞ぐれえ仰しやつても宜かろうと思いやんす」

巡「え、僕を愚弄致すか」

市「愚弄てえ何か」

巡「え、分らぬチュウものじゃ、まア参れよ」

市「参りませんよ」

巡「参らぬと云う事があるものか」

と分らぬ奴もあるもので、田舎育ちでも今は開けましたが、其の頃は無学文盲の無法者がありまして、強情を張つてお困りでございますが、これを丹誠して引張ひっぱつて行く、実に御難儀なお役で。

巡「参れ〜」

と手を捉とつて引こうとしたが大力無双の市四郎が少しも動かず、引く途端に官棒でお打ちなすつたのではありませんが、グツと引く機はずみに市四郎の手先へ棒が当たると、市四郎が怒おこつて、

市「や私わしを打ぶつたな、貴方あんたなんで打つた、無暗むやみに打つて済むか、お役人が人民ひとを打ぶんなく

濟むか、貴方では分らねえから、もつと鼻の下に髯の沢山生えた方にお目にかゝり、掛合
 いたしやす、さア一緒に行きましよう」

と反対あべこべに巡查さんの手を捉つて向山の坂を下りましたが、世の中には理不尽な奴もあ
 れば有るもので、是からお調べに相成ります。

三十一

さて引続きまする伊香保の湯煙のお話でございます。向山の玉兔庵で五長太という士族
 を谷へ投込みました者は、大力無双の筏乗市四郎という者でありますが、此の人は誠まことに天
 稟まれつき 俠客の志がございまして、弱い者を助け、強い者は飽くまでも向うを張りまするの
 で、村方で困る百姓があれば、自分も困る身みじょう 上うぢでございしますが、惜し気もなく恵むとい
 う極義堅い氣質でございまして、三の倉に居ります中うちは御領主の小栗上野介様が討たれま
 した時其の村方を御支配なさるお方が彼様あんななお死に様ようをなすつて誠にお気の毒の事とい
 うので、其の人に附いて居りました忠義の御家来、老人であるからというので自分方へ引取
 って三ヶ年介抱を致して、此の人が此の市四郎のお蔭で見送りをされますなどという細か

きお話は後あとで申上げますが、中々聞かない氣質で、其の代り此の市四郎は學問がございませぬから開化の事は頓と心得ませぬが、巡查さん様でも何でも見境なく無暗むやみに強情を張つて巡查様の手を取つて向山の坂を降り、また登つて派出所に参りました。巡查様もお驚きで、左様な暴な奴に逢つては仕方がないので、此の事を警部さん様へお伝えなされた事でございませぬから、警部公お出向きなされたが、恐れる気色けしきもなく仁王立に突立つて居ります。警「これ、手前か向山の玉兔庵で口論の末士族てい体の者を谷川へ打込ぶちこんじやというが、それは何うも宜しくない、どういふ訳でさういふ乱暴な事を致すか」

市「先刻さつきも私わしが云います通り、乱暴でねえで、何方どつちが乱暴だかねえ、貴方あんたの方で能く調べねえで無闇こに來うくと云つて此処まで連れて來て、私もコレ用のある人間で、一日幾許いくばつて手間を取つて居る者が、暇つぶア消して此処まで引張られるは難儀だから、参らねえというものを何んでもという、私わしア暇を消して参つたが、私わしが悪いわりか向うな士族とかいうが悪いわりか見定めて人を引張つたら宜かろう」

警「そうじゃが、其の方は谷川へその士族体の者を打込んだという、巡查さんが確しかと是を見届け、又福田連藏方からも届けがあつた故に出張した処とこが、全く其の方が投込なんだという、其の方住所姓名は何と申すか、え、其の方の住所姓名を申せ」

市「何も私わしア……住持あくてえに悪あく体を清兵衛せいべえが吐ついたという訳わけでねえが、ありやア三の倉くらの間違ちがいでしよう」

警「いや其その方の住おんで居おる所ところは何と申ます」

市「私わしの居いる処ところか、私の居いる処ところは吾妻郡わづまぐんの市城村しじょうむらで」

警「其その方は姓名せいせいは何と申ますか」

市「姓名せいせいでえ何か」

警「其その方の名な」

市「己おらア名なか、己おらア市四郎しじろうと云いいます」

警「営業えいぎやは何なにか」

市「え、」

警「営業えいぎや」

市「なに」

警「分わらん奴やつじや、ウーン営業えいぎやを知らしらなてえ事ことがあるか」

市「知りません、其その様ような事ことどうして、只ただの字あせえ知らしらなえで習まわなえに英語えいごなぞ何なにに知しる訳わけがねえ、それは外国がいこくじん人のいいうことだ」

警 「英語ではない、営業というは其の方の渡世商売じゃ」

市 「商売か商売は市四郎てえ筏乗でがんす」

警 「何故あつて向山へ今日参つたか」

市 「何をたつて連藏さんとは心安い者で、茸を些とばかり採つたから商売の種に遣りてえと思つて持つて来て、縁側で一服喫つて居ると、向うの離座敷で暴れ廻る客があるだ、若い衆を擲つていけえこともねえ皿を打壊したりして見兼ねたから、仲へ這入つて何故此様な事をする段々尋ねた処が、仲人の私に悪口吐いて打つて掛るから、打たれては間に合ひませぬから胸を衝くと逆蜻蛉を打つて顛覆つたゞ、ねえまア向うが弱えからだ」

警 「何故其の様な暴な事をするか」

市 「するツたつて向うで打つから己ア方でも打つたゞ、黙つて見ては居られねえから打ちやした」

警「仮令たとえそういう者があるにもせよ、何故左様な暴な事を士族体の者が致したら、此の方へ届けん、自身手込てこみに打擲するといふ事は無い、人を打ぶつてえ事は無い、殴打創そうしよう傷の罪と申して刑法第二百九十九条に照して其の方処分を受けんければならんじやないか」

市「え、それはナニ二百五十銭ばかりの銭で腹ア立て、それは根が太田宗長おたそうちようという医者が悪いので、薬礼しろといふが、銭ねえならお前二百五十銭に負けて遣つてくれといふが、負けられねえつていふから喧嘩になつたぞ」

警「ナニ……そんな事を尋ねるのじやアない、ウーン誠に困るナ……其の方は人の身体を無闇に打つものではない、人の身体は大切のものじや、分らんか、この肉体というものは容易なものではない造物主より賜わる処の此の肉体は大切なものじや」

市「誰が呉れやした、虚言うそばかり吐ついて、此の体は木彫きぼりじやアねえし仏師屋ぶっしやが造つたなんてえ」

警「仏師屋じやアない造物主、早く言えば神から下すつた身体、無闇と殴うち打擲して、殊に谷川へ投込むこうむなどは以ての外ほかであるぞ」

市「じやア先方むこうの体ばつかり神様から貰つて、己おらア体は粗末ぞんぜえにしても構わねえと云わつしやるのか」

警「粗末そまつにするという事があるか、先方せんぼうの身体も貴様の身体も同じじや、それじやに依つて喧嘩口論して、粗暴に人を打擲する事はならん」

市「何だか貴方あんたの云うことは明瞭はつきり分らねえ、だがねえ己おらア身体は大事、先方むこうな身体も大事と一つにいうなら、何故己ア身体を先方な奴が打つたか、打たれては腹が立つ、先方で打つて此方こつちで手出しが出来ねえといつて、此方の坂を下りて亦登つて貴方へ打ちやしたと届けて出て、それから又坂ア下つて又登つて向山まで往く間まにやア向うの奴は逃げて仕舞うから打れ損で、此の体に創きずを出来したら貴方其の創を癒す事は出来ねえだろうが、先方で打ちやアがったから己が打返ぶちかえしたので、謂いわばあんたの代りだ」

警「代りという事があるか、全く先方せんぼうから先に手出しをした証拠があるか」

市「ナニ……」

警「先方から先に手出しをした証しょうがあるか」

市「え、すりア有りやんす、此処こゝに居る重吉という者、主人あるじが居りやせんからソノ番頭役を致しやす、此の人が証拠だ、のう出来助できすけどん」

警「出来助……其の方か」

重「へえ、それはへエ私が申します、乱暴をして、毎日くお酒を飲たべて無闇に皿小鉢を

抛なげうつて打ぶつたりして、殊に私の頭を二つ打つたので、へえ、見兼ねて此の親方が仲へ這入こつて下すつたので、二言三言云いやつてねえ…親方に打つて掛つたねえ、証拠は親方の頭に少々ソノ創くずがご置おきます、へえ」

市「ねえ此の人が証拠で、神様から貰わつた私が身体を打ぶつたから打返ぶちかえしたただ、ねえ、だから貴方あんたの些ちつたア手助かりをしたゞ」

警「なに手助かりと云うがあるか……先方で先に打つたとあれば……まアよいわ……不ふうん論罪いざいじゃ、それでは宜しい、宜しいに依つて向後は左様な粗暴な事をしてはならんぞ、もう其の方も三十を越えて血氣な若い者とも違ちがうから、以後は喧嘩口論をして人を打擲うちすることは相成らぬ、能く弁わえろ」

市「それから」

警「それからということはない、宜よいからもう参れ」

市「へえ、そうか、もう宜いのか、あんたも骨が折れるねえ、あんたも早く云えば仲ちゆうに人んだ、コおアも仲人にべえ頼まれて、能く村で仲人に這入へつて人の事を捌さくだが、中々骨

え折れる役だねえ、あんた方もなア」

警「早く往いけ」

と巡查様もお困りで、分らん者でございませうけれども、別に悪い事をしないのに、近村で問いまして、しょうとう正當潔白という事、是は巡查様も御存じだから先ずかろ軽く済みましたが、向山に居りました橋本幸三郎、岡村由兵衛は混雑こたすたが出来て面白くもない、殊に女連というので一とまず木暮八郎方へ帰りまして、翌日になりますと、朝飯を食べるとあつら誂えて置いたから山駕籠が一挺来ましたから、是へ幸三郎が乗り、衣類の這入った大きな鞆が駕籠の上に付き、てさげ手提が前に付きまして、其の他た葡萄酒の壘びんが這入り、又東京から持つて参った風ふう月堂の菓子なども這入り、すっぱり支度をして四万の温泉場へ参る事になりました。岡村由兵衛は昔風でございませうから、一寸ちよつと致したくすんだ縞の浴衣に、小紋のこつくりと致した山やまなし無の脚絆に紺足袋、麻裏草履に蝙蝠傘をさして鞆を提げて駕籠の側につきまして、これから出まして、あと後の事は車くるまひき夫の峰松に残らず頼みましたから、峯「万事心得ました、遅くも参ります、由兵衛さん旦那を何分宜しゅうお願い申します」由「よろしい、頼む」

と是から出しましたが、ぜん前申上げて置きました隣座敷のお藤という別嬪は、お附の女中岩と峰松が供をして、一緒に出るも極りが悪いから、あと後から出る約束に成つて居ります。

橋本幸三郎、岡村由兵衛の兩人は伊香保を下りまして、御案内の湯中子村へ出ます。彼れから岡崎新田五町田の峠を越し、五町田の宿を出まして右へ付いて這入つて、是から川を渡りますが、吾妻川には大きな橋が架つて居る、これは橋銭を取ります、これを渡ると後はもう楽な道で、吾妻川辺に付いて村上山を横に見て、市城村青山村に出まして、伊勢町より中の条という所に掛つた時はもう二時少々廻つた頃、木村屋と申す中食場所がございます。表には馬を五六匹繋ぎ、人足が来てガア〜と云つて居る処へ駕籠をズツと着けました。

女中「入らつしやいませ」

由「大きに若衆御苦労、今後で飯を食わせるが、何しろ休みねえ……おい〜女中さん、おい女中彼処の畳の上に何だ……黒豆が干してあるようだが、彼処を片付けておくれよ」

女「豆じゃアござえません、あれは蠅が群つて居りやすので」

由「蠅か……私は黒豆かと思つた、大層居るねえ眞黒で……旦那御覧なさい、此の蠅

はどうも酷いじやアございせんか、ハツくハツとたちますとまた直ぐに來ます、
大ていへ變ひんだ」

幸「大變ていへんだねえ、蠅の中へ大きなものが飛込んで來るが、なんだい姉ねえさん」

女「あれは虻あぶでねえ」

幸「虻……大層居るぜ、螫さくれると血が出来ますからねえ……女中さん何かあるかえ」

女「左様そうでがंस、何も無なえでがंसすけれども、玉子焼に鱈どじょう汁じゅうに、それに蒸松魚なまりの餡あ
掛んかけが出來やす」

由「え、鱈や蒸松魚のプーンと來るのア困ります、矢張無事に玉子焼が宜うがす……鱈の
お汁それは宜かろう、鱈のお汁に玉子焼で……貴方召上らぬが一猪口酒いっちょよこをつけて持って來
て……アハ、一猪口が分らねえな可笑しい……尤も千万だ……何しろね若衆わかいしが來て居るか
らお飯喫まんべさせて、お酒を飲ましておくれ、若衆は是から山道へ掛るから、酔うとまたい
けねえから氣を付けて」

女「ヒエー畏かしこまりました」

由「閑静でげすねえ……あんたが駕籠で、私わしが歩くのでお話もできませんが、あの村上山
の景色はありませんねえ、どうも山が連つながつて居て、あの間にチョイく松が、どうも大

きな盆栽でげす、あれから吾妻川の真中の所へずうと一体に平坦な岩が突出して居て、彼処の上へずつとフランクェットを敷いて、月の時に一猪口やったら宜うがしよう、なんぼ地税が出ねえたつて、一杯に彼の大岩が押出している様子は好い景色でどうも……だけれども五町田の橋銭の七厘は二ツ嶽より高いじゃありませんか」

幸「だけれども、あのくらいの橋を架けるのだから、どの位の入費だか知れねえ、だが景色は段々離れる方が由さん、好いたつて、実にどうもないねえ、有難い……女中さん早くしておくれよ……え、これから四里八町というから」

由「私は馬をいたゞきたいが、馬に乗つて捉つてヒヨコく往くなア好い心持で、馬をねえ……女中さん」

女「ヒエ」

由「馬を一匹、四万まで行くのだから帰り馬の安いのがあつたら頼んでおくれ」

女「毎日何かえりも行つたり来たりして居りやすから、もう直が極つて居るでがす、六十五銭でがんす」

由「六十五銭は高いねえ」

女「高えたつて極つて居るのでがんすから、その代り楽でねえ、坂へ廻つてはハア道がハ

アえらいでねえ、急の坂ががんすから、此処おりのたから折田へ出る道が極まつて居て楽でがんす」
由「じゃア姉ねえさん、馬は暴あれねえのを頼たのんでおくれ、いゝかえ馬に附ける物があるから、間違まちがえちやアいけねえよ……何しろ虻あが大変てえへんで……あゝ玉子焼が出来た、おゝ真ま白しろだ」
幸「白身ばかりは感心だ」
由「じア喫やつてみましょう……これは恐入おそつたね、中々柔かなで仕末しまつにいけません、姉さん、此の玉子焼は真白ましろだねえ」
女「ヒエ」

由「玉子は沢山入れねえで豆腐が九分で……これは恐れ入おそつたねえ、豆腐入の玉子焼は恐れ入おそつた、道理で真白ましろだと思つた、豆腐焼、これはないねえ、面白い、これは乙おでげす、何うも閑静かんせい過ぎますねえ」

三十四

由「いゝや鱈汁たらじゆの中に人參じんじんが這入はつて居る、これは感心かんしんでげす、牛蒡ごぼうで無い処ところが感心かんしんで、斯こういう処ところが閑静かんせい……且ま那な何なにしろ旨旨い、貴方あなた駕籠かごの上の葡萄酒ぶどう酒を下おろしましょうか、まア此こ

方を飲^{つち}つて御覽なさい、話の種で丹誠なもので、此の徳利の太さ、私が握るに骨が折れるが女中は苦もなく握^{つか}む、感心で、どうもこれは不思議で、表に馬^{うま}が一杯というのは面白い、それで中はお客が只^{たつ}二人、閑静なことじやアございませんかね……女中さん、これは驚くねえ人參が牛蒡に成りますくらい蠅がたかります、玉子焼へ群^{たか}ると豆腐入が今度は胡摩入り豆腐に成ります、何うも宜うがす」

その内に、

幸「女中さんお膳をさげて勘定しておくれよ」

由「女中さん勘定、いゝかえ……旦那あんたは駕籠で私が馬で、ぶらくお出かけは何うです、先刻後の伊勢町という処^{ところ}に二三軒女郎屋^{じやうろや}があつて、いやな島田に結^{むす}つて、鬢^{びん}のほつれ毛を搔いて、色の白いような青いような、眼の大きな、一寸^{ちよつと}見ると若いようだが年を取つて居りますぞ、三十二三には見えだが……女中さん伊勢町には女郎屋が何軒あるえ」

女「え、御座^{ござ}えやす、もと達磨でがんす」

由「あれは二軒切りかえ」

女「へえ只一軒で、女郎^{じやうろ}が一人居りやんす」

由「閑静なものだね……やア勘定^{かんじよ}は幾許^{いくら}になるえ」

女「ヒエ、九十銭せね若衆わかいしゅが十二せねで、金一円二銭せねになりやす」

由「申し旦那銭せね々々というのはどうも面白い……六十五せねの馬はこれかえ」

馬「はいはい」

由「コウ馬士まごさんどうだい、馬は暴あれはせんかえ」

馬「え、起たちもしねえが噛くいもしねえ」

由「起たつたり噛くわれたりして耐たまるものか、大丈夫かえ」

馬「大丈夫だえじょうぶで、なに牝馬めんまで、大概たえげえ往復いきかえりして居るから大丈夫で、へエ」

由「いゝかえ」

馬「さア其処そこえ足イ踏掛ふんがけちやア馬の口が打裂ぶつさけて仕舞う、踏台ふみでえ持って来てあげよう……

：尻をおツペすぞ」

由「おツペしちやア危あぶねえ、動いごくよ」

馬「動いごきやすよ活いきて居るから……さア貴方あんた確つかりと、荷鞍にくらへそう捉つかまると馬ア窮屈きうくつだから

動いごきやすよ」

由「若衆だえじょうぶいゝかえ大丈夫かえ、氣を付けて」

馬「大丈夫だえじょうぶで、此の道は馴なれて居りやんすからね、もうハア一日には何なん返かえりも往いくだ

からねえ、此の頃は馬まなこア眼を煩らつて居るから、はつきり道が分らねえから静しずかにあるきやんす」

由「冗談じゃアねえ、盲目馬めくらうまでは困るねえ」

馬「盲目でも歩くよ、此の道は一筋道だから心配はがんしねえで」

由「驚いたねえ、盲目馬の杖なし、大丈夫かねえ」

馬「大丈夫だえじょうぶだが、只牛が来ると困るねえ」

由「おいおい牛が何処どつから来るえ」

馬「なアに牛がねえ、米工積んだり麩そだ朶た積んだりして大概信州から草津沢さわたり渡あたりを

引廻して、四万の方へ牽ひいて行くだが、その牛が帰けえつて来る、牛を見ると馬てえものは馬

鹿に怖がるで、崖へ駈か込んだりしやす、たまげて此の間もお客さんを乗せたなりで前谷まえだに

へ駈か込みやアがった」

由「冗談云つて、人間を乗せたなりで谷川へ駈か込まれて耐たまるものか」

馬「なに貴方あんた、滅多にはねえ大丈夫だえじょうぶだが、先月谷川へ客一人打ぶちこ込んだが、あの客は何う

したか」

由「コウ冗談云つちやアいけねえ」

馬「ハイくくく」

と中の条を降ります、左方ひだりへ曲ると沢渡右方みぎへ這入ると彼の四万の道でございませう。是から折田へ一里、折田を離れて下沢渡しもへ参ると、是迄中の条から二里でございませう。六年以前より新道が開け、道も大きに楽になりましたが、其の折は未だ道幅狭く、なだれ登りに掛ると、四方どちらを見ても山また山でございまして、中を流るゝ山田川、其の川上は日向見川なたみがわより四万川に落る水で有りますから、トツくと岩に当つて碎ける水の色は真青まっさにして、山の峰には松柏かしわの大木とところ／＼に見えて、草の花の盛りで、いうにいわれぬ景色でございませう。到頭四万の山口へ参りましたが、只今は車道くるまみちが開けましたので西の方の山岸へ橋をかけまして下道しもみちを参りますが、以前は上の方を廻りましたもので中々難所なんじよでございませう。

三十五

此の山口と申す処にも五六軒温泉宿が有ります、其の他餅ほかを売つたり或は鮓蕎麦あらいすしなどを売る店屋が六七軒もあります。小坂こさかへかゝると馬士まごが、

馬「もし旦那さん誠にねえお待遠まちどおだろうが、少しねえ荷におろして往ゆかなければなんねえ、貴方あんたおりて下さい、おりて何もねえが麦湯むぎゆがあるから緩ゆるくりと休んで、煙草一服吸つてまア些ちつとべい待つて居ておくなんしよ」

由「宜しい、じやア下りるから、さア」

馬士「さアおりられやすか、腰こし抱かかいてやるから待ちなせえ」

由「大てい変へんだ、まるで病人の始末だねえ、あゝ腰こしがすくんであるけませんが……やア大てい層立派うちな家だが……おかしい、坂下から這入るとまるで二階下で、往來すくから真まに二階へ入はいる家は妙で、手摺てすりが付いてある……」

馬「嚟かア麦湯でも茶でも一杯上げろよ、中の条から打積ぶつんで来たお客様だ……」

由「打積ぶつんだは恐れ入った、まるで荷物の取扱といだ」

幸「向むこうに土蔵くらがあつて、此の手摺てすりなどの構かまえはてえしたものだ……驚おどいたねえ、馬方むまかたさんが斯ごとういふ蔵くら持もちの馬方さんとは、此方こつちは知らぬからねえ、失礼な事をいいましたが、実に大したお住居すまいで、二階などが斯ごとうお神樂かぐらでもなさるように妙に欄干らんかんが付いて居りますねえ」

馬「えゝ、是からねえ盆過ぼんすぎになると、近村ちかの者が湯治ゆじに参まゐりますので、四万の方いへ行く

と錢もかゝつて東京のお客様がえらいといふので、大概山口へ来て這入る、此処が廿年前には繁昌したものだね、今じやア在のものばかりのお客しますからねえ」

由「驚いた、それじやア大屋さんだ大屋さんで、馬方は恐入った……そう精出したら銀行へ預けきれめえが、金持だろねえ、是から關善といううちまで八丁かえ」

馬「えゝ是から八丁は山道でがんす、關善まで送つて、それから帰るのでがんすが、御用があるなら關善から己の方までそう云つて来れば、中の条の方へ出る用があるから、用を聞きに毎日往きますから、入る物があるなら四万で買うと高えから、中の条で買えば砂糖でも酒でも何でも安いものがあるからねえ、買つて来やんす、また退屈なら己方で蕎麦ひいて、又麦こがしも出来るからねえ私持つて行きやすから、どうせ毎日往くだからねえ駄賃はいりやしねえ、馬の上へ積けていくから、彼処で貴方買わねえでねえ己が持つて来て上げやんすからねえ」

幸「そりやアどうも御親切に馬方さん何分願います、どうも感心なもので、是は少しだがお茶代だよ」

馬「へえ、これは有難うがんす……」

由「もし旦那……内儀でしようが、結髪に手織木綿の単衣に、前掛細帯でげすが、

一寸品の好い女で……貴方彼処に糸をくつて、こんな事をして居るのは女房の妹でしょう、好く肖て居る、鼻が高くつて眼がクツキリとして、眉毛が濃くつて好い女です、斯ういう処に燻らして置くからいけねえが、これが東京の水で洗つて垢が抜けた時分に、南部の藍万の袷を着せて、黒の唐繻子の帯を締めて、黒縮緬の羽織なら何処へ出しても立派な奥さん、また商人の内儀にも好し、権妻にも、新造だつて西洋げんぶく大丸鬘でも好し、束髪にして薔薇の簪でも挿したらお嬢さま然としたものです、何しろ此の山の中に居て冷飯を喫つて、中の条のお祭に滝縞の単物に、唐天鷲絨の半襟に、袂に仕付の掛つた着物で、縮緬呉縞の赤禪で伊香保の今坂見たように白く粉のふいた顔で、ポン／＼跣足で歩いて居てはいけません、洗い上げるとよつほど好い」

幸「悪口をきゝなさんな」

由「そうですが、妙なもので、山の中にも斯ういう別嬪があるのでございますからねえ」

馬「へえ、身支度が出来ました」

由「おゝ来た／＼、馬方さんいゝかえ」

馬「さア乗かつてくんせえ、山道だから荷鞍へ確かりとつらまって、えゝかえ」

と是れからまた馬に乗り、駕籠を先に立たせ馬も続き、關善平方へ着きました。

三十六

幸三郎と由兵衛が關善の玄関に着くと、皆迎いに出来ます。昨年私が堀越團洲子とともに或る御大臣様お供で關善へ参りましたが、只今では三階造りの結構な新築でございませが、その以前は帳場より西の方が玄関でございまして、此処に確か十畳の座敷、入り側付きで折曲おりまがつて十二畳敷であります、肱掛窓ひじかけまどで谷川が見下せる様になって、山を前にして好い景色でございませ。二階家で幾間も座敷つぼがございませ。其処へ着きますと直ぐ湯を汲んで来たから、足を洗つて上り、

幸「あゝ好い心持だ、おい由兵衛さん、何か忘れ物のないように」

由「万事心得ました」

幸「若い衆しゅ、湯にも這入るだろうが、緩ゆるくり今夜泊つて、旨い物でも食わせるから彼方あつちの座敷つぼに居ねえ」

由「よし／＼心得ました、葡萄酒の瓶びんが毀こわれるかと心配した、斯ういう処とこへ来ては何もないからねえ……」

甲女「へえ叶屋かのうやでございます、なんぞ御入用なら通かよを置いて往ゆきますから」

由「なにを」

甲女「叶屋かで鱒玉じょう子軍雞しやもも出来ます、醤油味淋しんもございます」

由「そりやア何か」

甲女「叶屋かでございませす」

乙女「へえ鈴木屋すずきやでございませす、何んぞ御用はございませんか、これへお通かよを上げて置きますから、どうかお取付けになります様、誠に有難いことで、え、鈴木屋すずきやでございませす」

由「今這入こつたばかりで、まア仕し様がない」

甲女「叶屋かでございませす」

幸「そう大勢いくたり幾いく人も来たつて仕し様がない、困こりますねえ」

甲女「叶屋かで」

由「叶屋かでも稻いな本もとでも角海老かどえびでも今こん日にちが初しよ会かいだ、これから馴染なじが付ついてから本ほん価ねを吐はくから、まだ飯いも食くわねえ、湯ゆへも這入こらねえうち種いろ々の物ものを売うりに来るくるのは困こるねえ」

幸「私わしは話わに聞きいて居ゐるが、料理屋りやういのようなものがあるのので、取と付けにして貰もらおうという

のだらうよ」

由「もし、また豆腐入の玉子焼などが出来るので……どうも旦那お茶代を其そんな様に遣らねえでもようございます、此処ですから」

幸「それでも出したものだから……おい姉ねえさん」

女「ヒエー」

由「可笑しな返辞だねえ、面白い……もし旦那でも番頭さんでも呼んでおくれ、用があるから一寸ちよつと」

女「ヒエー」

由「早くして」

という、やがて番頭がそれへ参りまして、

番「ヒエー」

幸「お前さん御亭主かえ」

番「手前は当家の番頭でござりやす」

幸「はア番頭さんか、当家は何というえ」

番「關善平と申しやす」

由「番頭さんの名は」

番頭「ヒエー與兵衛と申しやす」

由「成程關善の家に與兵衛ありというのは面白い」

番「左様でございます、皆様がそう仰しやるので、旧来居りやすから」

由「ハ、ハ、……これはいけません、洒落を云つても通じませぬ、皆様がそう仰しやるなぞはこれは妙だ……これはお茶代で、これは雇人やといにんじゆう中へ」

番「え、有難うございます、主人が直ぐお札に出ますので、有難いことで、ヒエ」

幸「何しろお前さん初めて来たので馴れませぬから、また後から連も来るから宜しく頼みます」

番「ヒエ、明日から世帯をお持ちなさるのでございますか」

由「何処へ世帯を」

番「え、一週間ひとまわりなり二週間ふたまわりなりお席をおきまして、お座敷の内へ竈へつでも炭斗火鉢すみとりすべて取寄せまして、三週間もお在になれば、また賄いの婆も置きまして、世帯をお持ちなさいますなら、炭薪米たきぎなども運びますから」

由「ハ、ア此の座敷へ世帯を……成程疾うから持ちたいと思つたが、今迄店請たなうけが無いから

食客いそろうでいたが、是から持ちますからお前店請になつておくんなせえ」

番「御冗談ばかり、宜しゅうございます」

幸「何卒どうぞお頼み申します、賄いの婆さんも頼みますよ、給金などはようがすか」

由「此こ様な処へ来て洒落などを云つても通じませんので、むだです」

幸「少し口を休めな」

由「只もう私は好い心持で……旦那湯へ一杯這入つて」

幸「己は少し駕籠で腰いが痛えからまア先へ這入んねえ」

由「左様ですか、此の温泉はどうしたツてそばからぶくく出る湯ですから、私が先へ這入つたつて汚れるというわけではなし、他たの者も這入るのですから」

と喋りながら由兵衛は湯へ這入りに往ゆきました。

三十七

岡村由兵衛は湯に這入つて来まして

由「どうも宜いお湯で、どうもあり難いく、だがねえ少し熱うございます、此処の湯は

大^{てい}変^{へん}熱^{ねつ}い様^{よう}で、一^{むね}棟^{とう}の中^{ちゆう}へ湯^ゆ櫃^{びつ}が幾^{いく}つもあるの^ので、向^{むか}うへまた下^げ駄^だを穿^はいて往^ゆくと、着^き物^{ぶつ}を入れる棚^{たな}があつて、それからはしごを三^{さん}段^{だん}ばかり下^{くだ}りて這^こ入^いるの^のです、心^{しん}配^{ぱい}なし、氣^きが詰^じらず、残^{のこ}らず東^{とう}京^{けい}の人^{ひと}なし、皆^{みな}田^{でん}舎^{しゃ}の人^{ひと}ばかりで鬻^うが有^あります、男^{おとこ}ばかり、女^{めづこ}は子^こ供^ごを抱^{かか}いて這^こ入^いつて居^ゐりますが、芝^{しば}居^いの話^わなどはご^ございませ^{せん}ん、只^{ただ}畑^{はたけ}の話^わで、お前^{まへ}さん^のの^の処^{ところ}の胡^こ摩^まは何^{なに}時^{とき}蒔^まきましたか、私^{わし}の^の処^{ところ}では茄^{なす}子を何^{なに}時^{とき}作^{つく}つた、今^{いま}年^{ねん}は出^で来^きが悪^{わる}いとか菜^な漬^{づけ}がどうだとかい^いう話^わばかりして居^ゐるので面^{めん}白^{ぱく}いわけ^いで東^{とう}京^{けい}の人^{ひと}は居^ゐないから話^わはない、隅^{すみ}の方^{かた}へ往^{むか}つて湯^ゆのはねない処^{ところ}へ這^こ入^いつて、小^こさくなつて洗^{せん}うの^のです」

幸^{さい}「是^{こゝろ}は恐^{おそ}れ入^いつたねえ」

由^{よし}「だが好^よい湯^ゆで、塩^{しほ}氣^きがあつて透^{すき}通^{とお}るよう^{よう}で、極^{ごく}綺^き麗^{れい}です、玉^{たま}子^ごをゆ^ゆでて居^ゐる奴^{やつ}があ^あるので、手^て拭^ふに包^かんで玉^{たま}子^ごを湯^ゆに浸^ひけて置^おくと、心^{しん}が温^ぬまるという^いう、ど^どうい^いう訳^{わけ}か^かと皆^{みな}に聞^きくと、黄^き身^みから先^まにゆ^ゆだつて白^{しろ}身^みが後^{あと}からゆ^ゆだるとい^いう、嘘^{うそ}だ^だらうとい^いうと本^{ほん}当^{たう}だと番^{ばん}頭^{あたま}も云^いつたが、白^{しろ}身^みはなんともない、き^きみが温^ぬまるので、上^{うへ}の方^{かた}が温^ぬまらね^えで、心^{しん}がち^ちやんと臍^{へそ}の下^{した}が温^ぬまるので、心^{しん}臓^{ざう}肺^{はい}臓^{ざう}などが温^ぬまるので、こ^こんな嬉^{うれ}しいこ^ことはあ^ありませ^{せん}ん、時^{とき}にお茶^{ちや}代^{だい}の礼^{らい}に來^きましたか」

幸^{さい}「未^みだ來^きない」

由「へえ腰が温まり草臥が脱けます、這入ってお出でなさい」

幸「初めてで勝手が知れぬから、代りばんこに気を付けて、湯場は危険だから」

由「そう湯場働というのがあります、湯場を働くに姿を変えてというのは河竹さんに聞いた訳ではありませんが、芝居の台詞にもありますから気を付けて、何か面白いからうっかり致します……」

婆「こゝな処に世帯をお持ちなせえやんすか」

幸「悔りした、何んだえ」

婆「こゝな所え炭斗を置きやすが、あんた方又洗物でもあれば洗って参りやすから、浴衣でも汚れて居れば己が洗濯をします」

幸「お前何だえ」

婆「賄いの婆で、あんた方のお世話アするからお頼み申しやんす」

幸「頼みやんすは面白い、勝手を知りませんから万事お前に委せるからよ、お前何歳だえ」

婆「私は六十一になりやんす」

由「フウ田舎の人は丈夫だから此の年で働けるのです、これから見ると富藏の婆さんなどは五十八で身体が利かねえって、ヨボくして時々漏しますから、彼の人の事を思えば

達者だ……是は汚いが茶碗は清潔きれいなものと取換えておくれよ、汚い物は見ぬ方が宜うござい
ます、見ぬ事清してえから……お湯へ這入へえつてお出でなさい」

幸「忙しいね、お前茶を入れる様にしておくれよ……」

由「婆さん湯沸ゆわかを借りて」

婆「なに」

由「湯沸」

婆「ええ」

由「ゆわかしだよ、分らねえなア、鉄瓶でも薬罐やかんでも宜よいから小さいのを借りて、急須へ
お湯をさす様に、宜いかえ分つたかえ、どうも……一寸ちよつとも通じねえのは酷ひどいな……それ
から菓子を入れる皿でも蓋ふたが出来るような蓋物ふたものを持って来て、宜いかえ、菓子器をお願
いだから……宜しく万事此処へこう置いて……お茶は靴うちの中にあります、茶が変るといき
ませんから……ハツ／＼面白おもしろいどうも……もう御膳ごぜんが来るよ、早いねえ、もうそろ
／＼灯火あかりが点つく、早いものです、膳ぜんが来きました……旦那だんなに何か」

番頭「これは主人おやかたが左様さよう申しました、今日こんにちお着つきの事でございませすから、折角世帯せたいを持っ
て是これ彼あれとお取り遊あそばしても、もう好すいお肴さかなもございませすから、今晚こんばんだけはこれで御辛ごん

抱なすつて、明日は又宜しいお肴をお取り遊ばして」

由「宜しい」

三十八

由「あなた湯へ這入つても一度に這入つちやアいけません、私が伊香保で何度も這入つて逆上せてね困りました、初めは面白いから日に七度も這入つて鼻血が出ました」

幸「左様なに這入るから悪いや……お平腕に奇妙な物が這入つてるぜ」

由「へえ、お平腕の下に青物が這入つて麩が切つてある、これは分つた蕨だ、鳥肉が這入つて居る……お汁に丸まツちい茄子のお汁は変だ……これは何んで」

幸「なにを」

由「皿に切つてありますが、これは東京で云えば鯛の浜焼が付くとか何とか云うので、何もなければ玉子焼だ、何だろうか、薄く切つたものが並んであるが、東京の者と見て気取りやがったんだ、何だかこれを一つ食つて見よう……婆さん灯火を早く此処へ持つて来て……何だ奈良漬の香物か、これは妙だ、奈良漬の焼魚代りは不思議、ズーツと並べたの

は好いな」

幸「此処は大層香の物を貴むてえから、奈良漬を出すのは東京の者へ対しての天狗なんだよ」

由「何だか御法事の気味がありますからね、奈良漬にお汁の油揚は恐れ入った」

女「え、鈴木屋で」

由「また来た、何んだ」

女「え、枕を持って来やした、何卒お買いなすつて」

由「枕をどうする」

女「枕、貴方がなさる枕」

由「此の宿屋では枕がないのかえ、新しい枕を買うのかえ」

女「へえ」

由「幾らだね」

女「左様です、二ツで十四銭に致しやす」

由「高いねえ、此の枕は一寸縁日で買うと安いが、これは小枕が小さくツて、これじゃ出来やしねえが、何うしてもこれは買わなければならねえのかえ」

女「十四銭は高かアござえやせん」

由「この小枕は高天原に紙が一枚は酷いねえ、これは酷いが、まアいゝ、これを買つても宿屋で夜具を出すから枕も付きそうなものだ」

女「えゝ宿屋のは古うございますから、若し又お帰りの時お邪魔なら私が方へ引を立つて取りますから」

由「幾らに取るえ」

女「左様でがंस、一つまア七厘宛に取りやす」

由「じゃあまア買つて置きますよ……七厘ばかり取つてお前の方へ売つても詰らねえから……申し旦那、これを買つて東京へ土産に持つて帰つて、是は四万の名物首痛枕とか何とか云つて提げて行くのは洒落です」

とこれから酒を飲み御膳を食べにかゝる。其のうち又由兵衛がおしやべりをして居ると、しとやかに障子を明けて、

女「御免なさい、私は鈴木屋でございます」

由「鈴木屋さんか、先刻から」

と見ると前の女とは大違い、年の頃は廿一二でございましょう、色のくつきりと白い、

品の好い愛敬のあります、何うして此様な山の中に斯ういう美人が住うかと思うくらいで、左様な処へ参ると又尚更目に付きますから二人とも見惚れて居ります。

女「お通をこれへ置きますから、若しも御用がございますなら仰しやり付けて下さいまし、度々出ますでございますから」

由「へえ宜しゆうございます、是非戴きます、貴方のなら何でも戴きます、何がございませぬ」

女「はい、鳥と鱒鍋ができますので」

由「それもよし」

女「玉子焼」

由「それもよし」

女「鯉こくもございます」

由「それも」

幸「其様に逃えてどうする」

由「まア逃えやアしませんかねえ……何か外に着が出来ますか」

女「アノ鰈が出来ます」

由「寡婦やもめ、それは有難い、やもめの好いよのいはないかと心掛けて居るので」

幸「お前の隣のは寡婦じゃアねえか」

由「ありやア西洋洗濯を此の頃覚えた六十八歳という寡婦の大博士、毛が生えて天上する、ありやアいけません……」

幸「じゃアお前さん後あとでその鰥を持つて来ておくれ」

女「へえ誠に有難うございます……」

と云いながら静かに障子をしめて出て往ゆく。

由「旦那何でしょう、どうもお辞儀の丁寧だつてえないねえ、様子がずっとどうも、あのお辞儀の仕方は此方こっちが自然ひとりでに頭さかが下るくらいで、丁寧で、何でしょう」

幸「何だか知れねえが只者じゃアねえ」

由「山の中へ逃げて来たのでげしよう」

幸「何か仔細さいしゆがある事だろう、關善の親類でもありはしないか、鈴木屋の身寄か、士族さむらいさんのお嬢さんの果はてだろう」

と云つて居る。二度目に鰥と鯉こいこくが出来たといふので岡持へ入れて持つて来る、是こから酒をつけて橋本幸三郎が此の婦人の身の上を問います、これは後のちに申上げます。

三十九

さて岡村由兵衛は頻りに幫間口でお酒が流行つて居ります。

由「え、旦那唯今見た女は何うしても東京の言葉で、女は滅法好くつて、旅出稼と云つて湯治をしながら稼ぎに来る女は夥い事ありますが、彼の位えなのは珍らしい女で、丁寧で口が利けねえのは余程出が宜いんですねえ」

幸「余程品が好いが、どういふ身上か彼の位の女は沢山無い」

由「有りません、東京を立つて伊香保へ来て、伊香保から此方へ来るまでにありません、伊香保のお隣室の奥様ねえ、彼れは又品が違います、此方はあれよりもまだ年が往かないよう、伊香保の奥様も明日来るか、又今夜来るかも知れませんよ」

幸「お前又なんとか云つたのか」

由「え、云つたので、峰公にちゃんと話したので」

幸「お前悪いよ、此方がお母様と一緒に宜しいが、男ばかりの処へ女を呼ぶのは悪いから止しねえ、奥様然として居るが、殿様でもある者で知れでもすると悪いよ」

由「あれはもう何もございせんよ、主は無、主なしの榮太楼、彼の女は無いので」
幸「無い、だつて分りやアしめえ」

由「何んだつてお付の女中と伊香保の茶見世でお茶を売つて居た村上の御新造が、お嬢様くくと申すのでしよう」

幸「あれは、お少い時分に一つお屋敷に居てお乳を上げたので」

由「お乳は松でも笹巻でも此方は構わねえ、彼りやアもう確かに亭主はありませんよ、御婚礼は済みませんが、是から追々御婚礼にもなりかゝると、其処に苦情があつて、何うとか斯うとか話したと聞きました、向山の玉兔庵で申しました」

幸「だけれどもお前無理に呼んでは悪いよ」

由「悪いたつて後から峰公が引張つて来るので、お付の女中は忠義者でしよう、一緒に往きたいが、女二人であなた方と一緒に参つては、ひよつと人が訝しく思うといけませんから、後から参ると云うので、病身で時々癩が発ると云うが、その持病を癒そう為に伊香保へ来て居たのだが、貴方に一寸岡惚れでしよう、彼の新造がサ」

幸「止しねえ」

由「そこは僕が心得て居ますよちゃんと認めを付けて居ます、貴方の傍に……居ると気分

がいゝので、貴方のお顔を見るとお癪も紛れて居るので、くよくと思うが病の根で、病気だから何うかお邪魔ながらお連れ申したいと云う忠義の心から、堅い女中だけれども側に連れて来たい念が一杯あるから来ますよ」

幸「悪いよ」

由「悪いたつて構やアしません、あれが来て今の別嬪が来て落合つたら面白うございまいよう、だが御亭主ごてしが無ければ町人だつて身分が宜ければ縁付かたうくという、其処は又相談ずくでねえ、もし奥様が貴方の処へ嫁に來ると云つたら何うなさるえ、それとも鯉こいこくを持つて來る女が好うがすか」

幸「ウゝ、そんな事を云つても分りやアしねえよ」

由「分らないたつて向うが奥様で此方こつちは丁度権ごんの方かたで」

幸「止しねえよ、詰らねえ事を云つて、まア湯へ這入つて寝ようと云うのだが、腹が北山になつて草臥くたびれたから酔つたよ」

由「貴方を酔わしたい、貴方は酔わないと真面目でいけません、ズーと酔つたつて正氣になつて、助平根性を出してお仕舞いなさい、旅では構やアしません」

幸「止しねえ……まアくそんなにはいけねえよ」

由「だがねえ、唯後からくつついて来るな可笑しいねえ」

幸「可笑しいたつて悪いよ」

由「だがね真面目で一生懸命に来るので、変な事があるもので」

幸「旧^{もと}お出入りをしたお屋敷の御^ご妾^{しやうふく}腹と云うが、けれどもお眼に懸つた事もねえが、何

んだかお可愛^{すしあい}そうな様な筋^{すじ}合^あがあるのだよ」

由「お可愛^{すしあい}そうだつて何んだか知れませんが、姑^{しゅうとめ}の意地の悪い奴、叔母さんか御隠居さん

かが在^あつて、拗^{ひね}つた事を云つて、そうお茶をつぐからいけねえの、そうお菓子^{かし}を盛てはい

けねえ、赤いのは上へ乗つけて又其の上へ乗つけては赤いのが染^つくからいかねえとか、種^い

々な事を云う奴があるの、それが種^こになつて段々お癩^{ちげ}になつたのだから、お癩^{ちげ}を癒^いそ

うてえので……お癩^{ちげ}てえば今来た娘^こも癩^{ちげ}持^ぢに違^{ちが}えねえ」

幸「何故」

由「なぜつたつて此処の湯は癩^{かた}に宜しいから、癩^{かた}を癒しながら働きに来て居るので、働き

と云うような身分^{身分}じゃアないが、只病^か気^なには敵^かわぬ^なから余儀なく働き、運動^{運動}かた／＼斯

うして居ると云うのではありませんか」

幸「そんな奴があるものか、鯉^ここくを持つて来るぐらゐに運動^{運動}てえ事があるものか」

由「けれども……オヤ是れはお出でなさい」

女「誠に遅くなりました」

四十

由「おや先刻さつきから待つて居ました、遅くつても結構、鯉こく結構、これは不思議で」

女「これは誠まことにおいしくは御座いませぬが、召上るよせように」

由「此方こちらの家うちからかえ」

女「いゝえ鈴木屋からで」

由「それで、鉄火煮は恐れ入った……貴方の様な別嬪にお酌をして貰うのを楽しみにして来たので、貴方の居るのを知つて来たので、貴方が居ないと伊香保から此処まで来はしません……貴方にがわらい苦にが笑わらいしてはいけません、何うもお品が好すなうがすな、何か云うとこう苦笑にがわらいいなどは恐れ入りますねえ」

幸「姉ねえさん、此の人はお饒舌しゃべりで失敬な事を言うから腹ア立たちやアいけません」

女「どう致いたしまして」

由「いや何うも此の鯉こくなどは……中々どうも恐れ入りましたね」

幸「鯉こくなどは此処へは良いのが来る、信州から来るのは不良いけねえがあるという……これは結構……ウム鯉の鱗こけなどを引いたの不思議で、鱗が些ちつとも無いねえ」

女「へえ、これは鱗こけは引いてありますから」

由「鯉の鱗なしは軟やわらかい、羊羹ようかんをしゃぶったようで、鯉の鱗なしは不思議で、こりやア頂戴……鉄火煮は好ようがす……ウム、ゴソソとするのは何んです」

女「あの鯉の鱗を煮ましたので」

由「へえ、鯉の鱗を引いて鱗ばかり煮たの……へエこりやアどうもないね、へエこりやア不思議で、鱗ばかりの鉄火煮しやぶ、舐しゃぶつて居ると旨いが、醤油したじツ気が抜けると後はバサ／＼して青貝を食つて居るような心持で不思議な物で……姉ねえさん一寸ちよつと此処に居て遊んで」

女「はい有難うございますが、余り長く居りますと厳やかましゆうございますから、又御用がございましたら」

由「まあ／＼一寸おいでなさい、今旦那がね貴方のお身の上を酷ひどく心配して、お品と云いお行儀すてきと云い、裾すそ捌さばきと云い何うも抜目の無いお美しい嬢さんだが、どう云う訳で山の中へ来て居ると云うのでね、旦那が大変心配ですが、貴方は東京ですね」

女「はい東京でございます」

由「どういう訳で」

女「はい、いえなにもう種々いろいろ深い訳があります」

由「へえ、こりやアどうも深い訳があるに違いないのでしよう、どうも此の鯉こいの鱗こけばかりを煮て出すなんてえのは恐れ入りました、不思議で、どういう訳で、えゝ」

女「なにもう種々」

由「そこをお聞き申したいので、姉さん困りましたねえ」

幸「これは真ほんの心ばかりです」

由「旦那がこれを」

女「誠に恐入ります」

由「構わずお仕舞なさい、落すといけませんから、仕舞い悪いにくものですが帯の間へ……宜しい私が挟んで上げましょう」

女「いえ、いけません」

由「どうも恐入った、手を付けて帯の間へヒヨイと云う、これは遣りたがるからねえ、へエー、どうも有難い」

幸「姉さん東京は何処、私共も東京で」

女「はい、東京のお方と見ますと誠にお懐かしくつて、つい何うもお座敷へ参りまして、東京のお方だと、種々御様子を承わりとうございますから、遂々長く居ります」

由「こりやアそうでげしよう、伊香保でも、東京は違いはしませんか、観音様は矢張彼処にありますが、聞いて聞いた人がありましたが、あれだね、どうも妙なもので、此処は旅で、旅で会うのは親類で無くつても落合うと親類のような気がして、懐かしいもので、変なもので、伊香保なんぞへ往つて居ると交際が殖る、帰つて見ると先達ては伊香保でと云うので、麻布の人が品川、品川の人が根岸へ来て段々縁が繋がり、お前さんの処へ娘を上げましよう養子に上げましようなどと云つて、親類がこんがらかる事があります、湯治場は一体親類殖しの処で、貴方は東京は何方で、何か訳があるのでしよう、え、秘したつていけません、何んな山の中でも思う人と添うならばと云う、これは当り前で、吾妻川で布などを晒して、合間に鯉こくの骨を取つて種々な事をなさるんでしよう」

女「そんな訳で来たものではございません」

由「どう云う訳で」

幸「止しねえよ…貴方お屋敷だねえ」

女「はい誠に不粹者ぶいきものでございます」

四十一

幸「私もお屋敷へお出入をした者で、大概お屋敷は存じて居りますが、貴方の御様子は御家中でも無いようですが、御直参ごじきさんかね」

女「はい」

と段々聞かれ、ば聞かれるほど胸が迫ると見えて、彼の女は下を向いて居りますと、膝へバラ／＼涙を落します。

由「旦那……少しお泣きのようだから、こんなことは深く聞かれませんが、此処で貴方癪でも起されると旦那が押すような事が出来ず、峰松は今こんにち日は居りませんから、二人で間に合えば宜しいが……御心配と見える」

幸「どう云う心配で」

女「はい……兄が放蕩で、私は田舎の事はさっぱり存じませんから田舎へ連れて往って、良い処へ奉公をさせる、却かえつて田舎には豪農や豪商があるのだからと申しまして、私も東

京に居りまして知る人に顔を見られるも、恥かしゆう存じますから、そんなら田舎の奉公をしようと思しまして、うつのみや宇都宮へ参りますと、私は兄に欺だまされまして置去になりました」
由「酷ひどい兄あにさんで……旦那酷いじやアございませんか、お兄い様がどうも……原の中か何つかでしよう」

女「いえ何、イエもうアノ……これで宜しゆうございます」

由「これで宜しいたつて、言いかけて止やめてはいけません、構かまわないから後あとをお聞かせなさい是非……まアお坐りなさい」

幸「お気の毒なわけでねえ」

由「え、貴方、どう云う訳で」

幸「失礼ながら何んですか、お兄い様は矢張やつぱり士族様か、違つたお兄い様かえ」

女「いえ真実の兄でございます」

由「どうしてお妹いも御ごを宇都宮へ置去に、何ですか宿屋かえ」

女「いえ、私はさつぱり存じませんで居りましたが、往來の方から這入りませんで裏路うらみちから這入りますと、広い庭がございまして、それから庭伝いに座敷へ通りまして、立派な席へ参つて居ります中に、アノ表の方へ参つて掛合を致して、私をソノ或あるところ処へ、なん

で、質入れに致してお金を沢山借りて、兄は表から逃亡^{だしぬげ}を致したのでございます」

由「こりやアどうも酷うござね、貴方を質^{いれ}に入^{いれ}て流す気ですネ、酷いこと」

幸「どうも酷い事をしたものですネえ、そりやアまア貴方も恟^{びつく}りなすつたろう、後^{あと}で勝手も知れず」

女「段々聞きますと宇都宮で娼妓^{つとめ}をするだけの証文を貼つて、アノお前も得心の上で証文は是れ^{そん}で、金も五十円兄様に渡したから何んでもと申されますから、私も恟^{びつく}り致しまして、其^{そん}様な事は出来ません身の上でございまして、老体の母もございまして、母に相談の上に致さんければなりませんと云つて、十日のあいだに情を張りまして泣き明して居りました処^{こゝ}が、此家の關善さんが日光からお帰りに宇都宮へお泊りで、段々様子をお聞きなすつて、氣の毒な事と御親切に五十円を貢^{みつ}いで下すつて、關善さんに連れられて参つて、お手伝を致して居りますが、とても宿屋奉公では五十円と云うお金は返す事は出来ません、鈴木屋さんで人が足りないから御祝儀も貰えるし、そうしたが宜かろうと申されますが、關善さんと鈴木屋さんと両方で稼ぎを致しても五十円のお金では幾年此処に奉公をして居りましたら返せますか、承われば夏ばかり繁昌致しても、冬の中^{うち}は遊んで居ると申しますから、中々お金の返しようもございません」

幸「それはどうも、で其の東京にお兄あにいさんが逃げてしまつても、お母つかさま様がお在いでなさるか、お母様はさぞお驚きで」

女「母はもう六十二になりました、母はアノ悔りいたしましたして身体も大分あし悪くなりましたが、此方こつちより手紙を出しましたも向むこうから参ることも出来ませんで、此の頃は兄が諸方の借財方に責められまして、僅わずかばかりの夜の物諸道具も取られまして、此の頃は煩わづらつて」

由「へえ、どうもあるねえ、一度ね、私わしは伊豆いずの網代あじろへ行つたことがある、其処そこに売られて来た芸妓げいしやは、矢張叔父おじいさんに欺だまされて娼妓じやうぎにされて来たと云うので、涙を落しての話で有つたが、それはお氣の毒な事だねえ、左様でげすか、お屋敷は何方どちらでございます」

幸「ハ、それじゃアお聞き申しますまい」

由「旦那、そんな遠慮をしてはいけません」

幸「それでも耻になると仰しやるから」

由「貴方、旦那が御親切だから貴方の身の上を心配して、お名前をお聞きなされるので、貴方は親の耻になると云うは御尤ごもつともだけれども、何もこれは決して言いませんよ、誰が聞いても……私わたしは随分お饒舌しやべりだが、旦那むかに对むかえば私わたしだつて言わぬと云つたら決して言いませんから、仰しやい身の上を、旦那すがに継つれば何うにか成るかも知れません」

女「有難うございます、屋敷は旧麻布もとあさぶの二本榎にほんえのきでございます」

由「麻布二本榎え、何処、六本木と云うのはあるが、六本木の方でありますか」

女「いえ二本榎で、瀧川たきかわさきよう左京と申す者の娘で」

幸「え、アノお側を勤めた瀧川さん、千五百石も取つた家のお嬢さん……」

由「え、これは恐れ入つた、失礼でございます千五百石も取つた方の、私などは前ぜんからいまだに貧乏だから些ちつとも変りませんが、只貧乏慣れている処が不思議で、少しも身代は開けないのだから、どうも恐れ入つたわけです」

幸「私わたしは瀧川様へお出入をした事もあります、真まことに貴方は瀧川様のお嬢さんでございますか」

女「はい、決して神かけて嘘は申しません、どうぞ此の事は委くわしくまだ大屋様へは申しませんから、どうか内聞になすつて下さいまし、東京のお方で御親切に仰しやつて下さいま

して、お懐かしいから迂濶り申したので、どうぞ御免なすつて」

と娘は胸一杯になりまして口も利かれませんが、おろくくして居ります。

幸「お前さんは幾歳で」

女「はい、廿一でございます」

幸「お気の毒だねえ、どうか貴方を五十円で失敬ながら身請をして上げたいと存じます、お母さんが御病気でお在なざる事ならば、私が關善へ話をして五十円の金を出したら、東京へ連れて帰つてお母様に会わせる事も出来ましょう」

女「はい、それが出来ます事なら……」

由「旦那、私も少し助けますよ十分の一……一度にはどうも出来ませんから、日掛に追々入金をいたしますが、どうか身請をして上げて下さい」

幸「關善さんへは帰る時話をして、今パツと話すよ面倒だから……それから貴方の身の上だけはお母様にお逢わせ申しますが、お母様は矢張東京にお在でございますか」

女「はい唯今では小石川 餌差町に居ります」

幸「宜しい、屹度連れて往きます、身請を致します」

女「あの、本場で」

由「本当だつて心配なし、どんな事をしても虚言は大嫌いの旦那さまで、十二時に此処へ来い、御膳を食べさせると云うと整然とお膳が出て居るので、御心配ない……此方も感じてホロリと来ますねえ」

女「有難うございます、私は夢のような心持で」

由「旦那……お手水ですか、直き突当つて右の方です……だがね姉さん、彼の旦那様と云うものは御新造様が無いのですよ……アレサ実は御新造さんは三年前に亡なつてお独身でおいでだが、貴方善いたつて金満家でありますから、貴方がお出でなさるような事があればお母様ぐるみ引取つて、生涯安樂でげすが、何うです」

女「其様な事は」

由「其様な事だつて、それが肝腎なので、ウンと仰しやい、男が好くつて、ちよいと鑄声で一中節が出来る、それで揉むのが上手でお灸を点えたり何かするので……」

女「私は実に夢のようでございます」

由「夢見たいですが、是れがさめない夢です……後からまた夢が来るので……今夜はねえ何うかして此処へ入らつしやいまし、寢就いた処へ私が周旋致しますから」

女「夜出ますと叱られます」

由「誰に」

女「あの大屋さんに知れると悪うございます、橋の際の瓦斯が消えますと宿屋の女が座敷へ参るは厳しゆうございます」

由「壺ツてえのは此処ですか、厳しいなんて生意気な事を云いますね、いゝじやア御座いませんか、貴方を身請して往くのですから、大屋が何んたつて構やアしません、大屋が云つても差配人が苦情を鳴らしても何うでもしますから宜しいではありませんか、貴方心配はございませんお出でなさい、ちよいと、まんざら醜い男でもございますまい、ようがし
よう様子が、お厭かえ……ハア〜これは恐れ入りました」

といつて居る処へ幸三郎が便所から歸つて参り、

幸「何を掛合つて居るんだ」

由「フハア……掛合筋があつて誠にハヤ貴方、手水を長くして居らつしやると好いのに」
女「あの私は又参ります」

幸「貴方又入らつしやい、証拠でも何でも上げる、決して虚言は吐きませんよ」

女「有難う存じます、御機嫌宜しゆう」

と嬉しそうな様子で歸りました。

由「どうも御機嫌宜しゆうと云つて、手をつけて小笠原流で、出這入に御機嫌宜しゆうな
 んてえ様子は無いねえ、此処の女中などは、ガラリピシヤ用はねえかなんてえ山家やまがの者で
 面白おもしろえが、彼女あれア旦那何処へも往ゆき処がないので、可愛相で、彼女はちよいと様子が好
 い、貴方の傍へ置いて権妻ごんさいと云つても奥様と云つたつても決して恥かしくございませぬね」
 幸「そんな事を云つたつて年が違わア」

由「年が違つたつて何も構やアしません、此の間も六十七になる老としより人が十七になる女房
 を貰つたが、世の中が開けたから構やアしません、貴方は堅過ぎるから」

幸「馬鹿を云え、可愛ちよつとそうだからよ」

由「其処をなんして一寸可愛ちよつとがつて、貴方の手生ていけの花にしてお遣りなさい」

幸「馬鹿ア云うな」

と是から機はずんでお酒を飲んで寝ましたが、さてお話後あとへ返りまして。

四十三

丁度其の日に峯松が万事都合好く話を致して、彼かのお藤と云う隣座敷のお客を車に乗せ

て引出しまして、伊香保の降り口から一挺車を雇いまして、女中を乗せて渋川へ下りて、金子へ出しまして、金子から橋を渡り北牧へ出しまして、角屋で昼食をして、余程後れました。それから、男子村へ出しまして村上へかゝりまして、市城から青山伊勢町中の条へ掛ると日は暮れかゝりまして、木村屋で小休みに成りますから十分手当をして遣り、車夫も疲れた様子だから車を取換えようと云うが、是非四万まで往きますと云うも十分手当をして遣りましたからでございませう。酒の機嫌で遅くはなつたが十時までは屹度引張るからと、峯松も疲れては居るが親切者、早く往つて逢わせようとガラ／＼／＼／＼に田舎家の灯がちら／＼見えまして、幽かに右の方は五段田の山続き、左は吾妻山、向うは草津から四万の筆山、中を流るゝ山田川の水勢は急でございまして、自茨瀑と字いたします、本名は花園の瀑と云う中の七八間もある大瀑がドードツと岩に当つて砕ける水音。林の蔭に付いて下る道があります。気味の悪い処にさいかち橋が架けてあります。これを渡ると直ぐ山田村、近道で其の小坂の処に庚申塚があります。そこまで来ると車を下して、

峯一若衆大きに御苦労だのう、骨が折れても急いで遣つてくんねえな、十時までに中

の立場^{たてば}まで往^いこうじやアねえか」

車夫「何しろ昨日^{きのう}沢渡^{さわ}までの仕事^{しごと}で、甚^えくバーter^てルから、女客^{おんな}でも何^{なに}うもとても挽^ひけねえよ」

峯「挽^ひけねえたつてお前^{まへ}どうするんだ」

車夫「此^{こゝ}処^{ところ}で若^わ衆^{しゆ}暇^{あひだ}ア貰^{もら}いてえものだ」

峯「戯^{ふざ}けちやアいけねえじやアねえか、此^{こゝ}処^{ところ}まで来て、此^{こゝ}処^{ところ}じやア立場^{たてば}も無^なえ、下^{した}沢渡^{さわ}へ別^{わか}れ道^{みち}の小^こ口^{くち}まで往^いきねえな、彼^{あつこ}処^{ところ}へ往^いけば又^{また}一人^{ひとり}や二人^{ふたり}帰^{かえ}り車^{くるま}も居^ゐるだろ^うから、此^{こゝ}処^{ところ}じやア何^{なに}うもしようがねえやな」

車「どうもしようがねえたつて、挽^ひけねえものア仕^しかたがねえ、今朝^{けさ}から渋^{しぶ}川^{がわ}の達^{たつ}磨^ま茶^{ちや}屋^やで疲^{つか}れて寝^ねて居^ゐたんだ、其^{その}処^{ところ}を帰^{かえ}つて又^{また}来た^きたが、身^み体^{てい}がバーter^てルでどうも……」

峯「馬^{うま}鹿^かにしちやアいけねえ、そんなら何^{なに}故^{ゆゑ}中^{ちゆう}の条^{じょう}の木^き村^{むら}屋^やで左^さ様^{やう}云^いわねえ、木^き村^{むら}屋^やで挽^ひけませんと云^いえば他^{ほか}の車^{くるま}を頼^{たの}もうじやアねえか、からかつちやアいけねえぜ、東^{とう}京^{きやう}者^{もの}だつて東^{とう}京^{きやう}ばかりの車^{くるま}を挽^ひくんじやアねえ、此^{こゝ}地^ちえ来^きて渋^{しぶ}川^{がわ}で一^{ひと}円^{げん}に一^{ひと}升^{しやう}の仲^{なつ}間^ま入^いをして居^ゐる峯^ね松^{まつ}だ、大^{たい}概^{がい}にしやアがれ、馬^{うま}鹿^かにするな」

車「何^{なに}だ峯^ね松^{まつ}だか荒^あ神^{かみ}松^{まつ}だか知^しんねえが、怖^{おそ}くもおつかなかくもねえ、挽^ひけねえんだ、何^{なに}を

云やアがる、撲なぐるぜ」

峯「なに撲なぐつて見ろえ……」

岩「まア峯さんお待ちよ、私ア歩くよ……怪けしからんよ、こんなものに構かまつては損だからお止としよ」

峯「構かまうたつて、そんなら中の条じょうで云やア何なにうにでもなるに、人を馬鹿ばかにしやアがつて、女連めづらだと思おもつて脚あしもと元もとを見やアがつて」

岩「まア〜好よいよ、鞆たもとを此方こつちへ下くだしてね」

峯「挽ひけなけりやアそうと早く云いえば好よいに……」

岩「そんな事を云いわずに、私わたしが困こまるからよ……挽ひけなけりやアさっさとお出いで」

車くるま「お、往いかねえで何なにうする」

峯「なに、生意しやうい気きな事を云いやアがる」

車くるま「何が生意しやうい気きだ」

峯「なに」

岩「お止としよ、峰みねさん〜」

と云いう中うちに彼かの車くるま夫おは折おり田たの方かたへガラ／＼／＼／＼と引返ひきかえしましたが、道中みちには

悪い車夫くるまやが居ります。

車ごま「容ア見やアがれ」

峯「なに」

岩「お前おからかいでないよ」

峯「面ア覚えて置け」

岩「まア〜お止しよ」

峯「詰らねえ事を云やアがって、脚元を見やアがって、此処まで来て挽けねえなんて、酒え飲まして置いて手当も遣つて居るので、中の条だけの賃は遣りましたが、それから先の賃は遣りません、彼奴あいつも無駄挽むだつびきをしやアがって……どうも済みません」

岩「私だけは歩くから好よいよ……お前さまはさぞお厭でございましたろう」

藤「私びっくは恟りして、怖いから何うしたら宜かろうかと思つたが、岩や、お前歩けるかえ」

岩「え、私はもう宜しゆうございます、二里や三里は歩けますからお前様さえお乗せ申せば宜しゆうございます」

藤「山道だよ」

岩「いゝえ宜しゆうございます、歩けますから」

藤 「お前疲れると」

岩 「いえ大丈夫で」

峯 「まア一服遣りましようから、もう是からは遠くもねえ道でござえますから」

藤 「峯松さん、さぞお疲れて私のような者二人を連れて来てお厭でしょう」

峯 「私わっちは心配な事はありませんが、まア早くお連れ申して旦那にお会わせ申そうと思つて、私も骨を折るのでどうかへえ」

マツチを摺つてパクリくと火をうつし烟草を喫のんで居ながら、

峯 「実はねえ草くたぶ臥たぶれました」

岩 「さぞお疲れだつたらう、貴方にも種いろく々お世話になつたから、どのようにもお前様に願つてお礼も致します、誠に御親切なお方だと云つてお喜びで」

峯 「いえ、もうお礼も何も入りません、旦那も待つてるものだから早くお会わせ申してえと思つて何したので……え、貴方、もしお岩様え、礼をし為しようと仰しやるなら……」

岩 「はい」

峯 「私わっちは、あの誠に申し兼ねましたが、折入つて願いたい事があります」

岩「まあ呆れた事をいう奴じや、女と侮り身分も弁えないで、仮令御新造様はお弱くても私が付いて居るからは……汝たちに指でもさゝせる氣遣い無い、兎やこうすると許さんから左様心得ろ」

とて懐より把り出したのは、旧弊であります故小さい合口を隠し持つて居ますから、柄へ手を掛けて懐から抜きにかゝると、

峯「ナニ何をしやアがる、刃物三昧をするから元は旗下の嬢様とかお附の女中とか、長刀の一手ぐらいは知つても居ようが、高の知れた女の瘦腕、汝等に斬られてたまるもの

か、今まで上手を使つて居たが、こう云い出したからは己も男だ、□□□□□□□□□□

□□□□

岩「どうも呆れた奴、手込にすれば許さんぞ」

峯「どうでもしやアがれ」

岩「どうでも」

と合口を抜いて飛付くと、車夫の峰松はよけながら後へトン／＼と下りると、後からズーツと出た奴は以前の車夫であります。これは渋川の杵八と云う奴で、元より峰松と馴合つて居りますから脱したので、車を林の陰に置き、先へ廻つて忍んで居りましたがゴ

ソ／＼と藪やぶ蔭かげから出て、突然お岩たぶきの髻もとを把とつて仰あおむけ向むけに引摺ひきずりり倒たふしました。
 岩「あれー何をする」

と飛付とびついて参まゐつた時、これを見て驚おどきまして彼かのお藤ふじは
 「あれー」

といつて逃にげにかゝる。

峯「逃にがすものか」

と飛付とびつこうとするを見て、お藤は逃にげるも真ま暗くらがり、思おもわず崖かきを踏ふ外はずしてガラ／＼
 〳〵と五六丈もある山田川の渦卷ま立つた谷川へ、彼かのお藤は真ま逆さかさまに落おちました
 が、これは何どん様ごんな者ものでも身体みが微塵みじんに碎くだけます。

峯「どうした太八」

太八「なんだ、己おれが横よこツ腹はらア蹴けたら婆おつ死ちんだ」

峯「大きに御苦ご勞らうだ、何なにしろ惜あはしい事ことをした、肝腎たの女まア此この谷やへ落おしちまった」

太八「どうした」

峯「川の中へ飛と込んだ」

太八「どうする」

峯「どうするたつて仕様がねえ、とても助からねえ、愚図ツかして人が来ると仕様がねえ、鞆は車へ乗せるから……手前、何処へ往く」

空「往くツたつてお前唯は往かれねえ」

峯「そりやア極つて居らア、さアこれを持って往け」

空「これだけありやア今月一杯は休みだ」

峯「旨え物でも食つて娼妓でも買え」

空「有難え、こんな手伝しなけりやア旨え物が食えねえから」

峯「己は乗せて来た鞆を持って往くから、後ア又伊香保で会おうぜ」

空「じゃア別れる」

と彼の鞆を付けて峰松は折田村の傾斜を下りましたが、見かけによらぬ大悪人でござい
ます。此の峯松は三年前に足利栄町に於きましてお瀧と密通して、茂之助夫婦が非業な死
を遂げた村上松五郎と云う土族で、今姿を変えても斯様な悪業を働いて居ります。

さて車夫の峯松が、欺いて連れ出しましたお藤と云う彼の婦人を、皂莢滝の谷間へ追
 込みましたので、お藤は勝手は知らず、足を踏外して真逆さまに落ちましたが、御案
 内の通り彼の折田の谷は余程深うございまして、下には所々に巨岩が有りまして、これ
 へ山田川の流れが衝つて渦を巻いて落します。水色真青にして物凄しい所であります。前
 面には皂莢滝と申します大滝が有りまして、ドウードツと云うすさまじい水音でございま
 す。其処へ落ちては五体粉微塵となるくらいの嶮岨な処でありますから、決して助かりよ
 う筈はないのでございます。丁度其の晩山田川へ筏を組みに参つて居りましたのは、市城
 村の市四郎と云う俠氣の人で、御案内の通り筏乗と申すものは、上州でも多く五町田、
 市城村、村上彼の辺に住いを致して居ります。此の日向見川と荒川と云うのが二筋に
 別れて来ます。是は信州と越後との境から落して参り、四万川と称え、流れの末が下山
 田川に合して吾妻川へ落しますゆえ、山から材木を伐出し、尺角二尺角或は山にて
 板に挽き、貫小割は牛の脊で下して参ります。山田川で筏を組みますには藤蔓を用い
 ます、これを上拵えととなえ、筏乗の方では藤蔓のことを一把二把と申しませんで、
 一タキ二タキと云います、一駄六把ずつ有りまして、其の頃では一駄七十五銭で、十四五
 本ぐらいずつ繋げましてこれを牛の脊で持つて来るのを、組揚げて十二段にして出します

が、誠に危い身の上でございます。筏乗は悪く致すと岩角に衝^つ当^{あた}り、水中へ陥^{おち}るような事が毎度ありますが、山田川から前橋まで漕^こ出^だす賃^{ちん}金は稍^{よう}く金二円五十錢ぐらいのもので、長い楫^{かじ}を持ち筏の上に乗^のつて、前後^{あとしき}に二人ずつ居^いりまして、中^{なか}乗りが三人ぐらい居^いまして、忽^{たちま}ちに前橋まで此の筏が下^{くだ}りて参^まりますが、中々容易なものでは有りません。只今彼^あの市四郎が上拵^かえの手伝^ていを致^{いた}して居^いりますると、

「ギヤ—」

と云う女の声に恟^びつくと、市四郎が仰^あ向^むいて見^みますと、崖の上からバラ／＼／＼と櫛^{くし}笄^がが落^おちて来^きました。

市「おや……何か落ちて来た」

と身を屈^かめて透^すして見^みますと、谷間^{たにま}に繁茂^{はんまう}致^{いた}して居^おる樹木^{じゆもく}にからんで居^います藤蔓^{ふとうま}は、井戸綱ぐらいもある太い奴^{やつ}が幾^{いく}つも八重^{やえ}になつて禁^かんで居^います、其^{その}処^{ところ}へ陥^{おち}りましたはお藤と云う女の運^{うん}が好^いいので、藤蔓^{ふとうま}と藤蔓^{ふとうま}の間^まへ身^みが挟^はま^まつて逆^{さか}さまに成^なりましたから、髪も乱^{みだ}れ、お藤は一生懸命^{いっしやうけんめい}に藤蔓^{ふとうま}へ掴^{つか}まつたなり氣^きが遠^{とほ}くなりました。

女「あゝ……」

と云う声に恟^びりして市四郎が仰^あ向^むいて見^みますと、一人の女が藤蔓^{ふとうま}の間に挟^はま^まつて下^さがつて

居ましたから、

市「おゝゝ落ちたこと、あゝ危い」

と素より勝手を知つて居りますから、忽ちに市四郎が岩角に捕まつて這い上り、樹の根へ足を踏ん掛けて彼のお藤を助けまして、水を飲ませ脊を撫り、

市「何か薬でもあるか」

と聞きましたが、お藤は更に物も云えません様子だから流れの水を飲ませ、脊中を撫り、種々介抱致して居る中に漸く生氣に成つて、

藤「実はこれゝの悪党の為に騙されて此様な難に遭いましたが、従者の下婢岩と申すのは、何う致しましたか、何卒お探ねなすつて下さいまし」

市「ムゝそれは飛んだ事だった、私が往つて探して上げやんしよう」

と素より狭気の人ゆえ、御案内の通り恐ろしい谷間の急な坂を登つて参り、庚申塚の在ります折田の根方へ来て見ますると、血が少し流れて居るのみで、供の女中岩と申すもの、死骸が見えません。櫛や筭は折れて其処に落散つて居ながら死骸が分りません。すると其処に野口權平と云う百姓がごさいます、崖の方へ引付いてある家で、六十九番地で、市四郎は予て知合の者ゆえ其家を起して湯を貰い、

市「何か薬はあるか」

權「だらにすけならある」

といつたが埒らちが明きません。

市「まアお女中御心配なさるな」

と是から直すぐにお藤を連れまして、市城村の我が宅へ歸つて来まして、深くお藤の身の上を聞きました。

四十六

此方こちらは左様そんなな事は知りませんから、明日あしたは来るに違まちいと待まちに待つて居りました、橋本幸三郎、岡村由兵衛の二人は、鈴木屋の下婢おんなは瀧川左京と云う以前は立派なお旗下のお嬢さんと知りませんでしたから、

幸「あゝ何も彼あれに酌しやくをさせて、お前めま姐ねえさんと云つたぜ」

由「旦那本当にお氣の毒じやア有りませんか、あなた五十両で彼あの女こを身請して東京へ連れて往いけば、お母つかさんが嘸さぞお悦よろこびなさいましょう、さつそく貴方の御新造にお取持を致し

ましよう」

幸「然うお太鼓口をきかれちやア困る」

と幸三郎は飲めない酒を飲んでグツスリ寝付きますと、温泉場も一時（午前）から三時までの間は一際と致します。往來は素よりなし、山国の事でございませすから木に当る風音と谷川の水音ばかりドウドツという。折々聞ゆるは河鹿の啼声ばかり、只今では道路がこう西の山根から致しまして、下路の方の川岸へ附きましたから五六町で往かれますが、私が十ヶ年前に参りました時には上路へ参りましたから八丁余もありまして、足場が余程悪く、上路へ参りませんとなだれに橋が架つて居りまして、是から彼の關善と云う大屋の家へ参ります。橋を渡らずに左に附いて谷川をザブ／＼膝越で渡つて参る曲者一人、山路染の手拭に顔を深く包み、身軽に尻からげを為まして四辺へ眼を付けて居りますと、灯火もほんのりと薄暗く障子に写ります、橋の傍に点いてありますランプ灯も消えかゝりましたを幸いと、何時か忍入りたる悪者は、四五間の川を渡つて石垣に取付き、そろ／＼關善の玄關の角の座敷へ這上りました。只今でも開けん処へ参りませすと、温泉場などでは余り戸締りを致しません、私が参りました時分には頓と締りが有りませんから、自由にそつと障子を開けて、濡れた足で窓から忍び込み、長四畳の入側の処へ踏込み

まして、二重に締つて居りました唐紙を細目に開けて、覗いて見ますと、行灯あんどうの火光あかりがぼんやり点いて居ります。幸三郎も由兵衛もグー／＼と云う鼾いびきの聲、そつと襖ふすまを開けて枕元へ忍び込み、布団の間に挟んで有ります金側きんかたの時計に珊瑚珠さんごじゆの大きな玉の附いたボン筒ボンとうの腰差の煙草入を盗んで自分の腰へ差し、時計を懐へ納れ、まだ何か有るかと思つたが、大概の物は皆靴みんなへ納れて此の旅亭やどやへ預けて置きましたから何も有りません、岡村由兵衛の枕元へ参つて見ると煙草入が一個有りました、これをも盗んで我腰わがへ差そうとする途端に、

「ウーン」

と由兵衛が寝返りをする様子に驚き身を引いて、入側いりがわの方へ出に掛ると、玄関口から這入つて来ましたのは前申ぜんし上げました瀧川左京の娘おりゆうにて、私の身体を身請してくれと云う旦那様に一言頼ひとことみたいことも有るが、何うかしてお目に懸りたいが、鈴木屋さんに知れても悪いし……なれども旦那様が夜が更けたらソツと忍んで来いと仰しやつたけれども……参るのも恥かしい……が、どうも真実ほんとか虚言うそかと思つたのでございましょうか、今そつと拔足を致して玄関の式台を上り、長四畳へ這入つて参り、折曲おりまがつて入側の方へ附いて来ます途端に、頼冠ほうかむりを為た曲者が、此方こちらへ

出に掛るから、恟りして後へ退りました。此方の曲者も人が来たなと思いましたが怖いゆえ窓から戸外へ出ようと思ひ、這うようにして玄関の方へ出に掛ります。此方では襖へピツタリ身を寄せて透して見ますと、橋の傍に点いて居ますランプ灯の火光ばかりで有りますけれども其の姿が見えます。悪者の方でも相手が女だからびくともせず、若し己を取捕まえたなら殴ちのめして逃げようと腹を据え、今出に掛ると、

りゆう「おい／＼松さんじゃアないか、松さん」

と己が名を呼ばれましたから恟りして透し見まして、

曲者「何だ……お瀧か」

りゆう「あゝ、私はまア種々お前に話が有るんです、逢いたかつたが何うして此処に居るの、まア此方へお出でよ」

とむりやりに松五郎の手を取つて、

りゆう「此処から往くと知れないから」

とソツと忍んで關善の裏手へ出まして、叶屋の傍から小橋を渡り、田村の下の小商人の有ります所に蕎麦店がごさいます。此家は予て自分も時々借りる家と見えまして、此の二階へ夜半に忍び込んで頬冠を脱り、ほつと息を吐きました。

四十七

松「何うしたえ」

りゆう「私も何うかしてと種々心配して居ましたけれども、さっぱりお前さんの様子が分りませんでした、能くまアお前此方へ出て来ておくれだね」

松「己ア此の通り姿を変えて人力挽、何んでも手前が上州路に居ると聞いたから、草津か、沢渡か、伊香保にでも居るかと思つて居たのよ、併し己も危え身の上だが、渋川へ来て車

夫になつて、東京の客を当込んで、車引の峯松と是まで化けて居るのも、実は手前に

逢いたいばかりで彼方此方とまごついて居たが、碌な仕事もする訳じゃアねえ、と思う

うちに宜い塩梅に今度霊岸島川口町の御用達だてえ橋本と云う野郎を乗せた処が、己を正直者だとか律義者だとか惚込んで次の間へ置くばかりに、すっかり彼奴の腹へ這入つちま

つたからたんまりした仕事が出来ようかと思つて居ると、隣室に居た女が其奴に岡惚をした様子だから、些とばかり好い仕事を為ようと思つと、こいつア失策をくんだが、伊香保

へ残した荷物を取りに往く証拠の手紙が有るから、是れを持って往けば先方でも雑物を

渡すに違えねえと思うんだ、少しばかりの仕事だけれども、これを纏めてドロロンと決めよ
 うと思うんだが、往掛いきがけの駄賃だちんに幸三郎が金を持って居るから跡を躡つけて此処まで来たが、
 首尾しゅび好く座敷へ忍び込んだが、枕元に鞆たもとがねえから其処そこに有合せた煙草入たばこいりや時計とけいを引ひつ浚さら
 っつて表へ出ようとする途端とつたんに、手前てまへに出で会あひしたのよ」
 りゆう「私も宇都宮うとみやで少し失策どじを組んだから此方こつちへ来たんだがね、此の鈴木屋すずきやへ身を落着
 け、色氣いろけの客きやくがあつたらと思おもう処ところへ泊とどめた奴やつはお前の話はなしの幸三郎きんざう、此奴こいつを欺だまして旗下きんかのお
 嬢ぢやう様さまだと出鱈目でたらめな言ことを云いつて隠かくれて居ゐるのさ、始めて橋本はしもとに逢あつたのに舌したの長いことを云
 うから、生なま空ぞらア遣つかつて泣ないて見みせてとう／＼……關善せきぜんには内証うちしやうだよ、鈴木屋すずきやさんに知れ
 ても悪いから黙もくつて、おくれよと尽すつかりだま底ち騙だまして口留くちどめを為したが、夜半よなかに最もう一遍いっぺん根縮ねじめを見
 ようと思おもつて往いつたのだが、ちようど宜いい処ところで出會あつたね、実はね關善せきぜんか鈴木屋すずきやか二人ふたりの
 中うち誰たれでも宜いいから金かねを受取うけとり、私の身みを渡わたしたと云いう請うけはん判はんが有あれば宜いいんだがね……三
 文判さんぶんはんでも構かまやアしないが、男おとこの手てでなければいけないの、おりゆうの身みの上に付ついて……
 マお聞きよ、今いま私わたしはおおりゆうと云いう名前なまえになつて居ゐるんだよ、金子かね五十兩ごじゅうりやう慥たしかに、受取うけとり、
 おりゆうの身みの上うへを宜いしくお引渡ひきわたし申まをしますつて、お前まへは其様そのさまな事ことを拵こしらえるのは上手うまいだか
 ら、本当ほんとうらしく巧たくまく書付かきつけを拵こしらえ、金子かねで先方むこうへ妾めかけにでも往いく積たまりにして、宜いいかえ、兎うさぎも

角もそうしておくれよ、お互に別れくになつても隠れ場所があれば、時々出て逢えるよ
うな事がなくつちやア私も苦勞をする甲斐がないよ、私だつて身を切られるほど厭だけれ
ども、表向き明るい処をのそく歩かれる身の上じゃないから」

松「ウン斯様な書付じやア何うだえ」

と硯箱を借りましたが、松五郎はもと旗下の用人の悴で、少しく書付が堅ましく出来ま
した処へ有合わした三文判を押し、おりゆうの名前の下には爪印を捺し、これを懐に入
れて橋本幸三郎より五十両の金を取り、松五郎を越後の浅貝の間道を逃がそうと云う
企でございます。此方では夜が明けると大騒ぎでございます。

幸「枕元に置いた金側の時計と煙草入がない……」

由「私の煙草入もない」

と是から關善を呼んで派出所へ訴えに成りましたから、早速警察官が御出張に相成り、
段々取調べましたが、少しも当りが附かない、随分湯場は稼ぎ賊が多いものでございます。

翌朝あけに成ると皆々打寄り 届とど書がきを書いたり、是から原町はらまちの警察署へ訴える手続が宜からうかなどとゴタ／＼致して居りまする処へ這入つて来ましたのは、年頃三十八九に成る色の浅黒いでつぷりとした丈せいの高い大きな男でございます。長四畳の方の襖を開けまして、

男「はい御免なさい……」

由「はい、お出でなさい何方どなたです」

男「はい、え、二三日前から伊香保の……十二彼の伊香保の木暮八郎とつ処から此方こちへ湯治にお入いでなさつた橋本幸三郎さんてエのは貴方でございますか」

幸「はい、橋本幸三郎は手前てまいでございますが、何方でげすか」

男「私わしア市城村の市四郎という筏乗ですが、お初にお目にかゝります、少しお訊ね申してえ事が有つて出やした、え此処こゝで直すくにお話をしても宜うがすかな」

幸「はい、左様そうでございますか……只今種々いろいろ取込が有りまして、是から少々山の派出所まで参らんければならんですが何御用でげす」

市「なに別の事でも御座えませんが、貴方が伊香保から此方こちへおいでなすつた供に峯松くろまひきてえ車くるま 夫おとこが有りやすか」

幸「はい峯松と申すものはございますが、伊香保へ残して私共は此方へ参りましたが、何か御用でげすか」

市「その峯松を隠さずに此処へ出してお貰え申してえ」

幸「左様でございます、何う云うなんでげすか……おい由さん引込んでちやいけねえよ、此処へ来て掛合っておくれなお前」

といわれて由兵衛が其処へ出て参り

由「へえおいでなさいまし」

市「お前は何んだ」

由「へえ手前は此の旦那のお供をして参りました由兵衛と申すものでございますが、貴方は何んの御用で入らつしやいました、峯松と申す車夫は伊香保へ残して置き、旦那と私だけ先へ此方へ参りまして、二週間ばかり見物かた／＼湯治に参ったのでげすが、へえ」

市「其様な事は何うでも宜いから、早く其の峯松てえ奴を此処へ出してくれ」

由「へえ：早く此処へ出せと仰しやつても只今申上る通り当人が居りませんので」

市「居ねえたつて貴下方の供だから出さねばなんねえ訳じゃアねえか」

由「何んでげす、何う云う訳なんですか存じませんが、居らんものを出せと仰しやつちや困ります」

市「その野郎を此処へ出しておくんなさならなけりやア、私わしイハア、お前さんがたをたゞア置かねえぞ、首でも引ねじ捻ねじつて押おさめえて、本当に原町の警察署へしよびいてツて、私イハア屹度それだけの処さばき分ぶんを附つけねばなんねえ」

由「驚きやしたな、無闇に首を捻ねじるなどと仰しやつても、私わたくしども共どもは生きて居る人間だから、捻ねじるたつて黙もくつて貴方に首を捻ねじられるものでも有りませんが、タゞ峯松は居ねえが此処へ出せと無闇に御立腹ごたつぷくに成なつて仰しやつては分わりませんので、へえ」

市「分わらねえ事はねえ、其方そっちに悪い廉かじが有あるから参まつたゞ、人を殺して物を奪とる奴じろほア盜ど賊ちがに違ちがえねえから、警察署へしよびいて往いくのに何も不思議はねえ、当然あたりめえの話はなししだ」

由「へえー、彼奴あいつが人を殺ころしましたか」

市「ムムーしらばつくれるな野郎、汝うぬらも峯松の同類ちげに違ちがえねえ、伊香保の木暮八郎とこン処とこにお前めえがた方た逗留どちうして居ゐる時とき分ぶん、己おらア知しんねえけれども、何なにだか御用達ごようだちの旦那だんなさまだとか金持かねもちだとかなま虚言そらを吐ついて、漸だん々／＼隣座敷りんざしきの者ものと親おやしく成なつた其そのの上うへで、巧うまく欺だましてよ、此こ様な山やま中ちゆうへ連つれ出でして来きて刃物三昧やぶを為しやアがつて、女めを斬殺きりころして、その死骸しがいを河

ん中へ打込んで、えれエ奴だ、汝が言附けてさせたに違えねえ、二人ながら同類だろう、己ア逃さねえぞ」
と掴みつきそうな勢で有りますから。

四十九

由兵衛は市四郎をなだめまして、

由「マ、静かにして下さいまし、私共を同類だの盜賊だのと仰しやっちゃア困りますが、何う云う訳でげす」

市「私ア筏乗ゆえ上仕事に時々参るんだ、すると、昨夜山田川の崖の藤蔓へ引懸つてキイク泣えてる女が有るだから、私も驚いて漸く助け、段々様子を聞くと、その女の云うには、伊香保の木暮八郎方に逗留している中に、隣座敷に居た橋本幸三郎さんてえ人が、此方の温泉は利が宜い、案内しようといわれて、跡から供の峯松と云う奴の車に乗つて参る途で、その峯松てえ奴が刃物三昧をして供の下婢は斬殺され、私は逃げようとして足を踏みはずして崖から下へ落ちましたが、幸いにして藤蔓へ引懸つて危い命を助かりまし

たが、ア、一口惜しい、欺だまされたつて泣いてるだ、湯場稼いぎの有る事は聞いてるが、貴方あんたの供しの爲た事だから、仮令たとえ貴方らは手を下おろして殺さねえでも、大概同類ちげに違えねえ事は分るだ、御領主様と縁繋ぐがりの御内室ごしんぞうさまだし、お前方も掛かり合あいだから私わしと一緒に警察まで往いきなせえ」

由「何う致いたしまして私わたくし共どもは決して同類などではございませぬ」

市「いや同類でねえたつて掛かり合あいだ」

由「これは驚おどきましたな」

幸「是は何うも思い掛かけねえ事で、あの車夫しやふの峯松と云うものは私の供わたくしじゃ有ありませぬ、

雇やとい人にんでもないで、実は渋谷の達磨茶屋で私わたくし共どもが昼食ちゆうじきを致いたして居ゐりますと、車夫

が多おほ勢ぜい来て供しを爲しようと勧めました其うちの中で、江戸ツ子で氣の利いた様子の好いい奴やつだと

思おもいましたから、彼あれを雇あつて来こますと、至いたつて正直者ちゆうじきのように思おもいましたから目を掛かけて

遣やりましたが、そんなら彼奴あいつがお藤さまを連れ出して無慙むざんにも殺ころしましたかえ」

市「殺ころしたつて殺さねえつてとぼけてもいかねえ、さア警察署へ一緒いっしょに往いきなせえ」

幸「まあ、静しずかにして下さいまし、私わたくしも籍しやくのないもんじゃアありませんから、決して逃

げ隠かくれは致いたしません、私は全く橋本幸三郎と申して少々ばかり御用ごようを達たす身みの上うでござい

まして：この岡村由兵衛と申すものは奉公人でえ訳ではない、日頃宅へ出入りを致すもので、木挽町に居ります何も胡乱うろうんの者では有りません、全く私が連れて参った供でないと言ふ証拠の有るのは、伊香保の木暮八郎方でお聞きなすつても、渋川の達磨茶屋で聞きましても分りますが、私共へ繩を掛けて引くと仰しやるのは誠に迷惑致しますが、其の代り出る所へ出て申訳は致しましょう」

市「さア早く出る所へ出なさい」

幸「それではお藤さまには誠に御気の毒でございましたが、何なんにしてもお怪我は有りませんでしたか」

市「怪我はないだつてよ、藤蔓の間へぶら下つて居たから宜いいようなものゝ、下へ落れば巨おおきな岩が幾つも有るから身体は微塵に打ぶつ砕けるだが、幸わしい私が下に居たから助けて上げなければども、二人の車夫は人を殺し靴と荷物を引ひつ浚さらつて何処かへ逃げやがったのだ」幸「へえ、成程、私わたしの方でも昨夜賊難あに遇あひまして、是から其の届けを致そうと存じ、騒ぎをやつてるのですが、兎に角斯う致しましょう、ねえ由さん、此処つから使つかを遣いつて伊香保の木暮八郎の手代と渋川の達磨茶屋の主人を呼びましょう、幾ら金がかゝつても仕方がないから」

由「然うでございますとも」

と直に手紙を認め、早速来てくれるようにと申して遣ると、木暮八郎方の番頭も参り、達磨茶屋の亭主も来ましたから、打連れ立って原町の警察署へ参りまして、段々調べになりますと、全く車夫の峯松と杵八という渋川から従って参った処の悪車夫二人にて人を殺し、鞆と荷物を引つ浚つて逃げたに相違ない事が判然いたしました。されども其の者等の行方は未だ知れませんが、全く知らん車夫ゆえ橋本幸三郎は宜い塩梅に身遁れは出来ましたが、是がために二週間ばかりと云うものは頓と出るも引くも出来ませんで、空しく湯治を致して居りました。

幸「あゝ案外つまらん目に遭つた、併し東京に帰るに付いて他に土産もないから」

と前々、思いを掛けました彼の鈴木屋と云う料理茶屋の働き女おりゆうを五十円で身請を致しました。おりゆうのお瀧は何処までも縋つて橋本幸三郎を騙し五十両の金子を取つて窈かに松五郎に持たせて越後へ立たせてしまい、自分はずう／＼しくも請出され、東京へ来て橋本幸三郎の妾となつて橋場に囲われて居りました。直におりゆうの母をたずねると死にましたと云う。是も皆うそであります、幸三郎はおりゆうにすっかり欺されまして、あれは世間へ出るのが嫌いで、至つて温順しい、志も感心なものだ、芝居も見たが

りもせず、美しい着物を着たがらんで信心一三昧で温順しく宅にばかり居る、彼様な感心なものはない、いずれ氣象が知れたら女房に為ようと幸三郎は思つて居りました。

五十

橋本幸三郎が瀧川左京という旗下のお嬢さまと存じて悪党のお瀧を五十円にて身請を致し、橋場の別荘へ囲つて置きました。只今の権妻は極く勉強でございます。先ず旦那のいいのない日には洋学をして見ようとか、或は少しづつ歌でも習おうとか、それとも編物をやつて見ようとか云つて何か遣つて居りますなれども、昔の妾ぐらい怠けたものは有りません。只今なれば起るのが十時でけすな、往時は巳刻と云つた時分に稍く眼を覚して、権「誰か火を持つて来ておくれな」

と是から枕元へ下女が煙草盆へ切炭を埋けて持つて来ますと、腹はらんばい這こになつて長い煙管せるで煙草を喫むことくおおよそ十五六服喫まんければ眼が判はつきり然覚めないと見えます。是から寢衣ねまきの姿なりで、ずうツと起上つて障子を開け、廊下伝いに往つて便所へ這入り、小用こようを達たすのでございましょうが、此のまた便所の永いこと稍や三十分ばかりも這入つて居りま

す、出て来ると楊枝箱ようじばこに真鍮しんちゆうの大きな金盥かなだらひにお湯を汲とつて輪形りんなりの大きな嗽うがい茶碗ちawan、これも錦手にしきでか何かで微温ぬるまの頃合の湯を取り、焼塩が少し入れてあります。下女が持つて参ります。是から楊枝を遣い始めようとすると、ゴーンと云うのが上野の午刻ごのつだから今の十二時で何う云う訳か楊枝が四本あります、一本へ齒磨を附けまして齒の齧もと表を磨き、一本の楊枝で下齒の表を磨き、又一本の楊枝で齒の裏を磨き、小さい楊枝が有りまして、これで齒の間々あいだくを掃除いたします。舌をこきますときは化物が赤児あかんぼでも喰うような顔付を致しまして、すっかり溜飲を吐いてから嗽うがを致しまして、顔を洗い、それから先ず着物を着替るので、其の永い事、それから神仏へ向いまして線香を上げまして一心に拝みは為しませんが、神棚や仏壇に向つてごちやく云いながら拜んで居ります中に、漸く下女が茶を入れて持つて参りますから、これを飲んで居ると、ポーンと未刻やつの鐘が響きますから、

権「お湯に往いこう」

と昔は種々いろくのものを持つて往つたもので、小さい軽石けいせきが有りまして朴木炭ほくのきすみ、糠ぬかぶく袋ろの大きいのが一つ、小さいのが一つ、其の中に昔は鶯うぐいすの糞ふん、また烏からす瓜うりなどを入れ たものでございます。爪の間を掃除致すものを持つて参り、下女に浴衣を抱えさせてお湯

に這入りますのがこと尽く長い。先ずすつかり皆洗い上げて、すうツと湯屋から出て家へ帰つて来ますと、ポーンと鳴る、是がな申刻と云うので、それから

「さアお飯まんまを喰べようねえ」

と是から朝御膳に成るのでございます。お膳の上には種々な物が載つて居ります。自分の嗜すきなものが小さい蓋物ふたものに這入つたり、一寸片口ちよつとに這入つたり小皿に入れたりして有りますが、碌なものはありません、お芋の煮たのや豆の煮たのやなにかを取交とりませて有りませ、総唐草の輪形の茶碗へ銀の股引はを穿いた箸を出して喰べようと致して、

権「あゝー痛いこと……ちよいとその丸薬を取つておくれ」

と丸薬を七粒服のんでお膳に向い、

権「是じやア喰べられやアしないよ、例いつちの処で何か見つくろつて来ておくれ」

と喰いません。仕方がないから誂あつちえに往くと間もなくお椀に塩焼とか照焼が来ます。

権「氣に入らないよ、妾わたしはいやだよ、それより甘いものが嗜すきだから口くちとり取か何かありそうなものだ、見附めつけて来ておくれ」

下女「はい」

と下女が二度目に使いに参り、帰つた時にポーンと西刻むつが鳴ります、朝飯あさはんが夕六時くれむつで

「ございます。是からお化粧に取り掛ります。すっかり鬢たほや何かを櫛で搔上げて置いて、領え白粉を少し濃めに付け、顔白粉を付けてから、濡れた手拭で拭い取ってしまします。誠に無駄な事を致します。唇へ差した余りの紅を耳たぶや眼の間へ差して、髪を搔揚げてしま、着物を着替えたりするとボンと夜の亥刻よつになります。

権「ちよいと其処の三味線を取っておくれよ」

と、柱に倚掛よりかつて碌に弾けやアしません、忌いやな姿になつてポツ／＼端唄はうたの稽古か何かを致して居ります中に、旦那うぢがおいでになります。是からお酒が始まるとボンと子こ刻くのつに成りますから、昼だか夜よるだか頓しと分りません。それに引替えて今の権妻は権威が附いたのか、旦那の為に学問を為しようといつて御勉強ごべんけんでございます。

五十一

さて橋本幸三郎は霊岸島から橋場へ通いますには何か托かこつけなければなりません。今日は斯こゝろう云う権門けんもんだとか、明日はあゝ云う集会よんどころがあつて遅く成りましたら橋場の別荘へ泊りますと、断つては出掛けます。何時も岡村由兵衛が一緒に、或日丁度自分の宅うちの少

し手前に懇意なものがありまして、此家での宴会を済まして表へ出ると、彼れ此れ一時でございます。

幸「由さん遅く成つて気の毒だね」

由「なに遅くなつたつて、斯う云う時に御別荘の有るてえ此の位便利な事はありません、だが矢張川口町へ帰るつもりで頻りに急ぎましたが知れるといけません、好い塩梅によし原の（芸者）おしめ、延しん、おなおなぞが、貴方の此処へ帰る事を知りませんから宜うございますが、知つた日にやア、ヘエーてんで無闇に来ますよ」

幸「お前ばかり知つてるんだから誰にも喋つちやアいけねえよ」

由「なに私は喋りやアしません、実に世間にも権妻は幾許もございますが、何れ芸者上りが多いので、旦那が大金を出して身請を為てサ、増長させて云う芽が出るんですが、それとちがいお宅のお内さんぐらいの温和い方を私は未だ見た事がありません、第一信心者でげす」

幸「ウン余り外へ出るのが嫌いで、芝居は厭だ花見は厭だといつて、宅に居て草双紙を見るのが宜いてえんだ」

由「御自慢なせえく、実に彼の方は品が違いますねえ、私が参つても物数云わず、にっ

こりと笑われると胸がむか／＼して来て、カーと気が遠くなる位のものでげすが、一向にお化粧しまいもなさいませんが、何処あつちともなくお美しゆうございますなア、此の間の黄八丈はすつかりお似合なさいましたぜ」

幸「平素ふだんは木綿で宜いいなんて彼あれは少し變つて居るね」

由「變つてる処ところじゃアありません、彼あんななもの上州四万村あたり辺に居ようとは思いきやで、御運ごんが悪くつて御苦勞ごくろうなすつて、あゝやつて在いらつしやるくらい御苦勞の果はてだからさ、大概の権妻は朝寝あさねが嗜すきで、第一喰物くいもの選えらみをして、あの着物を買かいたいの、此処へ往いつて見たいとか劇場しばいへ往いきたいとか種々いろく云い出して、チン／＼をするくらい無理なのはありませんよ、旦那が奥さんの処へ往いつて寝るのを権妻がチン／＼をするくらい何う考かんえても無理なのはありません、旦那がお茶を習まなえとか活花かっかを稽古し為なろつてえと忌いやアに捻ひねつて仕舞しい、女の癖くせに變なこつポツ／＼毛けの生なえた羽織はねなどを着きていけません、それに洋学やうがくなどを習まなつたりすると變な氣き位くらいばかり高たかくなつて、外国がいこくの話わなんぞを為なしますが、僕ぼくなどには些ちつとも分わりませんで面白おもしろくありませんが、彼あのおりゆうさんなぞは柔和わやうでね、何も彼かも心得こころえて、女おんならしく在いらつしやるのは、ありやアちよつと出来できないて……」

犬「ワン／＼」

由「シツ畜生……」

犬「ワンく」

由「畜生く」

幸「かめく……帰ったよ……トンくく、おさんや帰ったよ、トンくく」

さん「はい」

と小声で返辞をしてふる慄えながらそつ窃と戸を開け、

さん「静かにして下さいましよ、どろぼう盗賊が這入りましたよ」

幸「えゝ……何処から這入った、締りは嚴重にして置いたんだらう」

さん「あれ……そつち貴方其方へ往つちやアいけませんよ」

と云われて慌てゝ由兵衛は柱へ頭をコツリ。

由「あ痛い何うも……わたくし私は直ぐに帰りましょう……」

さん「あれ、お庭の方へ出ちやいけませんよ、盗賊はお庭から這入ったんですよ」

と云われてまごくしてあつち彼方へぶつ打つかり、こつち此方へ突当つて滑つたり、たらい盥の中へ足つっこを突込

んで尻もちをつくやら大騒ぎで、

幸「静かにく」

由「し静か処じやアありません、あ痛い何うも……痛くつて口がきけませんくらいで」

五十二

幸「おいく……お駒こまやおりゆうは何うした」

さん「何うなさいましたか知りませんが、何でも庭から這入りました様子でございます、判然はつきりとは分りませんが、是は美いい妾めかけだ、姦なぐさんで殺して仕舞え、お金を奪とつて往いこうと云う声が聞えたように思います、キヤーと云う声がありましたから、何でもお駒どんは斬られやア為しないかと存じます」

幸「ム、ー、おい：マアこれ沈着おちつかないかよ、静かにしなくつちやアいけねえじやアねえか」

由「静かにしろつて、わ私わたくしは、さ騒さわぎたくつても口がきかれませんが、是れでは」

とワナくふる、慄おそえて居るを見て、

幸「氣しつかを確しつかり持ちなよ」

さん「確しつかりも何もありませんから私を逃して下さいまし」

幸「これく其方へ出ちやアならん」

と幸三郎は沈着いた人ゆえ悠々と玄関の処へ来ますとステツキがあります。これを提げ、片手に紙燭を点したのを持つて、

幸「何処の所だ、何にしてもお駒が案じられるし、おりゆうに怪我は無かつたか、賊は逃去つて仕舞つたか」

下女「何うでございますか私は只台所のお竈の下へ首を突込んで居りましたから、確かりとは分りませんでした、多分お怪我をなさいましたろう」

幸「え、怪我をするのに多分などを附ける奴があるものか……おい由さん一緒に往つておくれよ」

由「へえ……一緒にツたつて私は逃げられませんよ……あゝ宜しい、心得ましたが然う引張つたつていけませんでえに……あ痛い……足へ手桶が引掛つて居ます……あ痛い……是は何うも大変な処へ帰つて来ましたなア、私を引張つて往つたつて何の役にも立ちませんよ」

幸「チョツ静かにしねえか」

由「あ痛い……何うも是は痛い、暗いもんだからお茶棚の角へ頭を打付けました、木齋

に此の角を円くさせて置いて下さいな」

幸「お前後生だから外へ出て一寸派出所へ届けるか、其処らに巡査さんが歩いて居たら御出張を願つて来てくれねえか」

由「へえ……私は巡査は極いけねえんで、へえ何うも私は巡査さんを見ると何となく怖いので」

幸「お前は盗賊じゃあるめえし」

由「ないが何処ともなく巡査さんは凛々しくつて怖味がありますから、私が届けちやいけますまい、何卒是は一つお女中に願ひましょう」

幸「チヨツ……意気地がねえなア」

と云いながら倉前へ来て見ますと、緋の縮緬の扱ぎが一本、傍に浴衣が有りまして、ポタリ／＼と血が垂れて居ますを見て由兵衛は慄え上り、

由「あゝ、血が、夕垂れて居ます、南無阿弥陀仏／＼血と聞いたらまた腰が脱ツちまいました」

幸「えゝ、此方へ来な」

と漸々庭伝いに来て見ますと、庭に櫛だの簷が落ちてあつて、向うを見ると棧橋の

木戸が開いて居ます。

幸「ム、……此処が開いて居るからにやア此処からでも這入ったか知ら」

と呟きながら棧橋へ出て見ますと血が垂れて、其処におりゆうの寢衣浴衣と扱きが落ちてあつたのを取上げ透し見て、

幸「ム、是はおりゆうの寢衣と帯だが……おい由さん、何を為して居るんだ、私は此処に居るよ」

由「へえ……私はとても其処までは参られませんかよ、へえ」

幸「チョツ……困るなア」

と云つたが浮かり倉の方へ這入り、盗賊に長い刀を提げて出られちやア堪りませんし、由兵衛はぶる／＼して役に立ちませんから、幸三郎が自身に駈出して参ると、丁度巡行の查公に出会いました。

五十三

幸「只今私宅へ強盗が押入りました、家中に血が垂れて居りますから、直に御出

張を願います」

巡「ウン承知致した」

と云つたが、一人では万一賊の方が多勢ではいけませんから派出所へ立帰り、呼子にて同僚を集め、四人ばかりにて其の場へ駈付け、裏口台所口棧橋の出口へ一人ずつ立番をして居り、一人人が表口からズーツと這入り、段々取調べると、

幸「今年十六才になりますお駒と云う少女が見えませんが、尤も同人の寝衣、扱き等が倉前に落ちて居りますから、賊が倉の中に隠れて居りまするかも知れません」

と申しますので、是から段々取調べました処何処にも居りませんが、大した品物を盗んで参りました。

巡「大方妾のおりゆうとお駒と申す少女を辱かしたる上に斬殺し、死骸は河の中へ投り込んで、舟で逃げたものだろう」

と取調べ、探偵は入替りく四五名来り、名刺を置いて帰りました。是から先ず其の筋へ訴えなければなりませんから大した騒ぎでございます。斯うなつては幸三郎も母に明さん訳には参りませんから、母にも明し、是から番頭を呼んで来まして、隈なく取調べた上、訴書を認めさせました。

とうなんおんとゞけ
盗難御届

京橋靈岸島川口町四十八番地

橋本幸三郎

明治八年九月四日午前一時頃我等別荘浅草区橋場町一丁目十三番地留守居の者共それ夫

々、取締致し打伏し居り候処河岸船付棧橋より強盜忍び入り候そろものと相見え裏口より雨

戸を押開け面めんてい体を匿かくし抜刀を携え二人にんとも奥の方へ押入り召使りゆう雇女駒と申す者

を切せつが害致し右死体は河中へ投込候ものと相見え今以て行方相知れ不申候又土蔵へ忍

入りしや私所持わたくしの衣類金銀とも悉く盗取り逃去り候跡へ我等参まいる合あせきよと申す下婢かひ

に相尋ね候処驚怖の余り己おのれの部屋に匿れ潜み居候おりえば賊の申候言葉並ならびに孰なへ逃去候哉やし慥しか

と不相分あいわからず由申出候然るに一応家内取調申候庭てい前所々に鮮血の点滴これあり有之殊ことごと

駒ひぎぬちぢみの緋絹縮下したじめおび帯りゆうの単物ひとえもの血に染み居候まゝ打棄有之候間此段御訴申上候

右盗取られ候金高品数左之通りに御座候

一金二千元 内訳金千円十円札、金千円五円札○一金三百円内訳金百円二円札、金二百

円一円札○一金側時計一個たゞし但金鎖附此代金二百円○一同一個但銀鎖附此代金百円○一掛

時計二個此代金五十円○一衣類二十七品此代金五百円○一玉置物一個此代金二百円○一

古銅花瓶一個此代金百五十円、合計金高三千五百円也

さて右の書面を以て其の筋へ訴えましたゆえ、探偵の方が段々調べました処、後に致つてお駒の死骸が中洲なかすに掛つて居て是が揚りました。尚嚴重に調べに成りましたが、何うしても盜賊の行方が分りません。此の後明治十一年七月十日、千葉県下しもふきのくに下総国野田宿なる太田屋おおたやという宿屋へ泊り合せて、凶らずも橋本幸三郎が奥木佐十郎と云う前申上げました足利江川村の機織屋はたやが、孫の布卷吉を連れて亀甲万きっこうまんという醤油問屋へ参るに出会い、敵かたきの手掛りを得ると云うお話でございます。

五十四

明治十一年七月十日野田に祇園会ぎおんえと云う事がございしますが、豪商の居ます処ゆえ御祭礼は中々立派に出来ず。両側へずーつと地口行灯じぐちあんどうを掲げ、絹張に致して、良い画工えかきに種々ま／＼の絵を描かせ、上には花傘を附けまして両側へ数十本立列たちつらね、造り花や飾物が出来ず。水菓子屋或は飴菓子団子氷水を商う店しよくが所々に出まして、中々賑やかな事でございす。近郷のものが皆参詣に出ます。鎮守は愛宕あたごでございす。彼地あちらへ往らつしたお

方は御案内でいらつしやいますが、社殿は槻けやきの総彫そうぼりで、花鳥雲竜からちょううんりようが彫つて極名作ごくめいさくでございませう。是は先代の茂木佐平治もぎさへいじし氏が建立致したのでございませう。境内には松杉銀杏いちしようの大樹おほいが繁茂して余程広うございませう（寶曆ほうれきの年号が彫つてあります）牝狗あまいぬ牡狗こまいぬの小さいのが左右にあり、碑が立つて居て、之に慥たしか鐵翁てつおうの句がございまして、句「三光さんこうの他は桜の花あかり」句「声かぎり啼け杜ほとゝぎす 鶺鴒せいら神の森」これは先代茂木佐平治の句で、他に眞顔まがおの碑が建つて居ります「あらそはぬ風の柳の糸にこそ堪忍袋縫ふべかりけれ」という狂歌が彫つてあります。大門だいもんを出ると、角に尾張屋おわりやと云う三階の料理茶屋があります。日の暮から村の若い衆しゅや女中がぞめき半分で見物に出掛けますが、妙な扮装なりで若い衆は頬冠ほのかぶりを致しますが、全体頬冠ほのかぶりは顔を隠そう為に深く致しますが、彼地あちらの若い衆は顔を出して皆後方うしろへ冠かぶります、成たけ顔を見せるように致しますから、鬚あちらの先と月代さかやきとが出て居ります。手織いとおりぢりみの糸織いとおりぢりみ縮ちぢを広袖ひろそでにして紫縮むらさきちりめ縮ちぢ呉羅ごらの袖口そでぐちが附ついて居ります、男子おとこの着物には可笑おかしいようで、ずいと前を広げても白縮しろちぢ縮ちぢか緋縮ひちぢ縮ちぢの禪ぜんをしめるのではありません、矢張やじやう晒木綿さらしめんの禪ぜんで、表附うらつきののめりの下駄げたを履はいて団扇あちらを持つて出ますが、女も其の通り華美はでな扮装なりを為して出ます。矢張女も手拭あちらを冠かぶつて居ります。彼地あちらでは女が、誠に濟たすみませんが手拭あちらも冠かぶりませんで御挨拶ごあいさつを致します、と云う処を見れば手拭あちらを冠かぶるの

が礼になつて居る事と見えます。実に非常の群集で、其処にツクノリと云う事があります、
 何う云う事かと聞きましたら、是は墓目ひきめの法だと云う。宵よいから夜中に掛けてツクを乗りま
 すが、是は不思議なもので、代々近村の重次郎じゅうじろうと云う人がツク乗りを致します、其の扮
 装りが誠に可笑しゆうございます。白木綿の着物を着て、茜木綿あかねもめんのたっつけはを穿はき、蝦蟇がま
 の形をいたして居るものを頭に冠り、裳すその処に萌黄木綿もえぎもめんのきれが附いて居ますから、角兵
 衛獅子えいしがたち形で、此の者を、町内の寄合場所へ村の世話人が附いて招待しょうだい致し、屏風を立廻
 し馳走を致して居ます。年番ねんぱんに当つた家うちの前にツクと云うものを建てますが、丸太で長
 さ十二間もありまして白布で巻き、上に醬油樽が白木綿で包んで乗せてあります。それを
 綱で張つてありますが、若し乗損のりそくなつて落ちて死んだ時には、ツクの下へ其の死骸を埋うめ
 るのが彼の祭かの法だと云いますが、危険けんのんな業わざであります。なれども慣れて上手なもので
 ございます。下に囃子はやしを為して居ます。弥々いよよ重次郎さんが来る時には早めて囃子はやしを致しま
 す。笛が二管、メ太鼓が二挺ある切りで囃子はやしが極つて居ます、テレツク／＼スツテンテン、
 テレツク／＼スツテンテンと叩きます。重次郎さんを送つて参ります時の囃子はやしが可笑しゆ
 うございます、唄のような節を付けて「ツークの重次郎どんがツークへ登つてヤレエーヘ
 ンヨ、テレツク／＼スツテンテン」他に何も文句は云いません。処の風と云うものは妙な

もので、充溢いっぱいの人立ちでございます。太田屋という旅宿やせやがございまして、其の家に泊つて居りますのは橋本幸三郎に岡村由兵衛でございませう。

五十五

幸「おい何うだえ此処の祭てえのは」

由「何うも驚きやした、是は何うも実に驚きました、是程の騒ぎじやアないと思ひましたが、狭い処にしちやア珍らしゆうございませうね」

幸「僅か離れた所でも大層風俗の変つたものだね」

由「変つたつて何だつて何うも大変り、女が皆みな粉この吹いたように白粉おしろいを付けて、黒い足へ紺こんてん天の亜米利加の怪しい鼻緒なまじのすがつたのを突掛つツけて何処から出て来るんだか宜いいね、唐縮緬とうちりめんの蹴出けだしをしめて、何うしても緋縮緬ひしりめんと見えない、土器色かわらけいろになつた、お祖母ばあさんの時代に買ったのを取出してチョコくしめるんでしよう、実に面白おもしろうげす……此の家の餡あんころ餅もちが旨うまいいから私わたしは七つ食しちくべましたら少し溜りゆう飲いんに障こたえました」

幸「手塚屋は古河の在手塚村の者が出て売始め、今では上等の菓子屋に成つたてえが、今

お前に御馳走だと云うのは、亀甲万の醤油蔵は何うだえ」

由「何うも大きなもんですねえ、一年に何の位造るんでしよう」

幸「大して造るてえ事だ、何でも一ヶ年に並亀甲万が七万樽以上に、上等のが七万樽で、両方で合計十四五万樽も出るてえことだなア」

由「へえ沢山の桶が並んで居ましたが、醤油蔵が二十三間あつて此方が十八間あるてえましたね」

幸「桶の高さが七尺五寸から八尺ぐらいで、彼の中へ落ちて死んだものがあるて云うが、あの石を附けて絞る様子などは大したものだね」

由「へえ何うも実に驚きました」

幸「並の醤油を造る大桶の数が百四十五もあるて云うが、近い処だけでも大きいものだね」

由「大きいたつて私は実に驚きました、醤油を三十石ぐらい造るんで、蔵の中に居る人数が四五十人ぐらいも有つて、事が大きいたつて、あの竈の釜は何うでげす、矢張彼れは釜屋堀の七右衛門（今の釜浅鑄造所）が拵えたんでげしようが、七右衛門と六右衛門が釜を売つて、たつた一右衛門違いで五右衛門は其の釜で燂られたてえのは妙でげ

すな」

幸「詰らねえ事を云うな」

由「亀甲万の旦那に彼は旦那の御紋ですかと聞いたら、なに然うじやアない、是には種々訳のある事だ、南新堀に萬屋忠藏と云う仲買があつて鱗の紋だから、それを

二つ合せて萬屋の萬の字を附けたのが始りだと申しますが、不粋な紋もありますが、僕は太輪にして中を小さく為しても抱茗荷はいけません、彼を細輪にして中を大きく出すと商人らしく成ります、形が悪うございますね、抱茗荷を太輪にすると馬の腹掛のよう

いけませんな、ハハハハ」

幸「静かにしねえか」

由「はい、大きな声で喋りましたが、何うでげす、彼のツークの重次郎どんテレツクく、スツテンテンてえのは」

幸「止しなよ」

と話をして居ります。其の隣座敷に居りましたのは前申上げました奥木佐十郎という年齢は六十六に成り、忬も嫁も死んだので扱なく機織女を抱え、僅かの事で其の日を送つて居りますが、一体達者な爺さんだから、今年十三に成ります孫の布卷吉と云うものを亀

甲万へ奉公にやつて置き、孫に会いに参つたのでございます。

佐「これは詰らん物だけれども、宜い物を上げたつて何も彼も御不自由のないお宅だから、是だけお祖父さんが持つて来たから、旦那様へ上げておくれよ、お前何でも能く辛抱して、然うして、宜いか、何も私がお前に過して貰おうてえのじゃアねえが、奥木の家を相続するのはお前より他にはねえから、奉公は辛い、辛いものだけれども詰りお前の為だ、取分け朋輩衆も多かろうから、番頭さん始め若い衆から朋輩衆の機嫌を取損わねえようにして、怠りなく旦那さまを大切に為なければならねえよ」

布「お祖父さん、私は奉公が厭になりましたから、今日直に足利へ連れて帰つて下さいな、誠に御無理な事を云うようでございますけれども、今日お前さんのおいでなすつたのは幸いでございますから、何卒お暇を戴いて帰り、私はお祖父さんの傍に居とうございます」

佐「お前は私の顔を見ると其様な事ばかり云う、それだから私は滅多に顔出しをしないのだ……それは辛らいさ、辛いけれども何様な人だつて奉公を為て、他人の中を見て其の苦しみをして来たものでなければ役には立ちません、お祖父さんの傍に置いて、何でもはいくとお前の云うなり次第に気儘にすれば馬鹿に成つちまいますから、辛かろうが他人の中で辛抱して、何様な事でも生涯の立つ事を覚えなければ成りません、殊に結構なお店で、

旦那さまもお慈悲なごけぶか深いし、文明開化の事も能く御存じのお方ゆえ、何でもすがって居なければならぬえのに、苟かりそめにも帰りたいなどと云つては成りません、何だつて其様なことを云う」

五十六

布「お祖父さん、あんたは老とるお年でございますから、お父とつさんお母つかさんも死んでから、お祖父さんのお蔭で私は斯こん様に大きくなりましたが、幾らお達者だつて、最う六十の上六つも越して入らつしやるから、翌あすが日病みお煩わづいに成つても、お薬一服煎じて貴方のに服のませるものはありませんと思えば、熱あつかつたり寒ひやかつたりする度たびに気きになりました、お前さんの事を朝晩忘れた事はありません…復また奉公に参りますまでも一旦は帰りとうございますから何卒どうぞお暇を戴おんいて下さいまし」

佐「お前そんな事を云つては困まづつたなア…お祖父さんは無いものと思え、お祖父さんの事などを思つて奉公が出来るものか、お祖父さんも以前まえは大小を差して、戸田家にて仮令たとえ少禄せうろくでも御扶持ごふぢを戴おんいたものだ、其の孫だからお前も武さむらい士の血統ちすじを引ひいて居ゐるではない

か、忠孝まつた全ぜんからずと云うて、奉公ほうこうをする身は仮令かじやう両親りやうしんがあつても主人しゆじんに事つかえる中うちは親おやの事を忘れなければならんものじや、それが忠義ちゆうぎと云うもの、お祖父おぢいさんの顔かほを見ると其その様さまな事を云う、これから其その様な事を云うとお祖父おぢいさんは最さいう決けつして構かまいませんよ、私わしも何なにうかしてお前の多足たそくに成なるようにと思おもつて、年寄骨としよりほねに機はたの仕分しぶんを為しているのに、其その様な弱よわい音を吐はくと肯きかんぞ、お祖父おぢいさんは再び此こゝ処ところへ来きんぞ」

布ぬい「はい……お祖父おぢいさん昨夜ゆうべお祭礼まつりで講釈師こうしゃくしの桃林とうりんの弟子とでしの桃柳とうりゆうと云うのが来きました、始めて此こゝ処ところへ来きたもんだから座敷ざしきを為してやろうと旦那だんなさまがお口くちをお利りきなすつたもんですから、聴衆ききうでうが多勢おほぜい出来いましたので、お店みせの方も皆みなな寄よつて講釈こうしゃくを聞ききました」

佐さ「ウンそれは有難ありがたい事ことで、足利あしきの江川村えがわむらなどに居いちやア講釈こうしゃくでも義太夫ぎたうでも芝居しばいでも見み聞きをする事は出来いやアしない」

布ぬい「その桃柳とうりゆうてえ講釈師こうしゃくしが金比羅御利生記こんぴらごりしやうきの読よ続つづきで、田宮坊太郎たみやぼうたろう」が子供こどもながら親おやの仇あだを討うちました所の講釈こうしゃくでございしましたが、彼あれを聞ききましてお祖父おぢいさん私わしは親おやの仇あだが討うちたく成なりました」

佐さ「え、なに親おやの仇あだが」

布ぬい「へえ私わたくしも茂之助むすけの倅こであります、母ははと妹いもは村上松五郎むらかみまつごろうとお瀧たきの為ために彼あんな様な非業ひがふの死し」

様を致しましたのは、親父が間違えて母親を殺したんでございますが、実に驚きまして途方に暮れ、彼の様に親父は首を縊つて死にますような事になりましたのも、皆なお祖父さん村上松五郎お瀧から起つた事でございます、私も子供心に二人の顔を覚えて居ますから、彼奴等二人を殺さんでは私が親に対して済みませんから、何卒お暇を戴いて下さいまし」

佐「あゝ……、然うか、手前年も往かねえで能く親の仇を討とうてえ心になつてくれた、おくのや茂之助が草葉の蔭で此の事を聞いたら嘸悦ぶであらう……じゃが今の世の中では仇討と云うことは出来ないが、彼奴等は天罰でいまにお上の手に懸つて、その悪を為ただけの処分は屹度受けようから諦めてくれ、よ、其様な事を云つてくれると私が困るから」

布「いえ、お祖父さん何卒お暇を戴いて下さい、私は最う一日も居られません、若しお祖父さんが私を置いて往けば、明日にも彼家を駈出します」

佐「どうでも手前討つと決心したか、併し人を殺せば手前の身にもそれ丈の処分が附くぞ」

布「いえ私は死んでも宜しゆうございます、彼奴等二人を仮令私が手をおろして討ちませんでも、捕えてお上の手を借りましても思う存分に為しませんでは腹が癒えませんか」

佐「ウム…宜し、お暇を願つて遣らう……あゝ能く仇を討つと云つた」

としめやかに話を為して居るを隣座敷で聞きまして、岡村由兵衛が、

由「旦那えく」

幸「何だ」

由「仇を討つてえませんが何でしょう」

幸「講釈だろう」

由「ナア二小さい子が仇を討つてえと、何だか傍に居る老爺さんが能く討つと云つたてえ
ましたぜ」

幸「ム、もう討つたのか」

由「なに討つたとか討つとか云つてますが、此処でチョンく始まっては大変で」

幸「まさか始まりやアしめえ」

由「何でげしょう」

と岡村由兵衛が怖々廊下へ立出で、そつと障子の破れから覗くと、六十有余歳の老人と
十二三に成る小僧と二人にてのひそく話、幸三郎も覗き見て、

幸「はて変だな」

と怪しみました。さて是から奥木佐十郎が茂木佐平次方へ参つて、布卷吉の暇を貰つて、

川蒸気に乗りました足利へ帰るのでございますが、此の汽船へ再び橋本幸三郎が乗合せるのも妙な訳で、上州の川かわまた俣村と云う処で筏乗の市四郎に会いますと云う、是れから敵かたきの手掛りが分ります。

五十七

野田の祇園祭でございました、亀甲万の家へ奉公を致して居りまする布卷吉と云うは、今年十二歳ではありますが、至つて温和おとなしい実体じつていものでございます。祖父そふ奥木佐十郎が顔を出しに参りましたのを見ると、親の敵かたきが討ちたいからお暇ひまを戴いてくれと云うので、祖父じいが亀甲万の主人に面会致し、只管ひたすら暇をくれるようにと頼み、幾ら止めても肯ききません。亀甲万の御主人も親切なお方でございますから、懇々こんく説諭を致しました。主人「当今は復讐などは決して無い事じやから、そんな事は思い止とまつたら宜かろう、それより相変らず当家に奉公して居れば私も彼の温和おとなしい事も看抜みぬいて居るから、後々には私も力になつてやろう、年を老とつたお祖父じいさんが先に立つて仇討などという事を勧めちゃアいかん、それは時節が違ちがうから、まア私の云う事を肯きいて思い止とまんなさい」

と種々に意見を加えましたが、一方が頑固な老爺さんで肯きませんから、そんならば暇をやろうと万事行届いた茂木佐平治さんだから多分の手当を致してくれ、今上川岸の舩田と申す出船宿から乗船切符まで買うて与えました。是から出船宿へ参るには、太田屋と申します宿屋の向横町を真直に這入りますと、突当りに香取神社の鳥居がありまして、傍に青面金剛と彫付けた巨きな石塚が建つて居ります。鳥居から右へ曲ると高梨の家で、左右森のように成つて居り、二行の敷石がございまして、是からずいと突当ると小高い堤が有ります。其処を上つてだらくと下ると川岸でございまして。此処に出船茶屋があります。升田仁右衛門と申しては彼の辺きつての好い出船宿でございまして。船へ乗りますお客は皆早く此家へ参りまして待受けて居ります。切符を買つたり弁当拵えの支度をするとか、或は菓子を買つて入れるなど多勢がごた／＼して居ります中に、前申上げました橋本幸三郎、岡村由兵衛の二人が野田から参りまして、先刻から出船を待つて居ります。

由「旦那、只何うも私が今日驚きましたのは、彼のツク乗りで、何うも倒さまに紐へ吊下つて重次郎さんが下つて参ります処には驚きました」
幸「彼はまあ珍らしいなア」

由「珍らしいなんて実に見る事は出来ませんよ、灯台下暗しで、東京の近処で彼様な變つたお祭の有る事を是まで些とも知らずに居りましたが、実に何うも不思議、へへ、彼のテレツクく、なんぞは悉皆覚えました、重次郎さんの扮装てえのは恰で角兵衛獅子でございますね、白の着物に赤い袴で萌黄色のきれの附いている物を頭部に冠つて、あれで獅子が附いてれば角兵衛獅子だが、彼は蛙だから重次郎蛙です、只々重次郎さんの出て来る処が不思議ですが、彼様な事は開化の今日日は種切れに成りそうなもんだが、代々重次郎さんてえものが出るのが訝しいね、彼で乗り損つて死んじまうと、ツクの下へ死骸を埋るのが法だと云いますが妙でげすねえ」

幸「おい、汽笛が聞えるようだぜ、汽船が来たんじやアないか」

由「然うでげすな……おツ旦那月が登つて来ました、好うがすなア、月の光で川の様子を見ながら参りますと退屈凌ぎになりますよ……あ来ましたく、お前さん此の鞆を持って、下さい」

下女「笛が聞えたつて彼でまアだ半道程も先だアから、緩くり支度をしておいでなせえましよ」

由「でも、ピーーくと川へ響けて大層聞えますね……何だか私ア気が急ぎますから、且

那徐々支度をなさいな：大きに姉さんお世話さま、お茶代は此処へ置きましたよ」

下女「これは有難うございます、まア御緩くりおいでなせえましよ、滅多に汽船は来ませんから」

由「来なくつても先へ出て居た方が宜しい、へ、へ、へ、呑気でございますね」

幸「田舎は是だけが宜いのう」

五十八

由「姉さん棧橋が何処にかありませんかい」

下女「はい、今度出来るてえ事ですが、まだ無えだから、堤の草へ掴まって下りるだアね」

由「草へ掴まって：危えなア、早く棧橋を拵えたら宜さそうなものだ……：迂りやアしないかい」

下女「大丈夫でござえますよ、慣れてるものは船へ飛込むだが、岸の方は水が来ねえから泥が深くなつてますよ」

由「深い……困つたねえ、ずぶりと這入つちやア大變でげすから、船が来たら板か何か向

へ渡して貰いましょう」

下女「慣れた人は皆跨いで船へ打飛んで這入りますよ」

由「此方は慣れねえから打飛べねえよ」

と云つて居る中にシヤ／＼／＼／＼と汽船が忽ちに走つて参りました。其の頃には通

運丸と永島丸とありまして、永島の方は競争して大勉強でございます。

幸「さア／＼お前先生へ這入んなよ」

由「宜うございますから、荷物は後からとして……上等の方は何方だえ、なに此方だ、大

変だなア……これは危い、ちよいと貴方此の鞆を持って、頂戴……両手でなければ辿もい

けません、ズブ／＼と這入つちやア大變でげすからナ……へえ御免なさい／＼……これはノ

／＼何うも旦那御覧じろ、恰で鮪を転がしたように皆なゴロ／＼寝ていますが、上等の方で

さえ是れでげすもの、下等の方はゴタゴタして大變なもんですぜ……此の通り実はすいて

居るのだが皆な寝ているので幅を取つちまいますが、仕方もありません、併しね旦那、此

処に包や何か整然と掛ける処が出来てるのは流石に手当が届いて居ますね……蝙蝠傘など

を窃取されるといかねえから此処へ斯う纏めて置いて……貴方最う少し其方へお寄んな

さいな、此処を広くしていきましょう……貴方寝蓋けて居ますか、アハ／＼、野田に遊んで

たので何んだか百姓ばかり乗つてゐるような心持が致しますね……おいボーイさん、火を持つて来ておくれな……なにマチが這入つて居ると、マチはあつても宜いから火を一つ持つてお出な……淋しくつていけねえから……なに夜は火はない、虚言ばかり吐いて居る、面倒だもんだから彼様な事を云つてゐる」

とマチで火を擦付け、煙草に移し一口吸い、

由「フー……これで何んでげすね、今夜一晚船の中では何うで寝られませんか、東京からスイと来て上州の川俣村まで往くにやア随分退屈は退屈でげすな……おツ是は大変に蚊が居ますね、傍からく、這入つて来ます事、是は恐入りましたなア……永島さん早く船を出す訳には参りませんか」

水夫「荷が悉皆這入らねえじやア出しません」

由「荷てえば大層転つてますね」

と見ますると、傍に居ましたのは年の頃二十七八にも成りましようか、大丸髷の婦人で、色の黒い処へベルモットでも飲んだような顔付で、鼻が忌アに段鼻になつて、眼の小さな口の大きい方で、服装は木綿縮の浅黄地に能模様丸紋手の単物に唐繻子の帯をあさぎがこメ《し》め、丸髷には浅黄鹿の子の手柄を掛けて居ます、朱縮緬の帯止をこてく、巻付け

て、仕入物の蒔絵まさえの櫛めつきあしに鍍金足めつきあしに土佐玉かんざしの簪かんざしで、何処どこともなく厭味えんみの女おんなが、慣れなれくく、

女「貴方あなた此方こちらへ入いらつしやいまし、御緩ごゆるりお坐まりなさい」

由「へえ有難ありがたうございます、誠まことにお邪魔まじまじさまで」

女「お婆おばあさん其そのの包かみみを脊負しよつておいでよ…貴方あなた方は東京とうけいでいらつしやいますか」

由「え、東京とうけいで」

女「東京とうけいのお方あなたと聞きくとお懐なつかかしゆうございますこと」

由「貴方あなたも東京とうけいでございますか」

女「はい私わたくしは足利あしかの方かたの親類おつと共に厄介やくがいに成なつて居ゐりまして、時々博覧会はくらんかいや何か有ありますと東京とうけいへ参まゐりますが、上野うえのはまた別べつでございますね」

由「へえ左様さやうです」

女「今度こんどの博覧会はくらんかいは立派りつぱな事ことでございますね」

由「え、盛大せうたいな事ことでございます」

女「大おほして人ひとが出来ますね」

由「え、出品物しゅてんぶつも余程あま多い事ことでございます」

五十九

女「私もそれから彼方あつちこつち此方と見物も致しましたが、私は此の様に肥ふとつてますもんですから、股すくが縮むようでは何だかがっかり致しますので、それから何でございますね、弁天から上野の辺が誠に綺麗に成りましたこと、それに松源まつげん鳥八十とりやそなどと云う料理茶屋も立派に普請が出来ましたね」

由「えゝ大層……立派に普請が出来ました」

女「それに花火の仕掛ものなどは昔とは全然すつかり違つてしまいました」

由「えゝ大した勉強な事で」

女「是までの東京とうけいの玉屋鍵屋などで拵える仕掛とは違ひまして、ポツポと赤い火や青い火が燃えまして誠に不思議で、あの水の中をチュ〜と走つて歩くのは彼あれア何てえのでございましょう」

由「へえ何てえますか私は知りません」

女「貴方は新富町しんとみちようへいらつしやいましたか」

由「え、参りました」

女「大層巧く演じますね、今度の狂言は中々大入で、私が参りましたら一杯で、尤も土曜日までございましたが、ぎつしりでございましたよ」

由「へえ、土曜日曜は大入で」

女「團十郎は何うも巧いもんでございますね、渋い事をさせては彼の位の役者はございませぬ、他の役者とは違いますね、むずかしい事を致しますが、実に巧いもんで」

由「え、堀越は別でございます」

女「それに菊五郎は上手なことで、左團次さんも巧いものですが、菊五郎と左團次と一対揃って巧いものでございますね」

由「へえ彼は中々巧いもので」

女「小團次は大層役者を上げましたね、それに私は福助の人気の有るには本当に驚きましたよ、往來を福助が通ると私共のような者まで駆出して見る気になりますのは別で、また娘なぞに成ると実に綺麗でございますね」

由「え、誠に綺麗で……（小さな声で）これは延べつだ」

女「大層綺麗で人気の有ることは別でございますから、何うかして身体を快くして遣りと

う存じまして、私も心配致して居りますが、何う云うものでございましょう、癒なほりましようかね」

由「へえ癒なほるかも知れませんが、松本先生などがお骨折ですから癒なほりましょう」

女「それに家橋かきつが大層たいじやう渋しぶく成なりましたのに、松助まつすけが大層たいじやう上手じやうずに成なりましたことね、それに榮えい之の助すけに源げん之の助すけが綺麗きれいでございますね」

由「え、彼は誠まことに綺麗きれいな事で……これは堪たらん、旦那だんな少し代かつて下くださいまし、私わたくしは小便せうべんに往ゆきますから」

女「お手水てんずいは其方そちらじゃアいけません此方こちらでございますよ」

由「へえ種々いろいろ御親切ごしんせつに有難ありがたう存ぞんじます」

と由兵衛ゆへいゑいはこそく逃出にげだしました跡あとで、彼の女かのめは橋本幸三郎はしもとゆきざうに向むかひまして、

女「貴方あなたも東京とうきやうのお方で」

幸「へえ」

女「彼あの方かたと何方どこちらへいらつしやいますの」

幸「私わたくしは足利あしたしまで参まゐりますので」

女「おやまアお嬉しいこと私も足利あしたしへ参まゐりますの、私は足利町五丁目あしたしちやうごの親類しんるい共に居ゐります

る吉田屋よしだやのふみと云うもので、何うか些ちつとお訪ね下さいまし」

幸「左様でございますか」

女「貴方は足利は何方でございます」

幸「へ、極く外れの野暮な処へ参りますが、何れいずまたお訪ね申しませう」

女「何卒どうぞ入らして下さいませよ」

幸「有難うございます」

女「私は五丁目に居りますので、右側の何でございますよ、貴方は」

幸「へい栄町の変な処とこを這入って桐生の方へ参る道でございますよ」

女「へえ左様でございますか」

幸「由さん早く来ておくれよ」

由「まだ話が途切れませんか、是は驚きましたな」

と云つて居るおうち中に船が出ました。また寶珠ほうしゆばな鼻へ着くと乗込むものも有り、是から関せきや

宿どへ着きますと荷物ものぶが這入るので余程手間てまがかゝり、堺へ参りますと此処こゝにて乗替え、

栗橋くりはしへ参り、旭ひが昇つて川に映り、よい景色けしきでございます。栗橋から上州の川俣がわまという

処へ船が着きますと、かれこれ十時、宜いい塩梅しんばいに天気もよく皆々客は上りましたから一同

大きに安心致しました。是から幸三郎由兵衛も上ることに成りますと、いゝ塩梅に彼の段鼻の大年増も居なく成つたから、二人はホツト息を吐きました。

六十

由「旦那何うでございました」

幸「何うも本当に驚いちまつた」

由「吉川屋よしかわやてえ料理屋は此処でげす、昨夜彼の女ゆうべあにのべつに喋しやられたので私ア胸が一杯に成りました……さア這入りましょう」

下女「此方こつちへお掛けなさいまし……此方へお上りなさいまし」

由「何処か斯う景色の好い、見晴しの有る、風通かざとおしの好い、しんとした、乙に賑やかな処とこがありませんか」

幸「そんなむずかしい処とこがあるものかアね」

女「此方こちらへ入らつしやいまし」

由「昨夜は些ゆうべちつとも寝られませんでしたから、此処で昼寝をして顔を洗つてから、何か誂あつらい

物を致しましょう……姉さん何が出来るか

女「鯉こくに玉子焼鱒でがんです」

由「結構、じゃアその鯉こくに玉子焼でお酒の好いのを、と云った処が別に好いのもあるまいが、成たけ気を付けておくれ、兎に角顔を洗つて参りましょう」

女「お顔をお洗いなさるなら此方へ入らつしやいまし」

と下婢の案内に従つて顔を洗つて参り、

幸「浴衣が湿ついたので」

と着物を着換え、酒も飲み、御飯も喫べてから昼寝をしようかと思ひますと、折悪

うドードツと車軸を流すばかりの強雨と成りましたから立つ事が出来ません、其の中に

彼の辺は筑波は近し、赤城山へも左のみ遠くありませんから、ガラ／＼と雷が烈し

く鳴つて参り、二三ヶ所へ落雷致しましたので立つ事も出来ず、ぐず／＼して居ます中に、

午後の四時半時分に成ると、フーと雲が切れましたから幸三郎も由兵衛もホツと息を吐き

ました。

幸「是から立つてえのも遅いから今夜は此処へ泊ろうじゃアねえか」

と皆泊りも多うございますから宿屋でも気を利かして湯を立ててくれました。

由「旦那私は雷にやア驚きましたがお湯へ入れただけは当処も中々気が利いてますね」
 幸「ウン此処の家は宜く手当が行届くねえ」

由「大届きでげすとも、併し私は雷は大嫌いだね、甚く怖うございました、尤も雷が怖いてえ顔付でもありませんが、今の雷と昨夜の段鼻の大年増には実に驚きました、貴方の様子の好い処からちよいと横目でキョトク見たりして、本当に嫌でございましたな、のべつに喋つてさ」

幸「然うさ、併し雷と云えば四万で一遍大雷鳴に遭つて驚いたっけな」

由「左様さ、宿屋の裏の口へ落た時には驚きましたね」

幸「此の頃では雷避が出来たので安心だが、日光へ往つた時に霧降の滝壺へ往く途中で大雨大雷鳴に出会い、甚く困つたが、あの時を思えば霧降の滝壺まで下りたっけねえ」

由「それは何んですが、伊香保でお癪を起した御新造ね、彼のくらいまた人柄の善い御新造も沢山はありませんね、お可愛そうに世の中の事を御存じないのだから驚きましたろう、峰松と云う車夫が騙して引摺り出して、折田村で正直そうな彼奴がやつたてえののでげすが、彼奴が鞆が残つてあつたと云い持つて来たのが手で、お金はありません、車に残つたものをお届け申すのは当然、然の事だてえのでげすから、誰も一杯喰おうじやアありま

せんか、つい正直者と思つて次の間へ置きました、どつちりお金の這入つて居た大鞆は木暮の方へ預けて置いたから宜うございましたが、然うでないとは様な目に遭つたかも知れません、何しろ暇を潰した上に四方では大御散財でげしたが、關善へ大きな男が談判に来た時にやア私は本当に怖うございましたよ、首を捻るなんて親切ものだから、烈しく掛合われた時には本当に驚きました」

幸「彼の時は怖かつたな、彼の時に種々災難の重なつたのも詰りお母さんが止せと仰しやつたのを無理に出たから悪かつたが、鈴木屋に働いていた彼のおりゆうには驚いた」

由「え、彼奴には喰つたね、ポロ／＼涙を零して、え、何とか云いましたつけ、私は瀧川左京のお嬢さままでございますつて身の上話を並べたから、此方もホロリと来て、あ、お気の毒だつて、貴方はお慈悲深いもんだから五十円で身の代をくぎつて、東京へ連れて来て権妻になすつて、目を掛けておやんなすつたが、実に怖いな、漸々様子を聞けば芝居町の芸者で小瀧と云う奴だそうで」

幸「私が東京へ連れて来ると芝居を観るのも厭だ、物見遊山は嫌いだ、外へ出るのは厭だと神妙らしく云つてたのは、本当に出嫌いではなくつて、実はお尋ねもの、日向見お瀧と云う奴で、真実温順しいのではない、何処へも出て歩く事が出来ねえんだ」

由「亭主は村上何んとか……ウン松五郎てえ肩書の有る旅稼ぎだそうですが、得て湯場などには然う云う奴がありますね」

六十一

幸「おい／＼此処でうっかりお尋ねもんだなんて、彼奴の事ア喋られませんか」

由「へえ……彼女もあゝ云う目に遭つたのは罰でげすね、だが橋場の御別荘へ押込の這入つた時には私は驚いて腰が脱けちました、あゝ血が流れて居るのを見たが、実に何うも彼様な忌な心持はありませんね、何んとか云うお女中が其方から這入つちやアいけません、此方へ往くと其処に泥坊が居りますよと云われた時にやア私アとつちたね、併しまア彼女の女は天罰で賊に斬殺され、棧橋から投げ込まれたのでげすが、彼も矢張悪事の罰だろうね」

幸「ウン彼奴も窃盗をする奴だが、お瀧も矢張りお尋ねものの悪党だから殺されたつて却つて私は好い気味ぐらいに思つて居るが、彼のお駒と云う小女は誠に可愛そうな事をしたね」

由「そうくお母つかさんが来ておいく泣いて居た時には、流石さすがの私わっちも気の毒に思いました
が、おたきの死骸いまいまは未だに知れませんかえ」

幸「まだ知れねえが、多分海へ流されて、天罰だから何処かの岸へ打揚げられ、鳥つつに喙つつか
れるぐらいの事は何うしたつてなければならぬよ」

と話をして居ると、唐突だしぬけに一人の老翁おやじうしろが後の襖を開けて這入つて参りまして、

老「はい御免下さい」

由「はい……おや旦那、何処かの老翁おじいさんが這入つて来ましたよ」

老「はい御免下さい……え、只今隣の席で承りましたが、何かソノ村上松五郎と申すも
のにお瀧と申す者が盗賊に殺されて、川へ投り込まれ、死骸が知れんとか云う事をちよつ
と承りましたが、貴方がたは其の松五郎と申すものゝ行方や何か精くわしく御存じの御様子
で」

と問われて兩人は恟びつくりして互に顔を見合わせ、小声にて

幸「だから無闇に喋舌しゃべつちやアいけねえてんだ、掛合かりあいに成るよ、此の事に付いて一昨おと
年大変に難儀をした者があるんだよ」

由兵衛は胸は早鐘、どぎまぎしながら此方こちらに向い両手を突き、

由「へえ入らつしやいまし、私共は何も知つて居る訳じやアありませんが……ちよいと只今……へえ人の噂を聞きまして、ちよいとおちやツびいを致しましたので、精しく知つてると云う訳じやアありません、只人の噂を聞ききましただけの事で」

老「それでも何かお瀧と云うものを尊宅へお連れ帰りなすつて、目を掛けお使いなすつた処が、其の者が案外盗賊で、これこれいうお尋ね者ゆえ、あゝ云う死様をするのも天罰だと仰しやつたが、貴方は何方のお方さまか知りませんが、お瀧を奉公人にでもしてお使いなすつた事でございませうが、仰しやつて下さいませんと、私の方に些と困る事がありまするので、何卒お隠しなさらず仰せ聞けられて下さい」

由「これは驚きましたなア……」

幸「お前は余りペラ／＼喋るからいけないんだ、旅だアな、此様な処で探偵にでも捕まつて調べられると日数がかゝるよ、四方でも二週間程余計に逗留したじやアねえか」

由「へえ……貴方ソノ何んでげすソノ……へエ何んで」

幸「何を云つてるんだ」

由「実はソノ何んでげす、此の旦那が彼のお瀧という女を正直者だと思召して、田舎から東京へ連れて来て、少しばかり雇人のようにしてお使いなすつて居らつしやると、

盗賊とうぞくが這入りまして斬殺きりころされ、未だに死骸が知れませんでしたのでですが、貴方もお掛合かあひいてえ訳わけでございますか」

老「いや掛合と云う訳ではございませんが、少し調べんければならぬ事が有ると云うは、其の村上松五郎と申すものゝ事で」

由「へえくくく」

老「何卒どうぞ細かに仰せ聞けられて下さい、若し隠し立をなさると何処までもお附き申して質たゞさねばならん事があります」

由「へえ、これは恐れ入りましたなア旦那」

六十二

幸「お前本当に困るじやねえか、余計な事を云うからいけねえんだ……何卒どうぞ御勘弁なすつて」

老「いや貴方が何も私わしに謝る訳はないが、ちよつとお姓名なまえだけを承わつて置きましようか」
幸「へえ……」

老「いやさ御姓名ごせいめいを一寸認めて置きたいから」

幸「へえ……真ま平御免なすつて」

老「何も謝る事はありませんよ、御姓名だけを」

幸「へえ、何う云う何ですか掛合なれば仕方ありませんが、私も彼を正しょう道どうな女と存じまして、お屋敷ものが零落おちぶれて斯様に難儀をして居るとはお気の毒な事だ、あゝ不憫だと思ひまして、多分の金子を出して彼の身請を致し、東京へ連歸つて私の妾てかけにして、橋場の別荘へ置きました処が、盜賊が這入りまして斬殺きりころされ、いまだに死骸が知れませんので、尤も其の筋へお届けには成つて居りますが、お再調さいしらべに成りましても当人は助かつて居りますか助かつて居りませんか、其処は分りませんので、へえ」

老「ム、一貴方は何と云うお姓名なまえだ」

幸「え、私は橋本幸三郎と申します」

老「ム、橋本幸三郎」

と手帳したへ認め、

老「お宿所は」

幸「靈岸島河口町四十八番地で」

老「ウン……貴方は」

由「え、私……あの、へ、私が何もソノ妾てかけにしたと云う訳でも何でもないの、私は只

此の旦那の家へ時々出這入つて御用事を伺うだけの事でげすから、へ、へ、」

老「いや精くわしい事を御存じだろ、仰しやらんなら私わたくしと一緒に同道していらつしやい、

御姓名ぐらい伺うのは当あたり然まの事だ」

由「へえ……え、私わたくしは木挽町で」

老「木挽町……」

由「三十六番地で、へえ」

老「御姓名おなまえは」

由「岡村由兵衛」

老「お神樂かぐら」

由「お神樂じゃありません、幾らひよつとこ見たような顔でも……岡村由兵衛」

老「ウン……そこで村上松五郎と申すものゝ行方は慥たしかに知れませんか、更に心当りもごぎ

いませんか」

由「へえ、それは素もとより知らん奴でございますから」

老「で、そのお瀧と申すものは慥に賊に斬殺され川の中へ陥りまして、いまだに死骸も知れませんか」

由「へえ死骸も知れないのでございます」

老「愈々知れませんか」

由「へい知れませんがございます」

と云切ると、襖の蔭で何者か知れませんがワーツと声を揚げて泣出しましたから、由兵衛は驚きましたの驚かないなんて顔色を変えて、

由「あゝ誰か泣きました」

というと、彼の老人は静かに後を顧り、

老「泣くなく泣いたって致し方がないから此処へ出る、泣いたって何うなるものか、見ともない、声を出して泣くなんて男らしくもない、何んだ」

由「旦那、まだ誰か居るんで、此の人は年寄だから何んでげすけれども、若い人が出て来ると大きに怖いような訳ですが……誰かいらっしゃいますので」

と云つて居る処へ泣きながら出て参りましたのは、今年十三に成りまする布卷吉と云う小僧だから大きに安心を致しました。

由「子供なら安心を致しました……が何ういう訳でお泣きなすつた」

老「はい……此者は私の秘蔵な孫でございませうが、松五郎お瀧の行方を探して居る身の上で、此者が両親と申すものは其のお瀧松五郎ゆえに非業な死を遂げましたのは、此者が七歳の折でございませうが、何うかして両親の敵を討ちたいと子心にも心掛け、奉公中暇を取つて立帰り、其の者を取押えて、手に合わんときにはお上のお手を借りても親の仇を討ちたいと心掛けて居ります、処が敵と狙うお瀧めが今お話の通り死骸も知れんように成つたと承わり、残念に存じまして此者が泣きましたので」

由「へえー御両人は野田の太田屋で隣座敷に居たお方でございませうね、此のお子のお父さんお母さんまで非業に殺しましたと、へえー彼奴ア幾人人を殺したか知れねえ」

と話をして居ますと、唐突に隔ての襖をガラリ引開け這入つて来たは大きな男で、

男「はい御免なせえ」

幸「はい」

と何者かと首を擡げて見ると、筏乗市四郎でございませう。

幸三郎も由兵衛も驚きました。

市「え、老爺さん、お前さんに又此処でお目に懸るてえのは誠に深え御縁かと思つてるのよ……貴方は慥か四万の關善でお目に懸つた橋本幸三郎さんてえお方でげしよう、裁判沙汰になつて警察へも毎度出ましたが、毎もまアお達者で」

幸「これは思い掛けない、親方で、由さんソレ筏乗の市四郎さんだよ」

由「これは何うも御機嫌宜しゆう……先刻もちよいとお噂を致しましたが、是れは何うも……今度は首捻りじやアないのでしょうか」

市「いや貴方は由兵衛さんとか仰しやつたね……あの折は永え間お目に懸り、また帰り際には飛んだ御馳走になりました、何んとハアお手当をね沢山に遣つてくれると云つて下さつたが、彼のお藤さまと云う御新造が堅い人だもんだから中々受けませんでした、彼の後私も時々参りますがね、何時でもハア貴方のお噂ばかり致して居りやすだ」

幸「いや何うも誠に思い掛けない事で、そして親方は何方へ」

市「なに閑宿まで参りやしたが野田の祭を見ようと思つて往くと、此の老爺さんが此の子に意見しているのを私が隣座敷で聞くと、此の子が、田宮坊太郎の講釈を聞いてから急に

敵が討ちたくなつたから、お祖父さん暇を取つておくなせえと云うと、此の老爺さんが今の世の中には敵討は無え事だ、其様な事をするに汝が御処刑を受ける、駄目だから止せてえと、御処刑を受けても殺されても、己ア死んだ両親の恨みを晴らさねえば子の道が済まぬと云うのを聞いて、私は隣座敷で胸が一杯になつて涙を翻しながら聞いて居やした、それから汽船へ乗ると船で会い、また此処で一緒に成るとは何とまア深え御縁かと思つて、併し其の相手の村上松五郎てえ奴は、旧了侍だと聞いてるから、此様な小せえ子に敵の討てる訳もなしするから、若し劍術でも習いてえなら、私の御主人筋の人が劍術が偉えから其処へ往つて稽古をさせてよ、自分で敵を討たねえまでも劍術が習いたくば其の人に頼んで、お前の志を話したら、あゝ感心な訳だ、己ア家に置いて劍術を教えてくれべえと云つて、引取つてやろうと仰しやるに違えねえから、己アお前を其家へお連れ申そうと思つて、入らざる事だが、十二や十三で親の敵を討とうてえ心が感心だから、愈々てえ時にア頼まれやしねえが己も助太刀に出て、その松五郎てえ奴の首でも捻つてやろうと思ふんだ」

由「へエ、昨日野田の太田屋でソレ申し貴方、隣座敷に居たのは老爺さんと此の子でございますか、それを聞いて此の市四郎さんが御親切な親方ゆえ……首捻りは恐入りました

が、お力がありますからね、そう云う奴の首は捻つても宜いんでげすからね」
 幸「へえー成程妙な訳で」

市「私も是れから帰り掛けにちよつくら顔を出さねえばなんねえが、此の瑞穂野村てえ処
 に万福寺と云うお寺があるんだ、其処にもと九段坂上に居た久留島修理さまてえ方が田
 地を買つて、有福に隠居をなすつて在らっしゃる。其処にね橋本さん貴方が伊香保で世
 話を上げてお藤さまが女隠居になつて居るだ」

幸「へえー、そりやア何うも思い掛けない事で……何んでげすか、一時は谷中の団子坂下
 に入らっしゃる事を聞きましたが、それじゃア此の頃では田舎へ引込んで入らっしゃるの
 ですか」

市「久留島さまと少々御縁引であるから、己ア方へ来るが宜えと引取られてるんだそう
 だが、御亭主も妹も去年お死去りなすつて、久留島さまが引取つて、小せえ家へ這入り、
 田地を買つて樂にしてお在なさるが、私も久留島さまへ出入るから、彼れが御縁になつ
 て時々お藤さまを訪ねると、先方さまでもやれこれ仰しやつて下さるから、私もハア時々
 機嫌聞きに往くと、種々結構な物を戴きやすが、其の度に伊香保で癩を起して種々お世
 話になつたが、彼の橋本さんの御恩は忘れられねえつて貴方の事ばかり云つてますぜ……

どうせ館林へ出て足利まで往くのなら、瑞穂野へは通り道で遠くもねえから、私と一緒においでなさらねえか」

六十四

由「へえー何うも是れは思い掛けない事で、矢張やっぱりこれは御縁があるので、彼の時から岡惚れをして居たので、いまだに忘れないで居て、貴方が会うとまた尚お惚れますぜ」
幸「止しねえな」

由「親方是非是れはお供を願いたいもので、此の旦那は大変な御親切な方で、彼の御新造がお癩かさを起した時などは大骨折りで、御介抱をなすつて寝やすずに撫なつて上げなすつた位で」
幸「其様そのんな事はありやアしない」

由「なに……此の坊ちゃんの剣術習いや何かなんもありますから私共も共々に往つて願いまし
よう」

幸「余計な事を云いなさんな……私わたくしも誠に久し振でお目に懸りとう存じますから、何うか御案内を願いたいもので」

市「え、参りましようが今夜は最う遅いから明日の事に致しましよ」

と是れから酒を酌くみかわ交せ、橋本幸三郎が彼の老人にも御馳走を致し、翌日腕車くるまで瑞穂野村なる万福寺へ参つて見ると、樹木繁茂致し、また一面に田畑も見晴しの好い処で、生垣にてちよつとした門形もんがたの処ところを這入りまして、

市「はい御免なさい、御免なせえ、何んとか云つたつけお女中……」

女中「はい……おやおいでなさい……旦那、彼の筏乗の市さんと云う方が参りましたよ」

修「然そうか……お、能く出て来たなア、堅いから時々訪ずれてくれて誠に忝かたじけない……さア此方こつちへお出で」

市「これは殿さま、其の後は誠に御無沙汰を致しやした、ちよいと上らねえばなんねえが、遂々ついで御無沙汰になりましたして相済みません」

修「此の間は結構な茸をくれて大層旨かつたが、今は初ものだのう」

市「然うかね」

修「今日は何処へ」

市「なに関宿まで参りめえやして、野田へ廻つたり何かして、蒸汽で川俣まで参りまして雨に降られやしたが、でけえ雷鳴かみなりで驚きやした、今朝は腕車くるまで此処まで参りました」

修「道理で大層早いと思つた」

市「え、殿さま、今日私わし貴方あんたに折入つて願ねえがあつて参めりやしたが、貴方何うかお庭で劍術ウ教えて下せえな」

修「何んだえ、唐突だしぬけに劍術を教えてくれてえのは」

市「へえ……お前めえさまマア此方こつちへ這入んなせえ……旦那さま此の子でござえますが、まア年齢としいいかねえけれども劍術を習いてえと云うだ」

修「はいく、さアく、此方こつちへお這入り、お、大分だいぶん人柄な可愛らしい児こだが、今の世の中で武芸を習つたつて廢すたれもので無駄だが、マア何う云う訳で」

市「何でもハア嗜すきで習いてえので」

修「ム、ー……何処どこの者だえ」

市「おい老爺おしさん此方こつちへ這入んなせえ」

老「はい御免下さい、え、お初にお目に懸ります、手前は足利在江川村と申します処に住み、微かに暮す奥木佐十郎と申す者であります、お見知り置かれまして己後いご御別懇に願います……え、此の子は私の孫わたくしでございますが、武芸を習いたいと云う心掛けで、実は是れまで商家へ奉公させて置きましたが、強たつて武芸を習いたいと申すので、主人方の暇を取り

連れ戻る途中において、不図ふとした事にて此の親方にお目に懸りました処、これくの殿さまが当時御隠居なすつて在いらつしやるから、劍術を教えて下さるよう願こつてやろう、と此方の勧めに任せて御無理を願ないに参りましたが、何卒せうぞお手許てもとへお置き遊ばして、お役にも立ちますまいが、使い早間にお使い下され、お暇の節には劍術を教えて下さるよう願いとう存じます」

修「是れはお前の子か」

佐「いえ孫でございます」

修「左様か、妙だなア劍術を習いたいというのは……老爺おじいさんは矢張り商人かえ」

六十五

佐「へえ只今では機屋を致して居りますが、前々ぜんぜんはへへ、戸田采女匠とだうねめのしやう家来で」

修「あゝ足利の、左様かえ……矢張やっぱり武士の家に生れた子供だけあつて、劍術を習いたいと云うは妙だな」

市「へえ妙でございます、尤も是には種々いろく訳もありますが、パツとなつちやア此の子の

望^{のぞみ}も叶^わわねえ訳でござから申しませんが、まアお手許へ置いて使^{つか}つて下せえまし、流石^{さすが}の私^{わし}も魂^{たまげ}消^けて泣^なえたねえ」

修「はア……其方^{そなた}が泣いた」

市「へえ、後日^{あと}で分りますが、さアと云う訳になつて、ア、然^そうかてえば貴方^{あなた}も泣かねえばなんねえ」

修「はてね、何う云う理由^{わけ}で私^{わし}が泣かなければならんか」

市「何う云う訳つて……云えばなア老爺^{じい}さま……訳は云えねえが置いて下すつて無闇に劍術を教^{おし}えて下せえまし……お前^{まえ}も遠慮^{えんりょ}しちやア駄目だから、旦那さまのお暇の時には一本願^{ねが}えますつて、宜^いいか、私^{わし}も筏乗^{わか}で力^{ちから}業^{わざ}ア嗜^{すき}だから時々来て一緒にやる事もあるから……旦那さま実に此の子ぐれえ感心な者はありませんよ、私イハア胸^{むね}え一杯^{いっぱい}になりやしたが、貴方^{あなた}も屹度泣くよ……それからアノ御隠居さまは相変らず御機嫌宜しゅうござえますかえ」

修「ウン藤か、ハ、ハ、藤や、ちよつと此処へおいで、市四郎が来たから」

と云われてお藤は奥より出て参り、

藤「おやまア能く出ておいでだ、毎度尋ねておくれで誠に有難う」

市「はい御機嫌宜しゆう……何時もお若いね御器量の善いてえものは違つたもんで、今日は貴方の大嗜な人を連れて来ましたよ」

藤「妾の大嗜な……兼吉という百姓かい」

市「あ、なに……さア貴方此方へお這入りなせえましよ」

幸「是は何うもお懐かしゆうございます……」

藤「おやまア……何うも……由兵衛さんも」

由「へえ、マ有難い事で、是まで貴方のお噂たら／＼でげすが、斯う云う処にいらつしやろうとは些とも知りませんで、昨夜も今日も先刻までも貴方のお噂が漸々重なつて、ポンと衝突かつて此処でお目にかゝるなんてえのは誠に不思議でげすが、些ともお変りがありませんな」

市「へえ、なには是には種々深い訳もありますけれども、其様な事は構わないで……昨日図らず一緒になつて、貴方の話をしたら何うかお目にかゝりたいと仰しやつて、どうせ足利まで往らつしやるから通り路の事ゆえ、私が御案内をしてお連れ申して来やした」

藤「さア何卒此方へ……あなた、何時もお話を致しますお方で」

修「ウン、成程伊香保で御懇命を蒙つた……是は始めて御意得ます、予々此の者か

らお噂ばかり聞いて居りますが、此者は私の姪筋に当る者でござるが、不幸にして男縁がなく、許嫁見たようなものもありましたが、不縁になったり、其の者が死にましたり、種々理由がありまして、年若の者を女隠居とするも不憫なれども、再縁致す了簡がないと申して独身で居りますが、常々貴方のお噂ばかりで……成程橋本さんは大分好いで

幸「へ、恐入ります……」

由「いえ是は旦那さま、橋本さんの男の好いのは東京中の評判で大変なもんでげす、昨晚の段鼻の女などは此の旦那に何のくらい惚れたか知れませんが、跡を附けて来るてえ処を宜い塩梅に遁れて来ましたが、へばり附いて、弱りましたつけ」

修「幸三郎さんは慥か靈岸島辺にお在になつて、其の頃はお独身のよう承わりましたが、只今では御妻君をお迎えになりましたか」

幸「へえ未だ縁なくして独身で居ります」

修「ム、……私の姪に当る此のお藤ねえ、日頃貴方の事ばかり誉めて居ますが、少し年は取つて居りますけれども、貴方此娘を貰つてくれませんか」

幸「へ、御冗談ばかり仰しやつて、恐入ります」

六十六

修「いえ若いのに未だ男の味知らず、是なりに隠居をさせるのも惜いもので、文明開化の世の中なのに昔気質むかしかたぎに後家を立て通すの、尼に成るのと馬鹿なことを申すから、旧弊な私でさえ開けぬ女だと意見を云うて居る位で、尤も別に支度はない、貧乏士族だから心に任せんが、少しは田地を買つて持つて居ます」

幸「へえ、然うなれば私も嬉しゆうございますが、余りお手軽で殿さま御冗談ばかり仰しやつて、私のような町人風情ふんげいへ」

由「旦那遠慮をしちゃアいけませんよ、是は自然にちやんと斯う云う事に出来て居るんでげす……、え、由兵衛申上げますが、これは出雲の神さまが御縁を八重に結んで、伊香保結び四万結びこま結びてえ事になつてゐるんでげすから、是は是非願いましようじゃアありませんか」

修「今直ぐと云う訳ではない、貴方も旅の事だから何れ又改めて私がお話に出るで、是は只ほんの下話したばなしだけで」

由「いえ下話より上話うわばなしに願ねがいたいもので、是は何うか」

修「然うなれば誠に芽出度い」

と云われると、お藤は慕う人の事ゆえ真赤になりましてモジ／＼為しながら、

藤「私のような不束者を其の様な事を仰しやつて橋本さん…」

と云う中うちに自然と情の深い処あちが顕あらわれます。此方こつちも貰もらいたいから話も早くおツ附つきました。

修「何れ改めて私わしが出る」

と其の晩は此家こゝへ一泊致し、翌日かたく一方は足利へ立ちましたが、これも奇縁でございまして、改めて久留島修理殿とつけいが東京へ出て参り、橋本幸三郎の母に会つて右の縁談を申入ると、

母「それは幸いな事で、何うか願ねがいます」

と幸三郎の母も異議なく承知を致しました。

さてお話別れまして、伊香保に永井喜八郎と云う大屋おやがございまして、夏季なつは相変らず極ごく忙いそがしい処ところでございまして。此方こつちの三階さんかいはずーと長く続つがって、新座敷が玄関げんかんの上の正面しょうめんに出来て居ますが、普請は中々上等で、永井喜八郎の宅うちの湯殿も綺麗で機械きかいにて水を吹出

して居ます。入浴した後で水にかゝり、風を引かんようにまた入浴致します方法を、加賀病院の岡先生が覚えてから湯殿も新しく出来、誠に繁昌な家でございます。此家の三階の角座敷に来て居りますのは前橋の商人で、桑原治平と云う男で、年齢四十五に相成り、早く女房に別れ、独身者で、年中間さえあれば馴染も有りますから冬でも寒湯治と云うて参ります、独身で鞆を提げて参り、暫く保養して、また横浜へ往き、儲かると伊香保へ参り、芸者も買ひ飽き二階に寝転んで頻りと新聞を読んで居りますと、ガラ／＼と向の二階の障子が開きましたから、ふと見ると、年頃廿六七にも成りましようか色のくつきりと白い、鼻梁の通りました口元の可愛らしい、目許に愛のある、ふさ／＼と眉毛の濃い好い女で、何れの権妻か奥さんか如何にも品のある方で、日に三度着物を着替るが、浴衣によつて上へ引掛ける羽織が違ふと云うので、色の黒い下婢が一人附いて居ります。年は三十一二で其の下婢が万事切盛を致して居ります。

治「あゝ、好い女だな」

と治平は起上り、頻りと彼の女の顔を見て居りますと、女の方でもジツと治平の顔を見詰めて傍を振向き、下婢に何かコソ／＼話を致して居りますから、治平も何うも見たような女だと思ひながら、また見て居りますと、見られると見返すもので、情が通ずるか先方

でも頻りと治平の顔を見たり何か致して居ります。

六十七

湯場の習慣で、運動などを致して居る時には知らん人でも挨拶を致します。

治「お早うございます、好いお天氣に成りましたが御運動でげすか……」

なんて瞞かし込み、宜い程に挨拶を致し、終には何かお遣物をしよう、何を遣つたら宜かろう、八崎から幸い好い鮎が来たから贈りたいものだと言うので、是から大皿へ鮎を入れて二十疋ばかり贈りました。すると先方の女からお礼が参りました。葡萄酒の瓶を三本に東京から来た菓子折を持って、

下婢「御免下さいまし」

治「これは入らっしゃいますし、さア此方へお這入んなさい」

下婢「先程は結構なものを沢山に有難う存じました、誠に大悦びでございまして、大層お珍らしい美事な鮎で、大層子がありまして塩焼にして召上りましたが、お嗜でございまして……此品は誠に詰らんものから三度も続けて召上る位で、誠に大悦びで在りました……」

でございますが、此のお菓子は東京から参りましたから何卒召上って」

治「いや是は恐れ入りましたな、斯様な何うも頂戴致すような訳なのではありません、多分に何うも…是では却つて鰈で鯛を釣るような訳で、恐れ入りましたな」

下婢「いえ詰らんお菓子で」

治「お茶を一つ」

下婢「有難う存じます…貴方は何んですか久しく此処に湯治をして在つしやいますか」

治「へ、僕は間さえ有れば、近う御座いますから、来たくなるとスイと参つたり、別に用もない時は大概来て居ります」

下婢「だからお馴染が多いので、皆さんとお話をなさる御様子が…併し永井の家は誠に手当が宜うございますね」

治「え、中々好い家で、永井一郎という俳諧師で武芸も上手なり、鉄砲も打つたりして有名な人だったが、故人になり、その家内は今の母親で、今の主人も堅い人でお客を大事に致しますから、此の通り繁昌ですが、貴方の在つしやるお二階は結構に出来ましたな」
下婢「本当に当家は客を大切にしますが、此の位に致しませんではお客が殖えますまい…貴方はお一方ですが、御新造をお連れなさいませんか」

治「へ、私には其様なものはないので、独身者でございます」

下婢「おや然うでございますか」

治「へー……お宅は」

下婢「極く野暮な処でございますよ、青山で」

治「へえー東京の青山と申すと四谷の方でございますか」

下婢「四谷とも違います、信濃殿町と申しまするので奥さまは未だお若うございます

が、御運が悪くつて殿さまが御逝去になりまして、今年で丁度四年の間お一方でいらつし

やいますが、何も御不自由のないお身の上でありますから、お寒い中は大概熱海の藤屋へ

往つていらつしやいますが、今度は伊香保へ来たいと仰しやつて、箱根へ往らしたり何

かなさいますけれども、箱根のお湯は遊山には宜しゅうございますが、お血の道には当地

の方が宜いと云うので、いらつしやいましたのですよ」

治「へえ、殿様はお逝去に……官員さまで在らつしやいましたか、何処へお勤めなさいま

したので」

下婢「何とか云いましたつけえ、お寺見たような名で、アノー元老院とか云う」

治「え、成程、左様でございますか、それじゃア上等の官員さまで」

下婢「お実家はお兄さまは銀行の頭取をなすって居らっしゃいますので」

治「銀行、へエー前橋にも支店が有りまして御懇意の方もありますが、へエー左様でございますか、成程深川でいらつしやいますかお実家は」

下婢「あの今晚は月が宜しゆうございますので、裏の方を見ますと流れが見えて、誠に景色が宜しゆうございますから、別段何もございませんが、頂戴の鮎で一口上げたいが、知らない人ばかりでいけないと思つてますと、貴方のお身の上を承わりますのに、彼は前橋の斯う云う身の上のお方だと承知致しまして、彼のお方なればって、奥さまも御退屈ですから何卒入らしつて下さいまし」

治「それは誠に有難う……へエ是非出ます、屹度参ります」

下婢「屹度お待ち申して居ります、左様なら」

と云い捨て、出て往きました。

六十八

桑原治平は嬉しいので逆せ上りました。別嬪に一献差上げたいから来て下さいと云われ

たのでありますから、治平は是から急に髪を刈込み、髻ひげを剃り、お湯に這入り、着物を着替え、大裝飾おおめかしで正面の新座敷へ参り、次の間から、

治「へえ御免下さいまし」

下婢「おや入らつしやいまし」

女「まあ宜く入らつしつて下さいました、先程は結構な物を沢山頂戴致しまして、何ともお礼の申上げようがございません」

治「何う致しまして、却つて詰らんものを上げ、結構なものを戴きましたから、私わたくしは徳を致したような勘定で相済みません」

女「さ、座布団へ」

治「オやお構いなすつてはいけません、私わたくしはへ、前橋の田舎者いなかもんでございますから、東とうけ京いのお菓子は大層結構で」

女「いえ、何ういたしましたして……今日は何もございませんが、当地の名物だと申しますから、瓜うりもみ揉もみと胡麻豆腐だけを取りましたから、さア一口召上つて」

と酌をする。

治「これは恐れ入りましたでございます、向山の名物で……先程お女中から種々いろくお話でござ

ございましたが、殿様は飛んだ事でございました」

女「いえ最う過去すぎさりました事で、今はもう諦めて仕舞いました、ト申すと何か不実なようでございますが、去る者日々に疎うすしとやらで、漸々ようく忘れてしまいました、深川の方に少々身寄が有りますので」

治「左様でございますか、併しかし未だお若いのお独身ひとりで在いらっしゃるのは惜おしい事で、まだ殿様は四十代でいらつしやいましょう……へえ頂戴致します」

女「誠に失敬ですが、何うぞお喫あがり下さいまし」

と献さいつ酬おごえつ酒を飲んで居うちる中に、互あいに酔えいが発して参りました。彼の女は目の縁ふちをボツと桜色にして、何とも云えない自堕落なりな姿に成りましたが、治平はちゃんとして居ります。

女「大層畏かしこまって在いらつしやいますこと、何卒どうぞお膝をお崩し遊ばして」

治「いえ大層酔よいました」

下婢「宜いいじやありませんか、まア御緩ごゆつくりなすつていらつしやいましてよ……奥さん私はお湯に這入るのを忘れましたから、ちよいとお湯に這入つて参りますから」

女「じやア文ふみや這入つておいで、其処しよに石鹼しゃんがあるから持つておいで、それは私の使い

かけで入らぬから」

下婢「はい……それじゃア貴方御免遊ばして」

と好い程に其の場を外して下婢は下へ降りて仕舞いました。治平は少し色気がありまして、何となく間が悪いから煙管で腮の処を突衝いて見たり、くるりと廻して頬辺へ煙管の吸口を当てたり、ポン／＼と叩いて煙草ばかり喫んで居ります。

女「貴方は何でございますか、前橋の何と云う処で」

治「へ、豎町と云うごとくして居ります処で」

女「お盛んな大層好い処だそうで……貴方は御新造さまをお連れ遊ばしませんのですか」
治「家内は無いのです、手前の妻は五年前に歿しまして、それからは独身で居ります、へえ、至つて手狭ではありませんが、些とお立寄を願ひとうございます」

女「はい……まだ私は参つた事はありませんから一度見物したいと思つて居りますが、お寄申して万一奥さんか又権妻さんでもいらしつて、お悋気でもあるとお氣の毒だと存じまして」

治「いえ家内は全く無いのでございます、尤も世話をして呉れるものもありましたが、長し短かして何うも善いのがありませんから独身で居りますが、却つて氣樂でございます」

女「それはマア好いお身の上で……貴方のようなお方の御新造になる方は本当にお仕合せで」

治「へ、なに仕合せでもありますまい、何うもへ、誠に不粋な人間で何も心得ませんからなア……貴方さまも一方で、お子供衆はございませんか」

六十九

女「はい子供はございません、親類が深川に居りまして、これが銀行へ出ますので、私は其の方へ引取られて参るより他に仕方のない身の上でございしますが、疾うツから嫁付けへ、再縁しろと申しまして、兄が申すには官員は忌だから遣らない、商人が一番好いが、何んなら他県で堅い商人であつて、横浜へ来て取引をするような田舎の商人の方が、田地なども持つて居て身代が堅いから、然う云う処へ縁付けたいと夫ればかり申して居ります。が……何処かに好い口があつたら縁付けると兄が申すので」

治「へえーなる程……実は東京も盛んな処でげすが、また手堅い処へ参つては田舎の方が手堅うございますからな、へえー成程お世話ア致しましょうか」

女「お世話たつて私のようなものですから、誰も貰たれつてくれる人がありませんもの……貴方は本当に奥さんがありませんか」

治「本当にありません、真実でげす、本当にないから無いと申上げましたので」

女「貴方はまアお調子が好過よすぎますよ……ま一杯お酌を致しましょう……何んですね……私の様なものだつてサ、本当に貴方のような結構なお身の上はありませんね」

治「なに余り結構じやアございません」

女「巧く云つていらつしやるよ」

と治平の手首を握るを振払い、

治「へ、エ御冗談なすつちやアいけません」

女「好いじやアありませんか、貴方本当にお独身ひとかたですか」

治「へえ……」

女「私は当家へ参りましてから、貴方の在いらつしやるお座敷ばかり見て居りましたことを御存じですか」

治「へ、何かどうも、飲たべ酔よいまして誠にどうも」

女「飲酔たべよつたつても私は嘘は云いませんが、貴方は本当にお罪だと思えますよ」

治「其様なことを仰しやると、私は田舎者ですから本当に為ますよ」

女「嘘にされると却って腹が立ちますが、私のようなものでも貴方本当に貰って下さると仰しやるなら、直に兄の方へ話しを致しますが、本当ですか」

治「奥さん本当だつて……貴方はそりやア真実に仰しやるんですか」

女「私に嘘はありませんが、貴方が真実なら何うか確かとした貴方のお心の証拠が見とうございませす」

治「心の証拠と仰しやつても別に何もありません、と云つて、まさか髪を剪るの指を切ると云う訳にも行きませんが」

女「女の口から此の様な事を云い出すは能々の事ですからよう」

治「ようたつて……私にも何うして好いか分りません」

女「何うしてつて、貴方のお心の証拠をさ」

治「いえ決して私は嘘を吐きません、神かけて嘘は云いません、若しお疑りなさるなら、書付でも何んでも証拠を上げます、へえ」

女「本当に貴方然うなんですか」

と少ししなだれ掛る途端にガラリと障子を開け、スーツと立った男は鬚の生えて居る、

眼のギョロリとした、鼻の高い、年としごろ紀三十四五にも成りましようか、旅行洋服で、一方の手には蝙蝠傘とステッキとを一緒に持ち、片手には鞆を提げて居るを見て治平は驚きましたから、俄にわかに飛退とびのき両手を突き、

治「これは入らつしやいまし……何方どなたかお客さまが」

と云われて女も驚きまして飛退きますと、

男「此の始末はマア何う云うもんか、呆れて仕舞しもうたなア……僕が僅かに十日許ばかり東京に参つて居た留守の間に、隠し男を引入れるとは実に怪けしからん事じや……これ密夫貴様みつぶは何処もんの者じや」

といわれて治平は「はてな此の人は銀行に出ると云つた阿兄あにきか」と思いましたが、彼の女に向い、

治「此れは何処のお方で」

女「はい、貴方に対しては誠に済みませんが、私の良人つれやいでございますよ」

治「えゝ……御亭主」

と治平は真青まつさおになりブル／＼慄え出すを見て、ガラリと鞆を投ほうり出し、どたアリと大胡座おあぐらをかいて、隠かくしからハンケーチを取とり出し、チンと涕はなをかんで物をも云わず巻煙草に

火を移し、パクーリくくと喫みながらジロリくくと怖い眼で治平の顔を見るばかり、此の時桑原治平の驚きは一方なりません。此の者は谷澤成瀬と申す青山信濃殿町の官員でございます。

七十

彼の洋服打扮の人がスツと這入って来ました時には、桑原治平も驚きました。丁度今風呂に這入って来ましたお文と云う女中が、湯から上って来て此の体を見て恟り致し、一旦座敷へ這入ったが次の間から再び出かゝるを目早く見付け、

成「コラく……コラー何処へも往かんでも宜しい、其処に居れ、跡をピツタリ閉って其処に坐つて居れ……さ高これは何うか、ウーン此の始末は何う云うもんじゃ……貴方は何処の者じゃ、えゝ……貴公は何れの者か姓名をお聞き申したい、僕は東京青山信濃殿町三十六番地谷澤成瀬と申すものじゃが、貴公の姓名をお聞き申そう」

治「へえく手前は前橋豎町の商人桑原治平と申します」

成「コレ高、己が五日か十日の間東京へ往つてる間に斯う云う密夫を引入れて、此の爲

体らくは何う云うものか、実にどうも何とも何うも言語道断の仕末じやアないか、お前は僕かに斯くまで恥辱を与えたからには、僕も此の儘では捨置く訳にはいかん」

高「はい重々私が悪うございますけれども、此の治平さんと云うお方には些ちつともお咎とがはないので……貴方の有る事を申せば遊びにも入らっしゃいませんから、私は嬬婦やもめぐら暮しのものだ、亭主はない身の上だと申しましたから遊びに入らしたのでございます、が、何も訝おかしい事であつたと云う訳ではございません、併しかし斯うなる上は何も彼かもお隠し申しは致しません、実は私も此のお方を嗜すいたらしい好よいお方だと思ひました了簡の迷いから、私の方で無理に入らして下さいとお勧め申して引入れたのでございますから、此のお方には少しも悪い事はありません、重々私が悪いのですから、貴方の思おぼしめし召通しとおりお手討にでも何でもなすつて下さいまし」

成「ム……それは女の方が悪いのじやろう、訝おかしな眼遣いをするか、私の方へおいでなさいと云うか、何か怪しからん挙動そぶりがなければ、そりやア男の方から無闇に主有る女の処ところへ這入つて来るものではありません……じやが仮令たとえ婦人の方で此方こつちへ来いと招いても、主ある者と席とこを俱ともにすると云うのは、治平殿貴方そなたも心得てなすつたので有ろうが、君も前橋あきゆうじでは立派な商人あきゆうじじやと云う事だが、実に此の上ない不品行な事じやアないか」

治「へえ…それでは貴方が此のお方の御亭主さんで」

成「左様」

治「これは何うも心得ませんでした、奥様の仰しやるには御亭主はない、とこう仰しやつてでございました…：がそりやア困りましたね、何うも貴女、然う云う嘘をお吐きなすつては私が迷惑いたしますからな」

成「今に成つて兎や角云つたとて跡へは還らん事じやのう、僕は詰らん者でも、マ幾らか官職を帯びて居る者じや、亭主の留守には宅に居る下男といえども、家内と席を俱にせんと云うのが女子の道じや、然うなければ家事不取締の譏は免がれん事じや、僕も御用に付いて他府県へ出張する事もあり、又は洋行をもする、其の長い間、三年でも五年でも僕の留守中まさか禽獣じやアなし、鎖で繋ぎ置く事も出来ん、併し斯う云う心掛の悪い女子なれば、僕じやとて決して連添つて居る事は出来んから即刻離別して、戸籍は後から送る事に致そうが、マ何うも主ある身の上でありながら、密夫を引入れるなどと云う事がありませんか、左様な事を知らん其方でもあるまいが、余程此の人を想うて居るに相違ない…：治平殿、此の高と云う女を引取り、女房にして遣る心か、但し斯う遣つて遊びに来て居る中の慰みものにする気か、亭主のあるものとは知らんと云いなさるが、風体を見たつ

て大概分ろう、是が茶屋女や芸者じやアなし、宿帳しゆくちようを檢めんと云うのは不都合じやアないか、併し貴公も手を出したからには万更氣まんざらに入らん訳でもあるまいから、真に貴公の妻さいに致して呉れるなら、改めて僕が離別して実家へ沙汰をするから、貴公の方で此婦これの実家へ貰いに往いけば話も早く纏まとまつて、少しも手間の要らん事ことぢや、見合も何も要らん訳じやが、何うか」

七十一

治「へえ：左様でございます、貴方の方で全く愛想が尽きて御離縁に成りまして、此の御内室が御実家へ帰る事になれば、此の方から御実家へ話をしてお貰い申すかも知れません、何も枕を並べた訳じやアございません、其処へお帰りがあつて私を密夫に落されては甚だ残念でがすからな」

成「残念だつて女の首筋へ手を掛けて抱締めた処とこへ僕が帰つて来て、障子を開けたればこそ離れたのであろうが、然そう云う事を云つて何処までも情を張れば、止むを得ずおもてむき公おもと然むきにするばかりだ、けれども然そんな事を為しちやア僕も此の上ない恥辱じやから、敢あえて好みは

せん、好みはせんが貴公の出ように依つて之を公然こうぜんにすれば、云わずと知れた重禁錮、貴公に土を担かつがせる事を好みはせんが、止むを得ん、何うだえ」

治「へえ……私も決して好みは致しません、何うかソノ内分ないぶんのお計はからいが出来ますれば願いたいもので」

成「ウン然うせんければ僕も実に此の上ない恥辱じやアないか、若もし此の事が人の耳に這入つて、明日あすにも新聞紙上へでも出るような事があつちやア僕も勤つとめは出来ず、何うしても職を辞さんければならんから、今霄こよひの中直うちぢくに僕は此者これを一旦連れ歸つて、前橋から高崎まで下さがつて、それから実家へ歸る積りだ、離縁りえんのうえ籍を送つたら、治平殿貴公の方へ郵便を上げよう、え解つたかい、え治平殿、就つては治平殿貴公へちと予が難儀な事を云い掛けるようじやがな、此の女が僕の処とこへ縁付ゆかりいて参る折に千円の持参金を持って参つたから、此の者を実家へ歸す折には、何うしても一旦かど廉かんなく、公おもてむき然しか離縁りえんをするんじやに依つて、此者これが実兄あに深川佐賀町の岩延いわのべという者の処ところへ、千円の持参金に箆筒長持衣類手道具等とうぐい残とらず附けて歸さなければ成らん、処で今此処に僕は千円の持合せがないし、東京へ歸つても至急才覚も出来んのじや、就ては貴公誠に迷惑じやろうが、其の千円の持参金の処を才覚して、一時じ僕に渡してくれんか」

治「へえ千……これは少し驚きましたな、私が千円なんてえ金を中々持つては居りません、え、只今手許には二百金程ありますが、へ、二百金でどうか一つ御内々に願いたいもので」
成「いやさ千円取ったつて僕が取切る訳じゃアない、一旦佐賀町の岩延方へ渡し、此者がまた貴公の処へ嫁す時に、其の千円の持参を持つて往くのじゃ、些とも出すのじゃアない、詰り貴公の懐へ這入るじゃが、然うせんければ事穩かに治まらん、内分沙汰に致すのだから一旦然うして、直にまた其の金を持つて貴公の処へ嫁せば宜いじゃアないか」

治「へえ……併し何うも千円と申しては大金で、何の様に美人だつて、千円出して囲いますような贅沢な事は滅多にございませんからな」

成「いや出せんければ宜しい、無理に出して呉れるとは云わん、僕も君の手から只取るのじゃアない、君は此の女子を愛して首へ手を掛けて引寄せるくらいに思うて居るから、一旦君が千円出して遣れば、其の金を附けて実兄の処へ歸すて……のお高、お前も其の金を持参としてから治平殿の処へ行きなさい、然うすれば宜いじゃアないか」

高「はい……じゃア斯うして下さい、貴方には済みませんが、若し此処で千円出して下されば、仮令兄が千円出さんと申しまして、私は衣類櫛笄手道具から指輪のような物までも売払い、其の他是まで心掛けて少しは貯えもありますから、貴方お厭でも、マ然う

なすつて下さいませんか、今になつて若し否いやだなんと仰しやいますと私は生きては居おられ
ませんから、死にますよ」

成「これは呆れたもんだ……左程まで貴公を想うて」

治「へえ……それでは只今手許にはごさいませんゆえ、永井喜八郎から用達ようだて、貰つて参
りましょう、毎まい年ねん参つて顔も知つて居りますから」

と云捨て立ちにかゝるを引止め、

成「アこれ何処へ往いかつしやる」

治「へえ、鞆を取りに」

成「いや往かんでも宜しい、硯箱もあるから手紙を書きなされ、鞆の中に千円くらい這入
つて居ろう……いや隠したつていかん」

治「でも懷中に印形がありませんから」

成「なければ喜八郎を此処へ呼びなさい、下婢おんなを呼びにやりましょうから、貴公の手で手
紙を書きなさい」

と硯箱を突付けられ、

治「へえ、宜しゅうございます」

と治平は手紙を認めて女中に持たして遣りました。

七十二

治平が手紙を書いて女中に持たして遣ると、直ぐに永井喜八郎に預けて置いた千四百円這入りました重たい鞆を女中が提げて参りまして、慄えながら怖々に治平の背後から出すを受取り、中より千円取纏めて差出し、

治「え、仰せに従い千円の処は差出しますが、金は慥かに受取った、女の処は相違なく貴殿方へ嫁にやると云う確と致した書付を一本戴きませんでは、何分大金でございますから、へい」

成「お前は分らん事を云う人だな、其様な証書を取って公然にする気かい、僕も恥じやから公然には出来ないし、お前も之を公然にすれば何うしたってそれだけの処分につかなければなるまいから、証書も何も要る話じやアない、どうせ此の女が金を持って貴公の処へ嫁くのじやアないか、強いて分らん事を云えば公然に為ようか」

治「へえ、成程……詰り私の方へ廻つて参りますかな……左様なら何卒確とお受取りを願

います」

成「金額に違算いざんもあるまいがお前受取るが宜い、早く勘定をしなさい、面倒でも十円札だから造作もない、ちよつと勘定を為しなさい」

高「はい」

と積上げたる札を数えまして、

高「千円慥かにございます」

成「然そんなら靴へ入れて置きなさい……永う此処に居て、万一他の者の耳へ這入つてもならんし、此の下女も堅い奴と思つたに、斯う云う不始末に及んだが、此の者の口も確と止めなければ相成らん、何にしても何処どこに居ては事面倒だから、至急前橋か高崎まで下さがるが、貴公此の女を見捨てずに生涯女房にして遣こなさい……またお前も治平殿方へ嫁かたう付いたら、もう斯こん様な浮気を為しちやアならんぜ、己いご後斯う云う事をしたらいかんど、治平殿から千金と云う大した金を出して貰つた位だから、仮令たとえ治平殿の方へ再び返るにもせよ、それ程に思つて下さる治平殿に不実があつてはならんぜ、此の上は心掛けを正しゆうして、能く女お子の道なごを守らんければ濟みませんよ」

高「今度は何様どんな事がありましたも、見捨てられても治平さんの処とこは出ません、私は深川

の宅へ帰れば、直に貴方の方へ手紙を出しますから、きつと貰って下さいましよ」

治「深川の何う云うお宅か、ちよつとお書付を願いたいもので」

高「あの、深川佐賀町二十二番地で岩延傳衛と申します」

治「へえ」

とすらく／＼書いて、

治「確とです、間違うといけませんよ」

高「お前さんの方でこそ間違うと肯きませんよ」

と是は最う別れだと思ふのか、お高は治平の膝へ手を突いて、もたつきながら涙を拭きます様子を見て、谷澤成瀬も心悪しく思いましたか、苦々しく顔を反向け居りましたが、成「サ往こうじやアないか」

と立上る途端にガラリと障子を開けて這入つて来ましたのは、例の筏乗市四郎が今年十五歳になる彼の布巻吉を連れて参り、

市「少し此処に待つておいで……はい御免なせえ、少々お待ちなせえまし」

成「何んじや其の方は」

市「私ア市城村の市四郎てえ筏乗ですが、貴方は村上松五郎さんでございますね」

成「え……イヤそれは人違いだ、僕は谷澤成瀬と申すものじゃ、人違いだろう」

市「いやお前さんは元渋谷で腕車くくるまを挽ひいて居なすつた峯松さんと云う車夫だアね」

成「なに……これは怪しからん事を云う、失敬な……車夫とは何んだ、苟いやしくも官職を帯びて居おる者を……大方人違いだろう」

市「人違ひとちがえじゃアねえ……此の奥さんみたような人は慥たしか旧猿若町もとの芸者で小瀧と云つて、中頃前橋の藤本へ来て、芸者に出て居た小瀧さんだアね」

高「な何んですと……まア呆れますね、怪しからん人違いで」

市「いや人違えじゃアねえ、見知り人があるだ……さア此方こちらへ皆みんななお這入んなすつて下せえ」

「御免」

と云いながら這入つて来ましたのは橋本幸三郎で、お瀧も松五郎も見て恟びつくり致し、顔の色を変えました。

橋本幸三郎の跡から続いて這入つて来ましたのは岡村由兵衛と云う、前々橋本の取巻で来ました男で、皆是が見知と成つて這入つて来たのを見ると、お瀧も松五郎も面体土気色に成り、最早遁れる路なく、ぶる／＼手先が慄え出しました。

市「さ旦那さま此方へお這入んなすつて下せえまし」

幸「はい親方此間ア……やい斯うなつたらもうお前方は知らねえと云う訳には往くめえ」

市「どうせ駄目な話だから白状して仕舞つた方が宜かろうぜ、もう遁れる路はないから逃途はない」

幸「やい盗人峯松、其方は何うも大え奴だなア、七年以前に此の伊香保へ湯治に来た時、渋川の達磨茶屋で、私ア江戸ツ子でござえます、江戸のお客を乗せれば此様な嬉しい事はありません……ね此の由さんが鞆を忘れたら態々持つて来て見せやアがったから、私も正道の人間だと思つて目を掛けて、次の間へ寐かす位にまで為てやったのに、何んだヤイ悪党、鼻の下へ附髭か何だか知らねえが生かして、洋服などを着て東京近い此の伊香保へ来て居るとは、本当に呆れちまつたな」

由「これは驚きやしたな……おい／＼もういけないよ／＼、酷いじゃアありませんか、お隣座敷に在らしたお藤さまと、お岩さまてえお附の女中まで引張り出して、私達が先へ

四万へ往つてると、後からお連れ申すつて取持がった事を云つて、折田の山ン中まで連れ出して、お二人を殺したと思つても、お附のお岩さんは殺されたるうが、お藤さまは神が附いてますよ、谷へ落こちたつて、ちゃんとお助け申す人があつて御無事で在らつしやるんだ」

市「イヤ何うだ、彼の時に私が筏の上荷拵えをして居た処へ、山の上から打ち落ちて来た婦人が藤蔓の間へ引懸つて髪の毛工拵み附いて、吊下つて居た危え処を助けて、身内に怪我はねえかと漸々様子を聞くと、私が元三の倉に居た時分、御領主小栗上野さまのお妾腹のお嬢さまと分つたので、私も旧弊なア人間だから、まア宜い塩梅に助かつたつて、婆とも相談のう打つて、然うして久留島さんまで送り届けて、直に四万へ追掛けて往つて掛合をしたが、其の時此の野郎を踏捕めえれば宜かつたアだが……汝此処へ来やアがつて何んだえ化けやアがつて、官員さまのお姓名を騙つて太え野郎だ……これ此処にござる布卷吉さんと云うのは、年イ未だ十五だが、偉えお人だ、忘れたか、兩人共によく見ろ、此のお子が七歳の時汝が前橋の藤本に抱えられて小瀧と云つてる時分、茂之助さんが大金を出して身請えすると、松五郎てえ悪足が有つて、抛ろなく縁を切つたもの、あゝ口惜いと男の未練で、お瀧を殺すべえと云つて茂之助さんが脇差イ持つて往くと、物

の間違てえものは情ねえもので、汝を殺すべえと思つたのが、闇の夜とは云いながら、此の布卷吉さんのお母さんつかを殺した処から、茂之助さんも顛倒てんとうしてしまつて、あゝ濟まねえと思つたか、梁へ紐を下げて首を吊つて死ぬくれえ非業な真似工したのも、皆な汝から起つた事だから、何うかして松五郎お瀧の二人を捜し出し、両親ふたおやの仇あだ、妹の敵かたきを討ちてえと、十三の時から心掛けなすつた其の時に、私も入らざる事だが助太刀を為しようと云つたのが縁となつて、汝を捜しに来たら、丁度橋本さんにお目に懸つたのだ、サ最う斯うぼくが割れたら駄目な話だ」

治「へえー実に驚きました、此のお子は茂之助さんの子かい、へえ……道理で此の女は何処かで見たとやうだと始まりから思つたが、私も斯う係蹄わなに掛るとは知らず、真実私に心があるのかと、男の己惚うぬぼれで手出てだをしたが、お瀧でがんすか、其の時分には眉毛を附けて島田だったか、へえー、何うもずうずうしい奴で……私彼の時貴方あなたのお父さんとつに然そう云つただよ、彼の女を持つてゝは駄目だ、夜々よゝゝ斯う云う奴が這入つて、斯う云う訳があるつて、貴方のお父さんに意見を云つただが、何うも是は、何うも魂消たまげたね、へえー」

幸「やいお瀧、汝てめえ四方に居やアがった時に何と云った、瀧川左京と云う旗下の嬢むすめでござい
 ますが、兄に欺だまされてと涙を落こぼしたを真まに受けて、私わしは五十円と云う金を出し、汝を身請
 して橋場の別荘へ連れてツて、妾にして置くと、何んだ、しおらしく外へ出たたくない、芝
 居へ往ゆくのは勿体ない、旨い物は喰べませんと云ったのは其の筈だ、汝はお尋ねもので外
 へ出る事が出来ねえ、日向見ひなたみのお瀧と云う日蔭の身の上とも知らず、欺されて橋場へ置く
 中うちに強盗おしこみに殺されたと思つたら……由さん何うだえ、ずう／＼しく此処に居るたア」
 由「開化に成つては幽霊が生きて種々いろくなものに化けるんでげしよう、彼あの時棧橋に血が
 流れて居ましたから、旦那も私も必然てつきり盗賊どろぼうに殺されて川ほ中へ投ほうり込まれたものと思
 つて居ましたが、ずう／＼しく大丸鬻うで此処に居ても最ういけないよ、早く正体あ顕あらわして
 おしまい、逃げたつて騒さわいだつて開化の世の中、ピン／＼と電信と云う器械がある、恐ろ
 しい鉄砲時世に成つてるのに、昔流行はやつたつゝもたせ、其そん様な事をして役には立たねえ
 ぜ」

市「さアぐず／＼したつていけねえ、何うだ、返答しろ、どうせ駄目だから、年齢としの往いか
 ねえ布卷吉さんが親の敵を討とうてえが、刃物で斬合うような事ア出来ねえから、尋常に

繩に掛つて、派出も近ちかえから引かれて往くが宜い、然そうして是まで犯した悪事を自訴するが宜いわ、若もしじたばたすれば汝腕うぬを引ひン捻ねるぞ」

と逃げもすれば殴はりとば飛とす勢いで、市四郎は拳を固めて扣ひかえて居ます。松五郎お瀧の兩人は多勢に云い捲まくられ、何も云わず差俯さしうつむ向いて居ました処へ、

山「少々御免下さいまし」

と這入つて来ましたのはお山、年齢とし五十五でございりますが、昔むかし氣質かたぎの武家に生れ、御新造と云われた身の上だけに何処か様子が違います。娘小峰年齢二十五歳で、最う分別も附いて居ります。母と娘は摺寄りまして、

やま「皆さん御免くださいまし」

小峰「お母さん、もつと先へ出してお云いなさいよ」

やま「あい……さ松五郎、此処へ出ろ」

松「やお母つかアか……これは何うも面目ねえ、何うして此こ処へ来た」

やま「なに……これ人非人にんびにん……その形姿なりは何んだ、能くもずうしく其そ様な真似まねをして此処へ来て、まだ性しょうこり懲ちがもなく悪事をするな……皆さま何ともお恥かしく申そうようはございせんけれども、此の者はね貴方……少ちいさい時分から碌でなしの根性で、放

蕩無頼で、何う云う訳か他人さまの物を盗み取りましたり、親の物を引浚ひっさらつて逃げます
 ような悪い癖がございましたから勘当致しましたが、御維新このかたそち己こ来か汝たの行方ばかり捜して
 居たが、東京とうけいには居らんから、大方函館へでも行つたらうと他人さまが仰しやつたが、
 三の倉で旦那さまが彼の騷動あの時、汝は賭博打ばくちうちと組んでよくも旦那さまへ刃向い立てを
 為したな、知らないと思つて居るか、そればかりじゃアない、今承われば殿さまのお胤たねのお
 藤さまを欺して、汝は折田村で殺そうと掛つたそうだが……まアどうも狗いぬとも畜生とも云
 いようのない此こ様な悪人を……私はマア沢山もない子でございりますが、惣領と生れ、跡目
 に成る奴が此様な恐ろしい根性な奴でございすとは、ハア何たる事の因縁かと存じまし
 て、私は此の娘と二人で、毎度松五郎の事を申しては泣暮して居りますが、此の奴に引替
 えて此の娘は柔やさしくして、芸者になつても精出して能く稼いで呉れますから、何うやら斯
 うやら致して居ります」

七十五

やま「実に何うも松五郎のような不孝不義な奴はございません、お父さまの御命日に、お

墓参りでも為た事があるかと、偶に東京へ出てお寺へ往つて、これ／＼のもので年頃はこれ／＼でございませうが、塔婆の一本も供げてお墓参りには参りませうかと、方丈さまや寺男に聞くのも、少しは悪をしながらも、親の有難いも主人の大切な事ぐらいは分りそんなものだと思つて居るのに、つい墓参りをした事もない、尤も然う云う心があれば此様な悪い事も出来ませんが……どうせ遁れる道はないから、私は年を老つて何うなろうとも、小峰の掛合にならんよう立派に名乗り出て、自分だけの罪を被るが宜い……誠に何うも皆様に面目次第もございませう」

と泣き沈むを見て流石の悪人松五郎も心に感じ、

松「橋本の旦那え、私ア何う云う訳で此様な悪い事をしたかと思つてね、今夢の寤めたよ
うな心持で……その布卷吉さんは茂之さんの子たア知らねえ、年の往かかねえで親の敵を討
とうと云う其の孝心を考え、今まで此方の作つた悪事と不孝を思い合せれば、同じ人間に
生れても迷えば此様なにも悪の出来るものかと、我ながら先に先非を悔いて改心致しまし
た、もう何うせ遁れる道もありませんから、斯う云う親孝行な兄さんの手に掛つて死にや
ア本望で、昔なら腹ア切る処でござえやすが、此の家を血で汚しちやア客商売の事ゆえ永
井の家に氣の毒だから、向山へ引摺つてつて思う存分に斬つてしまつて下せえ、決して手

出しは致しやせん、それとも繩に掛け派出へ引いてつて、親の敵を捕まえましたといつて
 処分に附けて下されば、私の罪も消えます、兄さん早く引張つて往つて、貴方のお手柄に
 なすつて下さい……サお瀧、お前も此処らが死しにどころ 処だ、成程考えるとなア茂之さんがお
 前を殺そうと思つて裏口から這入つて来た時、お前は己ん処とけへ知せに来ていて、茂之さん
 のお内儀かみさんが一人で留守居をして居ると、大夕立おおがみなり大雷鳴の真暗まっくらの処とけへ這入つて、女
 房こ児を殺した時の心持は何うだつたらうと、悪事をする中うちにも時々思ひ出すと、余あんまり好い
 心持じやありません……ナアお瀧、手前も時々うな魔された事もあつたな、手前も死処いだぜ」
 瀧「あゝ何うも面目次第もございませぬ……私どもに繩を掛けて、布巻吉さんお前さんの
 思う存分胸の晴れるようにしてお呉んなさいまし」

松「決して手出しは為しませんから引摺つてつて下せえまし」

市「ウン能く覚悟をした、私わしア縛る役じやアねえけれども、逃げ隠れを為ようたつて、捕
 めえたら動かさねえぞ、お役人の手数てかずを掛けるより私が引張つて往ゆく、無闇に人を縛つち
 やア済まねえから、私が手前てめえを捕めえて往いこう」

やま「能く其方そちは覚悟をして繩に掛り、名乗り出る心になつた、人は心から悪いものでは
 ない、一念の迷いから悪い事をすると聞く、何も彼かも知つて居ながら此こん様な事をして……其

方は暴れ者だが、親方さんのような力の強いお方に捕まって逃げ隠れを為ようとして怪我でもするといけないから、尋常に名乗って出る」

小峰「本当に懨じ逃げようなぞとして怪我アしてはいけませんから、おとなしく名乗って出て下さいよ」

七十六

松「大丈夫だよ、どうせ己は無え命だ……あゝ是まで母親には腹一杯瘦せる程苦勞を掛けて置いたから、手前己の無え後は二人前の孝行を尽してくれ、あゝ実に面目なくって何も云えません……何卒直にお引きなすつて下せえまし」

というので、是から市四郎が松五郎の手を捕つて二階を下りましたから、永井喜八郎は驚きました。是より引張つて往き、派出へ此の旨を届けて申立てますと、警部公が一々お書取りに成り、渋谷の警察署へ引かれましたが、桑原治平とお瀧との関係は相對密夫でございますから、詐欺取財未遂犯と云うので処分は決つて居りますが、何分にも謀殺を致した廉がございますので、松五郎は天命遁れ難く遂に死刑に処せられ、復讐と云う事

は尤もない事でございますから、松五郎は此の儘死刑となり、お瀧は悪事を俱ともにただけでございますが、人殺しがございまして重禁錮に処せられて、悪人は悉ことごとくく罰せられる事になり、お文は構かまいなし。跡で只嬉しいのは桑原治平で、千円取られるのを助かったのでございまして、

治「何なんとも共ともお礼の為しようがない」

と、吝嗇けちな人で女の事でなければ錢を使わん人でありませんが、其の時は余程嬉しかったと見え、二百円出して、

治「何うか市四郎さん二百円だけで……」

市「いや私わっちア金を取る訳はねえ」

治「それではせめて此のお子に」

市「此のお子にたつて、布巻吉さんも此の金を受ける訳はないから、何うしても受けられやせん、松五郎が名乗つて出たんで此方こつちの恨みは晴れたが、此の母おふくろ親さんや妹が可愛そうだから、小峯さんを請出して遣つたら、首を斬られた松五郎へ追善にもなり、母親さんも安心だし、親子のものが助かる訳だから、左様そつうなすつたら何うです」

幸「これは宜うがす、お請出しなさい……峯ちゃんが得心なら、縛られて出たお瀧ね、お

瀧より少し器量は少し悪いからお氣に入らんか知らんが、小峯を貴方の女房にして遣つては下さいませんか、此の橋本幸三郎がお媒^{なこうど}妁を致しましょう」

治「へえ、有難う……お幾^{いくつ}歳で」

幸「二十五で」

治「へ、それは有難い事で、女が好^よくつたつて悪党は驚きます、生血^{いきち}を吸われますからな、何うもそれは有難い事で、幸三郎さん何うか願いたいもので」

というので、是から橋本幸三郎が媒^{なこうど}妁で、小峯を桑原治平方へ世話をする事に決し、

前橋豎町へ母お山もろともに縁付きました。此方^{こなた}は予て約束もありますから、橋本幸三郎方へお藤を縁付けたいと云う事で、彼^かの川口町の橋本幸三郎と云う御用達の家へ縁付けました。此の時の媒妁は桑原治平が宜かろうと云うので桑原治平が媒妁になって、お藤は橋本方へ縁付く事になりました、芽出たく事納まつて後、布卷吉は祖父佐十郎を永い間介抱して見送りました後、奥木佐十郎の跡を継ぎまして、桑原治平は生^{いと}系商人だから糸を送り、橋本幸三郎が金を出して呉れましたから、立派に機屋を出して大層栄えました、末お芽出度いお話でございます。又筏乗の市四郎は、只今では長野県へ参りまして、材木屋を致して居^おると云うことを、五町田の百姓^{わたくし}から私が聞いて参りました、其の儘取纏めた愚作でござ

ございますが、此のお話はこれで読切りに相成ります。へい御退屈さま。

(拋酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の三」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の三」春陽堂

1927（昭和2）年1月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号は原則としてそのまま用いました。誤用と思われる箇所も底本の通りとしました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていますが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「小峯／小峰」「峯松／峰松」「桑原治平／桑原治兵衛」の混在は底本の通りです。

入力：小林繁雄

校正：門田裕志、仙酔ゑびす

ファイル作成：

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霧陰伊香保湯煙

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>